Book in Book **10 YEARS OF BABYMETAL IN UK**

METAL HAMMER JAPAN

Vol.7

メタルハマー・ジャパン
第7号

イングヴェイ・
マルムスティーン
オーペス
イーヴァイル
聖飢魔Ⅱ
Mary's Blood
レイザーラモンRG

特集
ヘヴィメタルは
イントロで聴け！
with人間椅子

The Documentary
スラッシュが世界を
制覇した瞬間

最新作『戦術』を斬る！
アイアン・メイデン
ブルース・ディッキンソン
&
ヤニック・ガーズ

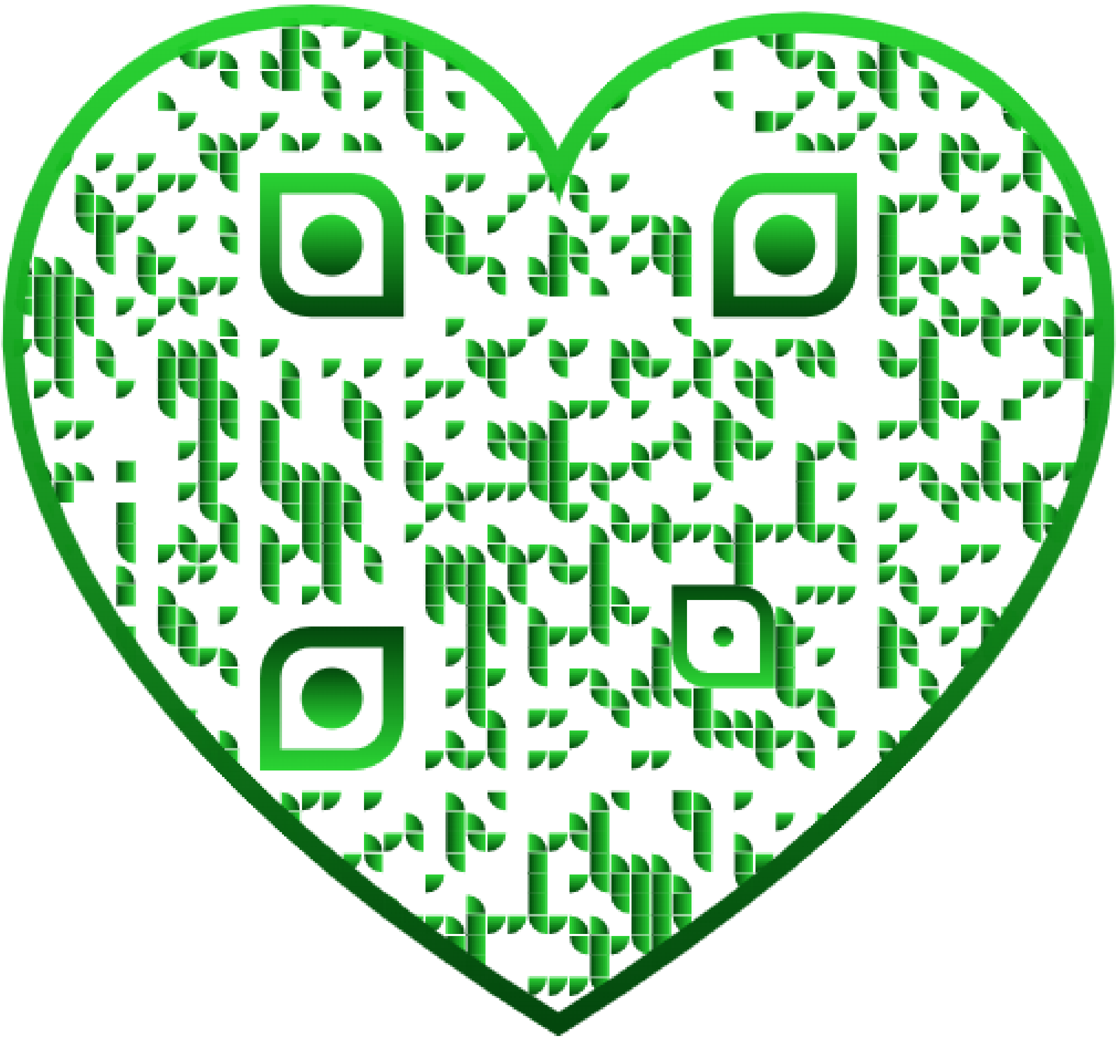
Slipknot

R.I.P
Joey
Jordison

『アイオワ』20年目の超激

BABYMETAL
～英国が見た彼女たちの10年

Rittor Music Mook



METAL HAMMER JAPAN

METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1]～[Vol.6] 好評発売中!　お求めは全国の書店・webサイトにて

METAL HAMMER JAPAN Vol.1
価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **オジー・オズボーン**
○最新インタビュー○ 40 年目の『ブリザード・オブ・オズ～血塗られた英雄伝説』

フィリップ・H・アンセルモ／BABYMETAL／スリップノット／アウトレイジ／デイヴィッド・エレフソン／トリヴィアム／KOЯN／エヴァネッセンス&ウィズイン・テンプテーション／アモン・アマース／バロネス／LOVEBITES

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.2
価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **ドリーム・シアター／ジェイムズ・ラブリエ** ○1992 年のドリーム・シアター ○アイアン・メイデンはいかにしてプログレッシブになっていったのか!?

メガデス／キング・ダイアモンド／ミルクル／メシュガー／コード・オレンジ／ディジー・ミズ・リジー／ジューダス・プリースト／サバトン／ブラッド・インカンテンション

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.3
価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **from 1985 to 2001 アイアン・メイデン LIVE の刻印**
○ジューダス・プリースト：『ブリティッシュ・スティール』40 周年
○炎立つスラッシュ・メタルの 1986 年

ビリー・シーン／マイケル・ヴァイカート／マイケル・アモット／キコ・ルーレイロ／ラム・オブ・ゴッド／ベリー・トゥモロー／メイク・ゼム・サファー／KOЯN

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.4　価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **BABYMETAL** 彼女たちが突き進んだ 10 年……その視線の先にある未来
○ブラック・サバス：『パラノイド』50 年目のドゥーム・ロード

カーカス／アイアン・メイデン／ナパーム・デス／ブリング・ミー・ザ・ホライズン／パワー・トリップ／ゴーストメーン／LOVEBITES／水野真紀

...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.5　価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **エヴァネッセンス**
○エイミー・リー／ウィル・ハント
○女性シンガー飛躍のヒストリー

追悼 **アレキシ・ライホ**
○フィニッシュ・メタルの血統

BAND MAID／ハロウィン／プリティー・レックレス／ゴースト／エイリアン・ウェポンリー／ヘイトブリード／LOVEBITES／聖飢魔Ⅱ／谷原章介　...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.6　価格 1,650 円（本体 1,500 円+税 10%）

Special Feature **アグレッシブでいこうぜ!　フィリップ・H・アンセルモ / ゲイリー・ホルト** ○ハロウィン / アンディ・デリス×マイケル・キスク
○アイアン・メイデン『キラーズ』の内側　○グレイテスト・ソングス TOP100

GOJIRA / 聖飢魔Ⅱ / ポール・ギルバート / ラム・オブ・ゴッド / システム・オブ・ア・ダウン / FUTURE FOUNDATION ...and More!

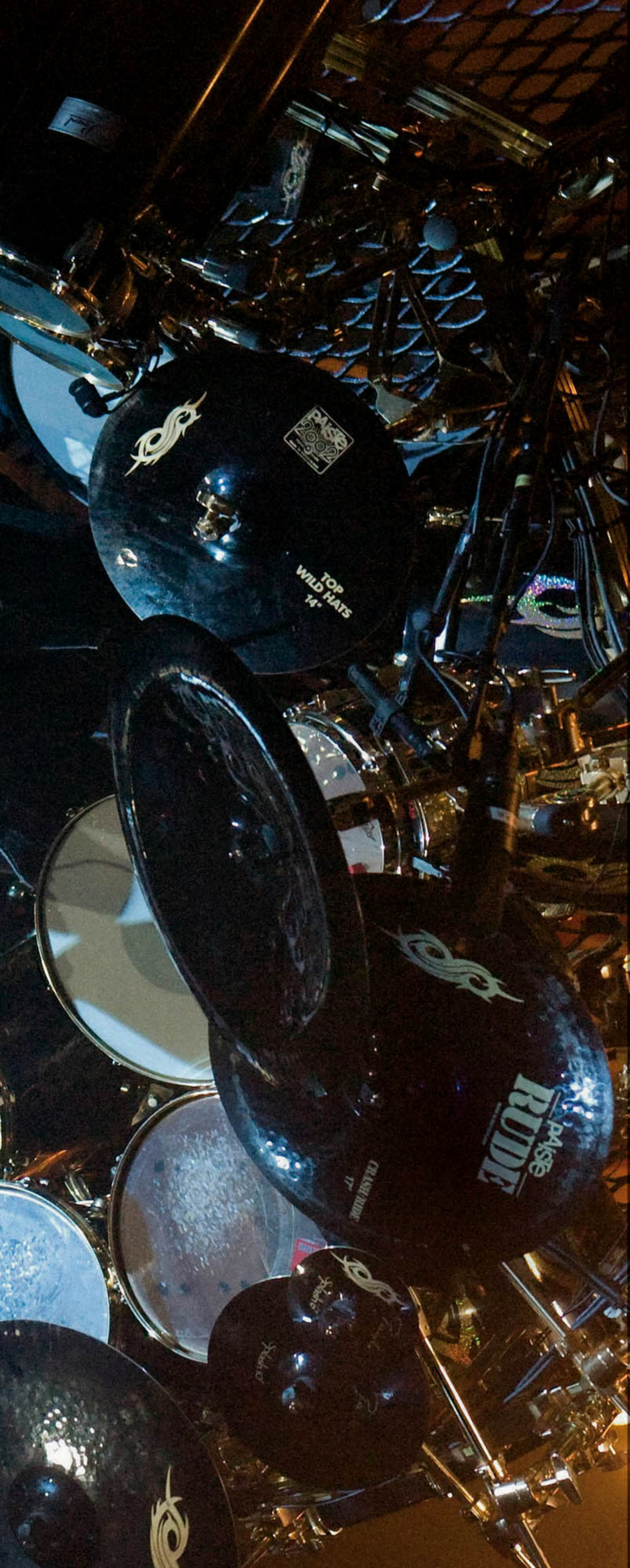
[Vol.8]は2021年12月発売予定!

□編集部からの叫び!
日々のオフィシャル Twitter はこちら
>> @MetalHammer_Jp

THE BIG PICTURE

THIS IS THE MOST EXTREME DRUMMER!!!

Photo by Nigel Crane/Redferns



REMEMBERED

ジョーイ・ジョーディソンの訃報を聞いて、深い悲しみに襲われた。彼の友人、家族、ファンたちに私の想いと祈りが届くように。
──オジー・オズボーン

音楽界のレジェンドのひとりよ、安らかに眠れ。ジョーイの貢献によって、この世界のヘヴィ・ミュージックは我々の知る姿に変わった。
──マシュー・ヒーフィー（トリヴィアム）

優れた才能を持ったソングライター、アメイジングなドラマー、グレイトなギター・プレイヤー、そして愉快な人間だった。俺らの人生は何度も寄り添ってきた。なんてこった、心が痛む。あまりにも若過ぎるよ。
──ロブ・フリン（マシーン・ヘッド）

ジョーイ・ジョーディソンの訃報を聞き、完全に打ちのめされてしまった。驚異的なドラマーであることに加え、彼は常にオシャレな男だったんだ。
──マイク・ポートノイ

レジェンドよ、安らかに眠れ。
──コード・オレンジ

ジョーイ・ジョーディソンよ、安らかに眠れ。お前はスリップノットで変革をもたらした。ブラスト・ビートをメインストリームに持ってきたんだぜ！　お前にしかないグルーヴをキッズにもたらした。俺らの『パーシヴィランス』はジョーイとスリップノットがいなければ存在していなかっただろう。
──ジェイミー・ジャスタ（ヘイトブリード）

これは辛い。私は失望感で一杯。私の想いは彼の家族、友人、かつてのバンド仲間、そして彼のプレイを愛して憧れてきたすべてのファンたちとともにあります。
──オーテップ・シャマヤ（オーテップ）

ブラザーであるジョーイ・ジョーディソンよ、R.I.P.。愛しているぜ、ブラザー。
──パパローチ

ジョーイ・ジョーディソンは逆立ちして叩いても、普通に叩くどんなドラマーよりもグレイトだったよ。
──ジンジャー・ワイルドハート
（ザ・ワイルドハーツ）

よき友であるジョーイ・ジョーディソンの訃報に、俺らは悲しみのどん底にいる。グレイトなミュージシャンであり、グレイトなひとりの男が俺らのもとを去ってしまった。俺らの愛を彼の家族に贈る。R.I.P.
──アンスラックス

JOEY JORDISON

1975-2021

文：竹内伸一

（ライター／編集者／元『リズム＆ドラム・マガジン』編集部）

究極のカオティック・ドラマー　ジョーイ・ジョーディソン

2021年7月26日、ジョーイ・ジョーディソンが亡くなった。享年46歳。死因は明らかにされていないが、睡眠中に息を引き取ったとされている。スリップノットで披露した壮絶なジョーイのドラミングは、多くのキッズにスティックを握らせるほど魅力に溢れており、英国の打楽器専門誌では2010年に《過去25年間で最高のドラマー》に選ばれたほど。21世紀最初の“ドラム・ヒーロー”。彼はそう呼ぶに相応しい存在だった。

※

ドラマー、ジョーイの特徴と言えば、細かく高速に動くフットワークを軸にしたテクニカルなドラミングといったところだろうが、何より魅力的だと思うのは、スゴいプレイをわかりやすく提示していること。

それは複雑なことをせずにシンプルなドラミングに徹するという類のものではなく（彼のドラムを聴いてそう思う人はいないと思うが）、ブラスト・ビートや高速のフットワークを効果的に盛り込むことで“今、ドラムでスゴいことが起きている”のを的確に伝える。ドラムを演奏しない人でも、ジョーイのそんなプレイを聴けば“なんだかすごい！”と感じたことだろうし、だからこそ、自分もやってみたいと思わせたのだろう。

しかも、奇妙なマスクを付けたアニメ・キャラクターのようないで立ちで、激しいアクションを伴ってドラムを叩きまくる。ときには、空中で回転するドラム・セットというような大仕掛けまで駆使して。70年代にキッスがキッズのヒーローとして君臨したように、テクニックと華やかなエンターテインメント性を兼ね備えたジョーイの姿もまた多くのキッズを惹きつけるに充分なものだった。

このように書くと、エゴイスティックに自身のプレイを誇示しているみたいだが、ドラムより先にギターを始めた彼は、バンドの中心的なコンポーザーでもあり、すべては楽曲を生かすために演奏されたものであった。『アイオワ』リリース時には“KOЯN やリンプ・ビズキットと一緒にされてしまうから、自分たちがエクストリームなメタル・バンドだと示すために、ブラスト・ビートを多く取り入れた”という趣旨の発言をしていた。

※

かつてドラム専門誌の編集をしていた筆者は、初来日時にライヴ会場のステージ上で機材を撮影した。すると、小柄な青年が登場。もちろんジョーイなのだが、当時は素顔を明かしていなかったので、いぶかっていたら“俺がジョーイだよ。ほら、刺青が一緒だろ”と話しかけてきて、機材について丁寧に解説してくれた……この話、実はすっかり忘れていたのだが、先日、撮影を担当したカメラマン氏から聞かされ、おぼろげに思い出した次第。

ともかく、彼の人柄を端的に表わすエピソードだと思う。そういえば、2度目はサマーソニックの楽屋でインタビューをしたが、多くの取材を受けていたため、取材時間が押しに押して自分たちのインタビューが出番のギリギリになってしまった。にも関わらず、本番直前まで真摯にドラムと音楽への思いを熱心に語ってくれたのを思い出す。

類稀なるテクニックと情熱で世界のトップ・ドラマーのひとりとなった彼のプレイと、作り出す音楽をもう聴くことができないのは残念でならない。御冥福を祈りたい。

CONT

Slipknot

20年目の超激 From UK P.20

── 衝撃的重音作『アイオワ』の誕生と、崖っぷちにいたそのバンド

●追悼グラフ：ジョーイ・ジョーディソン P.4

2001年にリリースされたスリップノットの2ndアルバム『アイオワ』は、1st作が持つ破壊力をさらに凌駕する絶対的ヘヴィ作となった。ただし本アルバムが生み落とされようとしていたそのとき、デビューから2年目にしてバンド内は早くもカオス的状況に陥っていた。バンドの象徴でもあるコリィ・テイラー、ショーン・クラハンを始めとした関係者が、20年目の『アイオワ』の真実を語り出す……。

IRON MAIDEN From UK P.10

最新作『戦術』を斬る！

6年のときを経て、究極のヘヴィメタル・バンド、アイアン・メイデンが17枚目のスタジオ作をリリース！“『SENJUTSU』＝『戦術』”と日本語のタイトルを冠した本2枚組アルバムにて、エディは怒りの荒武者へと姿を変えたのだった。ブルース、ヤニックの言葉を始め、ケヴィン・シャーリー（プロデューサー）、マーク・ウィルキンソン（イラストレーター）からのメッセージとともに、多様な戦術が織り込まれた本作を斬る！

ブルース・ディッキンソン & ヤニック・ガーズ

BOOK in BOOK P.65

デビューから10年、先日にはこれまでのLEGEND＝ライヴの“封印”が告げられたBABYMETAL。彼女たちの現在までの歩みを振り返るとき、本邦と並び要地となったのが、“ウェンブリー”や“ソニスフィア”といったエポックメイキング的公演を行なったイギリスだ。第二の故郷とも言える同国にて、彼女たちの10年はどう映っていたのだろうか？　ロブ・ハルフォードを筆頭とした盟友的メタル・ミュージシャンから、英国レーベルやフェス運営関係者まで、我々日本人とはまた違った視点で見たBABYMETALの活躍と真価。

BABYMETAL

～英国が見た彼女たちの10年

□スペシャル・インタビュー
ロブ・ハルフォード／ハーマン・リ

P.42
ヘヴィの流儀 #4
YNGWIE MALMSTEEN

久しぶりのオリジナル・フル作『パラベラム』をリリースした“王者”イングヴェイ。流麗なクラシカル・アプローチが彼最大の個性であり持ち味であるが、こと“ヘヴィであること”について本人はどのように考えているのだろうか！？

クラシック・ミュージシャンが解析する P.48
イングヴェイの音楽はどうクラシカルなのか！？

メタル界における“ネオ・クラシカルの権化”たるイングヴェイであるが、クラシック畑のミュージシャンが聴いても本当にクラシック的なの？　代表曲とともに、音楽的構造を解析♪

ENTS

The Documentary

CLASH OF THE TITANS

《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》
──スラッシュが世界を制覇した瞬間

From UK P.30

1990年のメタル的トレンドであったスラッシュ・メタルの主要バンドがそろった《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》。その後のツアー・フェスの原型のひとつともなった同イベントを、ケリー・キング、デイヴィッド・エレフソン、スコット・イアン、チャック・ビリーといった中心人物たちが掘り起こす。

聖飢魔Ⅱ P.96

デーモン閣下

3号連続登場となる聖飢魔Ⅱからは、いよいよその頭目、デーモン閣下が見参！　ゼウスの妨害に合いつつも、10月からは《ヴィデオ黒ミサ》としての全国行脚が始まろうとしている。そして、なにやら新譜制作の声も……。聖飢魔Ⅱ流ヘヴィメタルについて、デーモン閣下が大いに語るっ！

EVILE

From UK P.38

“スラッシュ・シーン次代のエース”と期待されながら、イーヴァルはその大波に乗れなかった。そしてバンドはバラバラに……しかし、オル・ドレイクは数年のときを経てシンガーとして復帰。ここから新たなるスラッシュ・リバイバルが始まる！

Mary's Blood

EYE×RIO P.88

バンド名を冠した6thオリジナル・フル作『Mary's Blood』をリリース直前のMary's Bloodからは、ヴォーカリストEYEとベーシストRIOが登場！“自分たちのヘヴィメタル”をテーマにした新譜について熱く語ってくれたぞ。

OPETH

From UK P.104

オーペスの存在を決定づけた作品と言えば、多くの人が『ブラックウォーター・パーク』を思い起こすことだろう。しかしミカエル・オーカーフェルトは、本作を最後に別の仕事を探そうとしていた。あれから20年、転機となったこの代表作は、ミカエルにとってどのようなアルバムなのだろうか。

◎特集 P.52

ヘヴィメタルはイントロで聴け！

with 人間椅子

ポップスの世界では“冒頭から歌でつかむ”、“すぐにサビを聴かせる”のが主流になっているようだが、やっぱりヘヴィメタルなら強烈なイントロこそ超重要！　そこでヘヴィメタルのイントロを“ジャンル”、“年代”、“構造パターン”など、さまざまな角度から考察していく。後半では人間椅子がイントロの重要性を『苦楽』とともに分析！

◎新レギュラー企画

NEW NOISE P.112

日本ではまだまだ知られていない“未知なる強豪”を、毎号8バンド程度ピックアップ！　ネクスト・ブレイクスルー・バンドがここに！

LET'S TALK METAL! P.82

レイザーラモンRG

“メタルあるある”でもお馴染みのレイザーラモンRGが登場！　聖飢魔Ⅱでメタルの洗礼を受け、心の入場曲はドラゴンフォース、現在は“あるあるメタルオールスターズ”としてステージにも立つRGが、メタル愛を叫びがち！

SAKI (Mary's Blood/NEMOPHILA)

×メタル・ウイスキー P.126

ハイボールをこよなく愛するSAKIが、スリップノット&スコーピオンズ・ウイスキーをテイスティング！

..and more!

STARS' WORDS P.64

DISC REVIEWS P.116

METAL NEW GEAR P.122

The latest article from UK

Text by Dom Lawson
Photo by John McMurtrie
Interpretation by Tommy Morly
Original『METAL HAMMER』352

IRON MAIDEN

82 MINUTES. TEN SONGS. ONE SAMURAI.

BRUCE DICKINSON
ブルース・ディッキンソン
&
JANICK GERS
ヤニック・ガーズ

前作『魂の書〜ザ・ブック・オブ・ソウルズ〜』から６年、ヘヴィメタルの象徴たるアイアン・メイデンが、17 枚目となる新作『戦術』をリリースした。原題も“SENJUTSU”であり、侍と化したエディを見るにあたり、“日本”が色濃く表われた一枚であることは一目瞭然だ。

ただ、実は当パンデミック以前に作られた作品であり、今回特別インタビューに応じてくれたブルース・ディッキンソン、ヤニック・ガーズによれば“バンドをあまりにも理性的な状態から追いやってしまったため、お披露目に至るまで 2 年のときを費やした”という……！？　プロデューサーのケヴィン・シャーリー、イラストレーターのマーク・ウィルキンソンの言葉も加え、この 10 曲・82 分に及ぶアルバムにどのような背景があるのか迫ってみたい。

メタル・シーンの光明となるであろう待望の新作を手に、アイアン・メイデンはどのような戦術で、暗雲に覆われたエンターテインメント・シーンを斬り開いていくのだろうか！？

『戦術』ワーナー

●通常盤（CD × 2）／ WPCR-18449/50
●デラックス・エディション（スリップ・ケース付ブック仕様）／ WPCR-18447/8
●完全限定ボックス・セット（輸入盤国内仕様）／ WPZR-30916/8

DOUTRINADOR

昨今の18ヵ月間は、多くのミュージシャンにとって、相次ぐスケジュールのキャンセルによる悪夢の日々だったに違いない。しかしブルース・ディッキンソンはどうだっただろう。17枚目のスタジオ・アルバムをリリースするとの情報を受け、本誌がメイデンのシンガーを直撃した際、彼の眼には絶えることのない炎が燃え盛っていた。

彼の普段着として定着してきた競技自転車用ウェア一式（黒一色のベストとパンツ）を身にまとったブルースは、にこやかな笑顔とほとばしる情熱とともに我々を迎えてくれた。しかし、この最強のアルバム『戦術』について我々が質問を投げかけると、ブルースの口調には明らかに熱が入り、再び世界を巡る日を心待ちにしている様子がひしひしと伝わってくる。

我々が最後に彼と接触したのは2015年の『魂の書〜ザ・ブック・オブ・ソウルズ〜』リリース前夜のことで、当時は咽頭がんとの闘病による離脱を経て、落ち着いた様子を見せていた。そのときとは対照的に、今のブルースは次のステップについてあからさまに興奮している。我々にアルバムの全容をチラリと公開することが許可されたことに、彼は喜びの表情を見せてくれた。

ブルースは机に前のめりになり、満面の笑みで"グッドなアルバムだろう？"とひと言。答えはもちろん……ファッキン・グレイト！……だ。

この未曾有の事態によって、驚いたことに英国が誇るバンドの17枚目のスタジオ・アルバムは、ひっそりと地下室の金庫のなかで2年近く保管され、エディとその同胞たちによって守られてきた。

パリの［ウィリアム・テル・スタジオ］にて、長年のコラボレーターであるケヴィン・シャーリーを迎えて再びレコーディングが行なわれた本プロジェクト。《レガシー・オブ・ザ・ビースト》と銘打たれたメイデンのツアー前半戦の直後、そのライヴ活動の休止期間に『戦術』は完成していたのだ。

"もともとの計画だと《レガシー・オブ・ザ・ビースト》の後半戦が終わった頃にアルバムを出すことになっていたんだけど、それは一旦延期となり、さらに再延期となっていったんだよ"とブルースは顔をゆがめる。"だから俺らは本当ならアルバムを作り終えた状態で、ツアーに出ていたはずだったんだ！　ニコなんてスタジオにやってきて、作業を始める前にイラついた表情で「一体なんで俺らはアルバムを作るんだ！？　クソッ！　俺は休暇を過ごすはずだったんだからな！」とかって感じだった。笑えるだろ？　だから「まぁ、とにかく今やっとくに越したことはない」って感じで、とにかくやり切ったんだ。ツアーが終わったら、すぐさま世界中がクソみたいな状態になっちまったから、ある意味ラッキーではあったね"。

アイアン・メイデンはパンデミック直前、2019年10月15日にチリのサンチアゴにて最後となるライヴを行なった。世界中でさまざまなイベントがキャンセルされていくに連れて、《レガシー・オブ・ザ・ビースト》ツアーの完走は不可能なことだと明らかになっていく。多くの人が想定した以上に、この状況は長期化していくことになる。

当時のことをブルースは次のように話す。"俺は最初、パリでロックダウンを経験することになってね。3月の日差しが心地よかったあの日、俺はパリでバルコニーに座っていたんだ。いや、むしろ季節はずれの熱波がやってきて、かなり暑かったくらいだったな。ロッド（スモールウッド／アイアン・メイデンのベテラン・マネージャー）に「俺らもマスクを着用しなくては！」と言ったら、「いや、俺らは絶対にそんなもの着けないぞ！　こんなのはすぐにいらなくなるさ！」なんて言っていたんだけど（笑）"。

世界各地で混沌とした状態が勃発していた一方で、アイアン・メイデンは新たなスタジオ・アルバムを完成させたが、彼らはそのことを完璧にシークレットにしなければならなかった。そして実際にそうされたが、彼ら自身からも隠すこととなった。

"レコーディングの終盤ともなるとみんな家に帰っていたんで、基本的にスタジオには俺、スティーヴ（ハリス）、ケヴィンが残っていて"と、ブルースが回想する。"何度か聴き返し「よし、これはイイね！」という感じだっけど、俺はそれから2年くらいそいつを聴くことはなくて。俺らみんながだよ！　バンドの誰もコピーを持っていなかったんだ！　特にスティーヴなんて誰かが不意にインターネットでリークしてしまうんじゃないかと神経質になっていて、いろいろと理由をつけて鍵をかけた金庫に保管していたくらいだから。俺が再び聴くことになったのはメキシコでのライヴの素材（2020年のライヴ・アルバム『ナイツ・オブ・ザ・デッド、レガシー・オブ・ザ・ビースト：ライヴ・イン・メキシコシティ』）のミキシングを行なっていたときだ。スティーヴに寄っていって「お前は次のアルバムの音源のコピーなんて持ってない

"NICKO CAME IN AND SAID, 'WHAT THE FUCK ARE WE MAKING A RECORD FOR?!'"

BRUCE DICKINSON

ニコがやってきて"クソッ、なんで俺らはアルバムを作るんだ！？"と言っていてさ。
——ブルース・ディッキンソン

よな？」って聞いたら、「俺のパソコンのなかに入っていると思うな！」という感じで。しかもアイツはほんの数回程度しか再生していなくて、俺と同様何年も聴いちゃいなかった。「なんだよ！　デカいスピーカーで聴こうぜ！」となり、そこで俺はやっと「なんてこった、けっこうグッドじゃないか！」と堪能したんだ”。

本作のできばえは、完全にブルースの言うとおりだ。メイデン・ファンはクォリティの高いアルバムに慣れてしまっていて、それはここ20年の輝かしいアルバムたちに強く言えることでもあるが、それでも『戦術』はさらにビッグなサウンドで、ブルースとギタリストのエイドリアン・スミスが復帰した1999年以降にレコーディングされたどのアルバムよりもエモーショナルなものとなった。彼らが再びスティーヴ・ハリス、ニコ・マクブレイン、デイヴ・マーレイ、ヤニック・ガーズらと合流してから、実に充実した20年もの年月が流れていた。

今回のアルバムも一聴してメイデンだとわかる爆発的なサウンドがあるにも関わらず、サプライズで溢れたアルバムにもなっている。巻き起こる台風やモンスターのような激しさを持ちながらも、プログレッシブなグルーヴを持った「タイムマシーン」、ブルージィでストンプや騒動が聴こえてきそうな1stシングル「不吉な予感」、プログレの迷宮に誘うかのようなリフと渦巻くメロディが耳を惹く「羊皮紙」……と、『戦術』は豪華でクラシックなメイデンらしさを届けると同時に、さまざまな変化球を送り出しているのだ。

“今でも定まった規範から一歩踏み出して考えられているのは素晴らしいことだ。「不吉な予感」は1stシングルとしてはグレイトなチョイスで、さらに素晴らしいのは、これがアルバムのほかの曲を何ひとつ暗示しちゃいないってこと。“The Writing On The Wall” じゃなく “The Writing Off The Wall”（※壁に表示はない、という意）ってタイトルにすべきだな！” とブルースは笑いながら説明する。

“I DIDN’T HEAR THIS ALBUM FOR TWO YEARS”

BRUCE DICKINSON

俺はこのアルバムを2年間まったく聴いてこなかった。──ブルース・ディッキンソン

とは言え、やはりメイデンらしいサウンドがあり、ほかの何者でもない音楽でもある。“こういったカラーの曲もやれるんだぞ” という実感とともに、彼らはスリルも感じているのだろうか？

“まさしく、そのとおりだね。この曲だって俺たちらしいサウンドだ。エイドリアンと一緒になって曲を組み立てていたとき、彼がリフを持ってきてくれて。エイドリアンはいつだってリフをたくさん持っているからさ。作業を進めていくに連れて俺はメロディと詞を重ねていったんだけど、この曲は自然と導かれるように書けてしまったんだ。俺らは「良くも悪くも、コイツはちょっと飛び抜けた曲になってないか？」って感じだったけど、アリー（スティーヴのこと）は気に入ってくれたようで。彼は「このケイジャン（※米南部）っぽいフィーリングがいいね！」って具合だったんだ。俺とエイドリアンは互いに見合って「ケイジャンだって？　了解、そいつはいいぜ！」って感じだったさ（笑）。だってグレイトなフィーリングがあるってことだからね。ひょっとしたらサンダーみたいなバンドを聴いていると思う人もいるんじゃないかな”。

確かにドラムが入ってくるまでなら、それもあり得る……。

“そうなんだ。このアルバム全体のドラムは、いい意味でかなり馬鹿げているぜ。少々良すぎるくらいさ。正直なところ、ニコのドラムは今までのなかでもベストだと言えるよ。神に誓うが、『頭脳改革』や『パワースレイヴ』の頃にさかのぼっても、今回ほどグッドなドラムはなかったんじゃないかな。それだけ彼はこのアルバムで出し切っていたよ”。

ブルースとの対面の一週間後、鎖から解き放たれたフロントマンの勢いとは対照的に、ギタリストのヤニック・ガーズは明るいムードで我々

"I GOT DEATH THREATS"

SPECIAL INTERVIEW-1

KEVIN SHIRLEY
ケヴィン・シャーリー

ケヴィン・シャーリーは2000年の『ブレイヴ・ニュー・ワールド』以降、本作に至るまでアイアン・メイデンのアルバムをすべてプロデュースしている。そんなキーマンと言える彼が『戦術』の秘密について語ってくれた。

「ケルト人の死」は、21世紀のメイデンのすべてが収められている。

──『戦術』では、どの曲から手をつけていったんですか？

彼らが作業していった順番まではわからないんだけど、どこかに記憶が残っているはずから、日を追ってさかのぼることもできなくはないかな。タイトル・トラックの「戦術」については、エイドリアンがオリジナルのアイディアを持ってきたのを覚えていて、彼はそれをもとにスティーヴと一緒に書いたんだ。デモにあったパートもいくつかはそのまま使っているよ。「不吉な予感」はあとの段階になってから作業をしたはずだね。

──前作から6年もの月日が経ちました。いつものやり方に慣れるまで、どのくらいの時間がかかりましたか？　それとも再びゼロから構築していくような感じだったのでしょうか？

それはまるで、先週終えたばかりのセッションの続きをやるような感覚だったよ。ヤニックはアイリッシュ・パブに行き、エイドリアンは釣り、ニコとデイヴはゴルフに行っていた。ブルースはもっとエクストリームなこと……今回はフランスの代表チームとフェンシングをしてアキレス腱を痛めていたから。スティーヴは僕とデニス（キャリボウ）と一緒にスタジオで作業をしてくれたよ。毎日同じようなことをくり返していたけど、これはいい意味で、という感じだったね。

──これからの『戦術』リリースに向けて、何か心配をしていることはありますか？

一部のメイデン・ファンから寄せられる声には、"ツラの皮を厚くして構えていないといけない"ってことを学んだよ。まだ彼らをプロデュースし始めたばかりの頃、暴言や殺しの脅しがたっぷりと書き連ねられたEメールを受け取ったこともあってさ。僕がマーティン・バーチじゃないからってことで攻撃され、そういうものに対してはなんてことはないものとして無視するしかなかったよね。それでも僕はアルバムを愛しているし、もちろんファンにも気に入ってもらえると嬉しいね。これらの曲がライヴでプレイされる日が待ち遠しいよ。

──『戦術』のなかで、あなたのお気に入りの楽曲を教えてください。

「ケルト人の死」は、僕のお気に入りかもしれない。この曲には、21世紀のメイデンのすべてが収められているよね。とてもムーディなイントロで、スティーヴ・ハリスの典型的なアコースティック・ベースのラインは、まるで昔のジェスロ・タルのようなメロディさ。ブルースは歴史上の英雄伝を複雑なメロディとともに伝え、ヘヴィかつ陽気なケルティック風ギターが重ねられていく。これは実在していたストーリーで、歌詞を繰り返すこともなく……そう、シングルっぽいものとは違うんだ！　そしてエイドリアンのナイスなソロがあって、再び複雑な音楽を挟み、そしてギャロップしたリズム、シンガロングするケルティックなギター・セクションへと続いていくんだ。つまりこれは、メイデンのあらゆるものがひとつの曲に収まっているってことなんだよ！

のインタビューに応じてくれた。

終わりの見えない2年近くに及ぶこの混沌とした状況のなかで、このベテラン・ギタリストはいくつかの節目を逃してきた。2019年の終わり頃、彼は30年にも及ぶ（そして彼は常にエディにギターを叩きつけ続けている）アイアン・メイデンのメンバーであることを祝い損ねてしまった。それでいて『戦術』が自身にとって10枚目のスタジオ・アルバムになったことについて、純粋に驚いた様子でもあった。

ヤニックは今回のアルバムについて実に興奮している様子で、**"かなり昔のように感じるよ！"**と制作の過程でどれだけ楽しんでいたのかを語ってくれた。

"大体オレたちは一度集まって数週間のリハーサルを行ない、かなり曲を体に擦り込むようにしている。今も昔もスタジオに入ったら、1曲もしくは1セット分のアイディアを多めに用意して、スタジオで作り上げていくものなんだ。でも今回はそれでさえも覚えてプレイできるようにして、しかも最大限にフレッシュな状態に保っていたよ。オレたちのバンドはたくさんのアイディアを持っていて、誰もが絶えず供給し、どの曲もより一層いいものにさせようと努めている。バンドとして曲を作るときには本物の仲間意識が存在していて、誰しもがベストなものを作りあげたいと考えているんだ。これってかなりエキサイティングなことだし、そうあるべきだと思わない？　スタジオにやってきて、流れ作業をくり返していくだけなんて楽しくないじゃないか。メイデンから次に何が生まれるかなんて誰にも予測できないし、それこそこのバンドの強みのひとつだから"。

新たなアイディアに取り組むことへの関心の強さ、そして作りあげてきた方程式に少しずつ変化を加えることを厭わないバンドの姿勢は、ここ数年の彼らに勢いを与えてきた。『戦術』には『魂の書〜』に収録された18分に及ぶ大曲「エンパイア・オブ・ザ・クラウズ」のように野心的で華美な曲は収録されていないが、冒険心は隅々に散りばめられている。

"そうだね、オレらは常にさまざまな道のりを探している"とヤニック。**"オレらはメイデンらしい道筋を歩んでいるけど、どんなものを持ち込んだってかまわない。「うーん、これはメイデンらしくないな……」なんていうアイディアだったとしても、それは持っていくべき価値があるんだ！　ニコのあの叩き方、スティーヴのベース、そしてデイヴとエイドリアンと一緒にプレイしてみたら、いつの間にかとてもナチュラルなものに仕上がっているんだ。オレらは腰を据えてたくさんのものを作業するわけじゃなくて、とにかくプレイして馴染ませていく。誰も指図されることなんてないし、それがいつの間にかメイデンらしいサウンドになるんだね"**。

ニュー・アルバムにて、ヤニックは2曲で作曲クレジットされている。短くてキャッチーかつシャープな「戦略家（ストラテゴ）」と、恐ろしさでクラクラするような「タイムマシーン」は、ともにスティー

“IT’S NOT ABOUT PLAYING THE SAME SONGS OVER AND OVER”

JANICK GERS

同じ曲を何度も繰り返しプレイすることが目的じゃないんだ。
——ヤニック・ガーズ

ヴ・ハリスとの共作だ。スタジオでのオープンで自由に楽しもうとするメイデンのスタイルには、ヤニック自身悦びを感じているようだ。

“オレたちはこれからも互いを驚かし続けていくんじゃないかな。ここまでアイディアが溢れているバンドでプレイしたことはないからね。常にアイディアが飛び交っていて、使われなかったネタもけっこうあるからさ！　昔はアルバムって40分くらいだったけど、今回のアルバムの内容を見てみれば……もはや3枚組みたいなもんだろ！”。

そんなヤニックは、特にブルースとニコがこのアルバムでベストな状態だったということにも賛同するのだろうか？

“もちろんさ。ニコはグレイトなプレイを披露してくれた。彼はエネルギーに溢れる人だ”と返答する。

“彼はバンドの原動力で、オレたちをプッシュしてくれる存在だよ。驚異的な性格の持ち主で、考えつくだけでも5人分くらいのキャラクターを持っているんじゃないかな（笑）。バンドの後方にはいつも原動力が必要だ。彼は来年70歳になるんだろ？　それでも10代のようにプレイしている。これって本当に驚異的なことだよ。ここまでソリッドに叩く彼を見たことがなかったからさ。かつてと同じようにツアーはできないと思うし、そりゃ肉体的に衰えるところも出てくるだろう。でももし頭がハッキリしていて体調が万端で健康なら、プレイも良くなっていくしクリエイティブでいられるものだよ。そして、オレたちはみんな体調がバッチリなわけで……歳をくった割りにはね！”。

82分に及ぶ壮大で聴く者の心を揺さぶる瞬間が詰まった『戦術』は、ヤキモキするアイアン・メイデン・ファンたちが抱いてきたすべての疑念を払拭している。そして、かつてないほど想像力に溢れたサウンドがいくつも存在している。

くり返すが、オープニング・トラック「戦術」は驚きを持つ飛び抜けた楽曲で、これまでにメイデンが録音してきたどの曲にも引けを取らないヘヴィさを有し、ブルースの荒々しいヴォーカル・パフォーマンスには、耳の肥えたメタル・ヘッズたちも目を丸くすることだろう。典型的なメイデン・ソングというわけではないが、彼ら以外の何者でもない。スティーヴ・ハリスが作りあげたどことなく示唆的な寓話には、古代の日本で繰り広げられた権力の壁とそれに抗う戦闘民族たちが描かれているのだろう。

“タイトル・トラックとしてこれを選んだのはスティーヴだ。どうしてかはわからないが、スティーヴが急に日本の虫に噛まれたことがあって”。ブルースが回想する。

“［Senjutsu］って言葉の語源を調べたらいつかの意味があるようで、スティーヴが引っかかったように“The Art of War（＝

THE ART OF WAR

SPECIAL INTERVIEW-2

MARK WILKINSON
マーク・ウィルキンソン

『戦術』では新たな２体のエディを生み出したイラストレーターのマーク・ウィルキンソン。このキラー・アートワークがどのようにして完成したのか、その全容を探る。

――『戦術』での作画について、意識したことを教えてください。

まずは彼らのマネージメントがタイトルを送ってくれて、次にスティーヴから“ムードボード”（※いろいろな画像がコラージュされたもの）が送られてきたんだ。彼は参考となる画像がいくつか並んだ数ページの資料をメールしてくれたんだよ。侍と日本の神話に出てくる鬼といった怪物たち、すなわち頭にひとつないしは複数の角を生やして、牙を持った悪魔やオーガたちがいたんだ。ほかにもタトゥーや歌舞伎役者の化粧をした顔、日本の水龍など、本当にさまざまなものがコラージュされていたね。そして、それらをどう解釈するかは僕に任されていたんだ。

――エディほど確立されたキャラクターを、どのようにして新たなバージョンへと作りあげたのでしょうか？

エディを侍の姿に落とし込むだけではうまくいかないとわかっていたよ。高貴な武士ほど身に付ける装飾は幾重にもなっていき、厚めの布地を敷き詰めて防御効果を高めているものだ。しかし骨格標本のような姿のエディでは、そういったコスチュームは似合わないだろうと感じたんだ。それに、あまりにも煌びやか過ぎるのもどうかと思ってね。ほかにも伝統的な兜をかぶらせるのにも抵抗があって。ただ、初期の歌舞伎スタイルの戦闘時の赤いペイントはかなりいい線を突いていて、それをエディにも採用することとした。そして兜の“頭巾”や“吹き返し”といったパーツは骨や皮膚のアタッチメントっぽく使うことにしたんだ。エディの頭部は部分的に怪物とマシンが入り混じる感じになり、特に叩きつけられた金属や破れてボロボロになったレザーによるコスチュームを纏った姿では、サイボーグのようにもなっているよね。

――特に苦労したポイントは？

前から見る分にはディテールが陰に隠れてしまうので問題なかったんだけど、横から見るとバッチリとはいかなかったんだ。そこで友人で素晴らしい3Dアーティストでもあるマイケル・ノウランド（ゲーム『The Last Of Us』を手がけている）に助けを求め、エディの頭部とそれに付け合わせる侍のパーツの製作を手伝ってもらったんだ。マイクが頭と肩を彫刻してくれたおかげで、僕はそれをもとに描き進めるべき影やアングルについて作業をすることができた。けっこううまくいったよ。ほかにも歌舞伎風のメイクによって険しさを維持できたけど、前面以外からの角度ではそう感じられないところも出てきてさ。そこでスティーヴに、兜もかぶらせてみたらどうかと提案してね。デザインを描いてマイクに彫刻にしてもらい、僕らがすでに作っていた模型にハマるかチェックしたんだ。

――スティーヴはどんな反応でしたか？

彼は両方のイラストを気に入ってくれて、ある日電話でダブル・フロント・カバーになったと教えてくれたね。両方とも使ってくれたんだ！　エディはすべてのファンにとって大きな存在で、神話上のクリーチャーなんだから鬼として表現するのもアリだし、目に見えない存在にすることだってできる。しかし合戦場における感情的な侍っていうのもパーフェクトな表現の仕方だよ！

戦うための術)”という意味がある。だが正直なところ、俺はそういったことはどうでもいいんだ。刀で何かをぶった斬るための理由としては充分だ！　何よりこのアルバムは、コンセプト・アルバムではない。アルバム・アートワークにはコンセプトがあって、エディが侍に扮しているのはグレイトだね。ビデオでのエディが侍に変身していくさまは気に入っているよ。しかしアルバムのほかの曲について……は、異なるさまざまな曲を集めたものだね”。

ではどういった曲が収録されているのか。戦や死について触れたもので占められた本アルバムは、どことなく2006年の『ア・マター・オブ・ライフ・アンド・デス～戦記』に近いものが感じられる。2000年代以降のメイデンのスタジオ・アルバムであり、戦争を好む者たちに通じる雰囲気が漂っている。

本アルバムがすべてパンデミック以前に作曲されたものであることをブルースは強調していて、もし現在進行形のネガティブな事象を想起させるものがあったとしても、それらはまったくの偶然であると説明する。

そして全世界で共通するテーマは人種を越えて共有可能だとメイデンは示し続け、それは分断が加速化される現在でも変わらない。特に、メランコリックで陰惨な「漆黒の時」は、ウィンストン・チャーチルの功績と内面的な動揺を詮索している。彼を通じ、栄華を求める一方で、人間が経験する心苦しさや不安定さを描いている。

“そのとおり、チャーチルはある意味俺らが意図としたところだ。とても大きな傷を負った存在って必ずいるものだろ？　彼はうつ病にも悩まされていて、おそらくアルコール依存症だったところもあるだろう。しかしほかの人が投げ出すようなときでも、やるべきときにはしっかりと立ち向かっていた。信じるものや自由のために、ときには戦う準備が必要だ。この曲では外からの評価とは無関係に、自己嫌悪に陥ってしまった男を描いているんだ”とブルースは言う。

メイデンの音楽の多くにはサバイバル、復活、英雄主義といったテーマが込められていて、このアルバムでは何よりもまず……。

“多くが自己犠牲についてなんだ。戦時中だったりそういった状況では、戦争っていうのはワーストにしてベストなものだ。原子力発電所から人工衛星と、この現代社会全体っていうのはNASAとソビエト連邦が宇宙開発を行なった際に作ってきたものに大々的に依存している。彼らがそういったものの開発に着手したのは、彼らが夢見る人種だったからじゃない。これはふたつのサイコパスな帝国によるションベンの飛ばし合いだったんだ！　そして残念ながらそういったところから複雑な人間関係を取り除くことなんてできやしない。俺らは所詮そういった生き物なんだよ”。

史実や現実世界での争いに関して、メイデンの作曲能力は広く知られているが、この40年間で彼らは幾度となく内省と険しい道のりを繰り返してきた。もちろん外見上、メイデンは永遠に頑強な

存在……疑いようのないヘヴィメタル界の神々であり、世界を制覇しそれを楽しんでいる。しかしニュー・アルバムからの「漆黒の時」や壮大なフィナーレを飾る「この世の地獄」（本曲はスティーヴ・ハリスによる作曲）では、スティーヴとブルースの両者が作詞家として最大の試練を体験してきたことは明白だ。

ブルースは“思うに、俺とスティーヴはトーク番組に出て話すよりも、ライヴやアルバムでエモーションをぶちまけてきたと

“WE WOULD RATHER PUT OUR EMOTIONS INTO SHOWS THAN GO ON A CHAT SHOW AND TALK ABOUT IT”

BRUCE DICKINSON

トーク番組に出て話すよりも、ライヴでエモーションをぶちまけたいね。
――ブルース・ディッキンソン

思う”と考察する。“現代社会に生きることへの大きな失望を、スティーヴは深いレベルで抱いている。「この世の地獄」では「俺らはもうやりきったのか？　もう一度やり直せないか？　来世、また別の場所で会おうぜ。そのときはノーマルな生活に戻っていられるかな？」なんて言っているくらいなんだから”。

では現時点で何がノーマルなのだろうか？　アイアン・メイデンの驚異的な新作は、確実に素晴らしいスタートと言える。大迫力のライヴも、もうすぐ戻ってくるだろう。

来夏メイデンは《レガシー・オブ・ザ・ビースト》ツアーに戻り、6月11日には《ダウンロード・フェスティバル》への出演が計画されている。ヤニックによると、決定事項ではないものの、“『戦術』から少なくとも数曲を現在のセットリストに混ぜ込んでプレイすることになるだろう”とのことだ。ブルースは最近受けた臀部の手術が全快して“そこら中を跳び回ってやる”と勢いづき、ステージへの復帰を心待ちにしている。メイデンはもう準備万端で、キックオフのときを待っている。彼らはいつもの状態に戻ってきているのだ。

“『戦術』は制作に長い時間をかけたわけじゃなくて、長く待たされたってこと！”とブルースは宣言し、憤慨した様子を露わにした。“このアルバムはステップアップを意味している。『戦記～』は本当にグッドだった。あの頃を少し振り返ってみて、「クソ、あれはけっこうグッドなアルバムじゃないか」となったよ。そしてこのアルバムができて、『ブレイヴ・ニュー・ワールド』みたいなアルバムを思い出した。あれだってファンタスティックなアルバムだ。つまりそれだけ俺はこのアルバムに満足しているってことだね”。

“何度も同じ曲を繰り返しプレイし続けることが目的じゃない。もし何かを作っているのなら、違うものをプレイしてこそ意味がある”とヤニックは締めくくる。

“メイデンからは常に何か新しいものが生まれ出ている。オレたちは何度でも何か新しいものを作り出し、ロードに出るたびに興奮しているから。もちろんみんな年を食ったし、この先どうなるかなんて誰にもわからない。しかし今のバンドからはクリエイティビティが溢れ出ているんだ。オレたちは今でもこのゲームのトップにいるんだよ”。

METAL HAMMER
JAPAN

The latest article
from UK

20年目の超激
── 衝撃的重音作『アイオワ』の誕生と、崖っぷちにいたバンド

A NUMBER ONE ALBUM. A BAND ON THE BRINK.

1999年にリリースされた1st『スリップノット』は、そのモダンなサウンドとショッキングなルックスで、メタル、パンク、ハードコア……と、ジャンルの垣根なく多くの過激音楽ファンを一瞬にして虜にした。その2年後となる2001年8月に発売された2nd作『アイオワ』は、前作の奇抜さをそのままに、よりヘヴィデューティになった音像にて、より広いメタル・ファンからの支持を得た。そう、常に激烈なアルバムをリリースし続けるスリップノットだが、メタル・ファンにとってのNo.1アルバムはやはり『アイオワ』なのだ。

しかし、本作の制作には、知られざるバンド内の歪が伴なっていた。コリィ、ショーンというバンドの中心人物から、プロデューサーであるロス・ロビンソンといった重要関係者は、この作品をこのように振り返る。リリースから20年目に語られる『アイオワ』の真実。

Text by Dannii Leivers
Interpretation by Tommy Morlay
Original by『METAL HAMMER』350

『アイオワ』
ワーナー／WPCR-15977

『IOWA』

Released in Aug. 2001

1.「(515)」
2.「People = Shit」
3.「Disasterpiece」
4.「My Plague」
5.「Everything Ends」
6.「The Heretic Anthem」
7.「Gently」
8.「Left Behind」
9.「The Shape」
10.「I Am Hated」
11.「Skin Ticket」
12.「New Abortion」
13.「Metabolic」
14.「Iowa」

PEOPLE = HITS

コリィ・テイラーが語る
『アイオワ』収録曲にまつわる裏話

●「(515)」
これは「ピープル・イコール・シット」からのシドのパートを切り取ったもので、アイツのジイさんが亡くなった際に録音したんだよ。改めて聴いてみれば、かなりのガテラルで、とてつもなくエモーショナルなのがわかると思う。こういった背景を考えると、鳥肌が立つね。

●「ピープル・イコール・シット」
1st アルバムのツアーのときに書いた曲のひとつだ。俺らはこの言葉をマントラのように扱っていた。この曲を書いたとき、深い意味を持ったアンセムのように感じられたんだ。

●「ディザスターピース」
かなりヘヴィでダークだろ。俺のライヴでのお気に入りの曲のひとつでもあってさ。しかもこの曲の歌詞の一行目は、どこかのメディアで"2001 年で最悪の歌詞"と形容されたことがあって、それも光栄に思っているよ。

●「マイ・プレイグ」
コーラスのメロディが思い浮かんだとき、俺はちょうど咽頭炎を患っていて。歌おうとすると吐き気をもよおし、まったくもって声を出せるような状態じゃなかった。紙を握りしめて口をパクパクさせていて、バンドの連中にしてみると"アイツは何をやっているんだ？"という感じだったと思う。

●「エヴリシング・エンズ」
この曲は長い間"ミスフィッツのリフの曲"として知られてきた。コーラスはもともとかなりメロディックだったんだけど、俺がスクリームしたほうがインパクトがあるとロスは思ったみたいでね。

●「ザ・ヘレティック・アンセム」
この曲はもともと「The Heretic Song」というタイトルがつけられていたんだ。実際にそのタイトルで流通している CD シングルも世の中にはあるはずだよ。そうしたらジョーイが"「The Heretic Anthem」ってタイトルにすべきじゃないか"って言い出したんだよな。

●「ジェントリー」
「ジェントリー」は、本当は 1st アルバムに収録される予定だったんだ。ただ『アイオワ』に入っているバージョンのほうが遥かにヘヴィで、しかもジメジメしていてよりイーヴィルだ。そしてクラウンが歌詞を書いている。

●「レフト・ビハインド」
これはけっこう昔からあった曲で、やり方や形を変えていったものなんだ。俺は歌詞を書き、自分らしさを込め、そのおかげでコーラスはかなりバシッとキマったね。

●「ザ・シェイプ」
このコーラスをどうすればいいのかわからなくて、俺はかなり苦しんでいた。スクリームしたパートがあったけど、空っぽのような感じもしていてね。あのメロディ・ラインが思い浮かんだことで、頭のなかの空白が埋まったんだ。

●「アイ・アム・ヘイテッド」
俺にもう少しいイーヴィルで、かつクリーンに歌うことを求めたのはロスだった。そしてビッグなコーラスにたどり着くまで、俺らはさらにヘヴィに仕上げていったんだ。

●「スキン・チケット」
クラウンがミックと一緒にあのリフをプレイするところを目にしたのを覚えているな。ミックはそれをさらにジム（ジェイムズ・ルート）と一緒になって展開していったんだ。「タタード＆トーン」（『スリップノット』収録）みたいなことをやろうとしたんだけど、あれ以上にヘヴィになったね。

●「ニュー・アボーション」
以前からこのタイトルが俺の頭にあり、バンドがこの曲を聴かせてくれたとき"New Abortion"って名前になることが直観的にわかったね。コーラスはある種の一体化を歌っていて、俺らは生まれる前は命を持たない存在だったっていう考え方に、バンドのみんなが賛同したんだ。

●「メタボリック」
けっこう長い間、俺らはこの曲をオーディエンスの前でやらないできた。しかし、久しぶりにプレイしてみると、オーディエンスは肩をすくめて"いいじゃないか、クールだね"という感じになっていたんだ。それを見て俺らは"ファッキン・アスホール！"って感じだったさ。

●「アイオワ」
この曲では民族的な経験をして。俺らは部屋のなかで２回しかプレイしておらず、君たちが聴いているのはライヴで録音したものだ。ヴォーカルは全裸の状態でレコーディングしたんだけど、あのときは完全に狂ったような状態だったよ。

"THE GOAT'S NAME IS EEYORE"

あのヤギの名前はイーヨーだ

『アイオワ』のアルバム・アート・ワークがどのようにして作られたかをショーン"クラウン"クラハンが解き明かす。

――ジャケットのあのヤギはいったい何者だったんですか？
あのヤギの名前はイーヨーだ。俺が写真に夢中になるきっかけを作ってくれた心の師匠は、1st アルバムのアートワークを撮ったステファン・セスキスでね。俺は 2nd アルバムのアートワークのコンセプトを考え、ぜひともそれを自分で撮りたいと強く願い写真を撮り始めたんだが、"コレだ！"と思うようなものがなかなか撮れずにいてね。そして俺はある日、彼にヤギを渡したんだ。
――ではステファンがヤギを撮影したんですか？
ヤギを渡した日、ちょっと経ってから俺はスタジオに行ったんだけど、彼は５～６枚撮影していてさ。しかもそれらはポラロイドで撮られていて、自分の写真の出来との差にフラストレーションを感じたね。彼があんなにグレイトな写真をたった数枚のポラロイドで撮ったことが信じられなかったんだ。"俺はこのクソ野郎に向かって何百枚とシャッターを切ったのに、使えるものが１枚も撮れなかったんだぜ！"って叫んでしまったよ。
――『アイオワ』のアートワークには、一体どんな意味が込められているのでしょうか？
俺らの文化に属する者にとって、このアルバムのカバーにはシンボル的かつ比喩的な意味がたくさんある。それについて俺はほとんど説明をしてこなかったね。すべてを話すと時間が無限にかかってしまうから、今回もそれについては話さないでおこうかな。ただカバーってのは内側と同じだけ重要で、鏡のようなデザインにしたよ。スリップノットが何者か知っている奴らは、みんな外見だけで中身を判断する。もしお前がいい親で子供が一体何を聴いているのか気になったら、このアートワークを手に取って開いてみることだろう。それが狙いだ。そこに映るのはひねくれちまった自分の姿だ。鏡に映っているヤツ、ソイツが俺らが作った『アイオワ』の一部になっているってことさ。

“ねちっこい何かがこのアルバムにはある。まるで、一週間放置したハムのようにね”——と、スリップノットのヴォーカリスト、コリィ・テイラーはゆっくりとした口調で話す。時折サディスティックな笑みが顔中に広がる。**“体に染み込んでいて、まるで肉の加工工場に長時間いたときのように、体から臭いが感じられてしまうんだよ”**。

『アイオワ』がリリースされてから20年が経過した今、もはやそのシミを体から洗い落とすことはできない。世界を大きく変えたセルフ・タイトル・デビュー・アルバム『スリップノット』の次の作品にスリップノットが取りかかった際、こんなにもおぞましく腐食性のある大傑作が生まれるとは誰も想像していなかったことだろう。バンドが迎えていた最も暗黒な時期に作られた『アイオワ』は憎悪に包まれ、バンド自身や音楽産業、ひいては全世界に対する宣戦布告でもあった。

“スリップノットみたいなバンドがブレイクすると、誰もが＜さらに突っ走って次のレベルを見せてくれること＞を期待するものだ”と語るのは、ロードランナー・レコードの前エグゼクティブA&Rで、1998年にバンドとサインをしたモンテ・コナー氏。**“もう少しコマーシャルなものを作り、メインストリーム寄りなアルバムを作るなんてことをスリップノットはやらなかった。彼らはさらにヘヴィな方向に歩んでいったんだ。もっとビッグになろうとか、ラジオ向きの曲を書こうといったことは一切やらなかったさ”**。

“次に進む方向を想像したり、あれこれ期待する人間たちの声に、俺らはまったく耳を貸すことはなかったね”とコリィは話す。昨年リリースしたソロ・アルバム『CMFT』を引っ提げ、ソーシャルディスタンスに配慮したアメリカ国内のショウを終えリフレッシュした彼は、幾分かしゃがれた声で我々のインタビューに応じてくれた。**“おかげで、むしろ俺らはバンドとして上の階級に昇り、エクストリームなまでにヘヴィな音楽を作ることになったんだよ。俺らのジャンルのなかでそんなことをしていたヤツらはいなくて……まぁ、そもそもそのジャンルっていうのがなんだったのか、それは俺の知ったこっちゃないけどな”**。

『アイオワ』のサウンドはバンドがヒット競争のために守りに入ることを拒否し、バンドを食い物にしようとする悪質な業界へ“fuck you”を突きつけるものであった。デス・メタルや血みどろのハードコアから生まれてきた彼らであるから、「ウェイト・アンド・ブリード」のようなラジオ向きのアンセムが本作に収録されることはなかった。ましてや仲間同士でヘッドロックをし合って暴れまわる「スピット・イット・アウト」もない。しかし本アルバムは祖父が亡くなったことを知った直後のDJシド・ウィルソンの悲しみの叫びによる「(515)」がオープニングを飾っている。

そしてそのアルバムは、苦痛のなかで叫ぶコリィ・テイラーの発狂したスクリームで終える。ヴォーカル・ブースにて全裸で歌入れを行なった際に割ってしまったガラスで傷を負い、恐怖を感じさせるサウンドトラックに仕上がっているのだ。

“これは俺らが夢見てきたことの反動だったんだ”と電話の向こうで話すのは、パーカショニストのショーン“クラウン”クラハンだ。スリップノットの次のアルバムのレコーディングからのオフを取り、妻と愛犬とともにパーム・スプリングに向かう最中でインタビューに応じてくれた。**“最初のアルバムに伴う18ヵ月にも及ぶ一連のサイクルで、俺らはさまざまな人たちからの提案を受けていて……まるで操り人形のよ**

**期待する人たちの声に、俺らはまったくもって耳を貸すことはなかった。
——コリィ・テイラー**

ただし、当時は彼ら自身、ある種の崩壊を迎えている時期でもあった。地元デモインで仕事に行き詰っていた状態からあっという間に地球上で最も有名なメタル・バンドになってしまったことによる葛藤に苦しみ、バンドの結束は失われかけていった。短期間でさまざまな中毒症状を体験するようになり、家族との隔離や蝕まれていく精神状態を経て、寄せられるプレッシャーによって燃え尽きる寸前だったのだ。

"俺らが『アイオワ』を作っていたとき、バンド・メンバーは互いのことを憎み合っていた"。ショーンは昨年のインタビューでもそう語った。**"俺らは世界を憎み、世界も俺らを憎んでいたね"**。

2000年11月、バンドは最初のワールド・ツアーを終えたばかりだった。当時彼らが必要としていたのは休息、すなわちそれまでの12ヵ月で起こったことをゆっくりと振り返ることだった。しかし実際には『アイオワ』の作業がすぐさま始まり、かつてのドラマーだったジョーイ・ジョーディソンとポール・グレイが、ポールの兄弟の家に集まり新曲を書き始めていった。

それから2ヵ月後の2001年1月17日、ロス・ロビンソンをプロデューサーに迎え、ロサンゼルスの［サウンド・シティ］スタジオにてレコーディング・セッションが始まる。兄弟愛に溢れた雰囲気のなかで作られたデビュー・アルバムとは異なり、張り詰めた環境下での制作となった。**"俺らは何かにつけて互いを攻撃し合っていた"**とコリィは話す。**"あれが嫉妬心によるものだったのか、不安定な精神状態によるものだったのかすらわからない。「俺は足に重りでも付けられているのか？　なんでコイツのほうが俺よりも注目を集めているんだ？」って感じでね。とにかく暗い雰囲気で、1stアルバムでバンドが作ろうとしたものをすべて棄て去るような感じだったんだ"**。

2ヵ月半に及んだセッションは、はじめから混沌としていた。ハリウッドの慌ただしさから離れるため、バンドは車で少し移動したオークウッドのアパートに滞在。1stアルバムは自ら課した完全なる禁酒令のもとで制作されたが、それは『アイオワ』では忘れ去られていた。

"アルコール事情については大きく変わってしまって。パーティで溢れるハリウッド

うな気分になっていったんだ。俺らはスリップノットなんだぜ。俺らは夢を追いかけ続けてきた。俺たちの文化とともにライヴをやるってことが夢だったんだ。ビデオやアルバムを作ることじゃなかったし、ましてやエージェントやマネージャーなんて考えたこともなかった。すべてはパフォーマンスをすることにあった"。

そして**"大抵、誰もが2ndアルバムを作る頃には飼い馴らされ、バンドが置かれた立場を理解し、自分の意見がそこまで重要じゃないってことを感じ始めるもんだ。しかし俺らはロードランナーが送り出した初めてのプラチナ獲得バンドだったから、誰からもあれこれアドバイスされるってことはなかったね。バンドが家路についてひと息ついた頃、次のアルバムは世界にとっては邪魔で、俺らから無理やり突きつけるようなものになるだろうと強く感じていたさ"**と続ける。

リンプ・ビズキットやリンキン・パークと同じシーンから生まれたにも関わらず、スリップノットは常に過激なまでにダークかつカオスだったため、ニュー・メタルの型に収めることはできなかった。『アイオワ』はその範疇を完全にはみ出ていき、バンドは自分たちだけのジャンルを作り出していったのだ。

の近所だったってことに加え、マネージメントが新しくなったことが運のツキだった。パーティ、酒、クラブ……と、バンドが求めるもののすべてに対して付けていた首輪のヒモがゆるんでいたんだ”と、日を追うごとに崩壊していくセッションをコントロールすべく奮闘していたロス・ロビンソンが振り返る。“誰もがパーティ三昧で真剣に話し合うことなどせず、私は相当フラストレーションが溜まっていたよ。「不運だったとあきらめるのはまだだ！　どうにかしてこれをもとに戻さなければ！」とね”。

“誰か知らないヤツの家で目覚め、しかもどうしてそこに自分がいるのか、いつ来たのかすらわからないこともあって”とコリィはつけ加える。当時コリィはかなりの酒量を常飲し、その結果声を出すことに問題を抱えていた。“かなり強烈な時期だったよ。『アイオワ』の頃に俺が抱えていた問題っていうのは、かなりワガママで、自己嫌悪、そして重度の孤立感がともなうものでさ。当時バンドが抱えていた多くのことを解決するにはまだ若過ぎたし、個人としてもバンドにしっかりと貢献できていなかった。自分は多くの人を失望させていると感じていたね”。

次第に自分たちでの制御を失い、状況は急速に悪化していった。“俺らを監視する人間が誰もいなかったんだ”。コリィは続ける。“当時のマネージメントは俺らが誘惑に飛びつくことを止めようとしなかった。それはのちに彼らと袂を分かつことになった理由のひとつで、そもそもアイツらは俺らに心から興味を抱いてなんかいなかったってことで。分け前が何％もらえるのかくらいにしか考えていなかったんだな。その結果ひとつのツアーが終わってもすぐに新しいツアーが組まれていき、その間に俺らが何の中毒になろうが、どんな怪我をしようが、どうなったっておかまいなしだったから”。

レコーディング・セッションが始まったばかりの頃にバンドのもとを訪れたモンテ・コナーは、人間関係がどことなくスレているように感じていたが、第二の「ウェイト・アンド・ブリード」を作るようにバンドにプレッシャーを与えたわけではないという。“確かにあのシングルは気に入っていたし、1st アルバムに収録されたときに「ワォ、ヘヴィだね」と伝えたのは本当のことだ”とコナーは認める。“チャレンジが待ち受けていることはわかっていたが、バンドにコマーシャルなアルバムを作るようにプレッシャーをかけたことはない。私たちはありのままのアルバムを受け入れる準備や覚悟ができていた。彼らが提供するものを待っていたんだ”。

ロス・ロビンソンにとって、セッションは機知と苦しみのせめぎ合いとなっていく。セッションが３週目に突入した頃、モトクロス・バイクでの事故により彼は腰を痛め激痛に悩まされることになった。そのときの衝撃はまるでアルバム中のドラム・トラックのようなサウンドで表現され得たものだろう。その事故については“75 ～ 85 フィートくらいのジャンプを行なったんだが、着地に失敗して頭から地面に叩きつけられ、後輪が後頭部に降ってきたんだ。自分の体が曲がってはいけない方向に折り畳まれたような感じだったよ”と話す。

しかしロスは鎮痛剤を打ち、翌日には仕事に現われた。“激痛のなか、時間どおりに現場にやってきて、「さぁ、やるぞ！」という感じだったさ。すると私の姿を見たアイツらは、しっかりとスリップノットになっていったんだ。私がそうしていれば、アイツらだって言い訳ができないからね。あのアルバムは今でもあのときの忌々しい痛みとともに記憶に深く残っているさ”。

レコーディング・セッションが４月のアタマに終わったとき、ロスは“膝を抱えて大泣きした”という。“ポールとジョーイが私の家までやってきて、その翌日にはレコーディングを終えていた。あのとき写真を撮ったはずなんだが……。なんてこった！　今でもあの写真があればな。私たち３人はそこで抱き合い、感動のあまり涙がこぼれていたんだ。体中から涙が噴出して、10 分くらい抱き合っていたよ。あまりにもクレイジーで大切な瞬間さ”。

ミキシング作業の遅れもあり『アイオワ』のリリース日は遅れていったが、《Kill The Industry》と銘打たれたバンドのヨーロッパ・ツアーは、2001 年５月に予定どおり開催された。アルバムがレコード店に並ぶ３ヵ月前のことで、バンドはリリース日にはすでに燃え尽きていた。

“レコーディングは俺らにとってかなりキツい経験で、１ヵ月ぐらい頭をスッキリさせる必要があったがそれは叶わなかった”とコリィは話す。“俺らはモンスターの口に放り込まれたようなもので、心と体を正常

感動のあまり、体中から涙が噴き出していたんだ。
――ロス・ロビンソン

な状態に保つためにはけっこうな時間が必要だった。もしさまざまな問題を解決するための時間をもらえていたら、心身ともにバッチリな状態だったことだろう。しかし実際にツアーに出るときには各自中毒症などの問題を抱えていて、正しい方向に頭を向けられる状況じゃなかったんだ。そのかわり、かつてロードでやっていた馬鹿げたことはやめるようになった。酒が入っていない限り誰かとつるまないようにしたんだ。そうでもしないと、マジなケンカになってしまっただろうからね……"。

それでもバンドがヨーロッパで大暴れしていくに連れ、日常ではどこかでいさかいが起こっていく。**"あのとき何かが原因でシドとやり合ってしまったのを覚えているし、今でも後悔することがある。あれは単に俺が酔っぱらっていたのと、不安定だっただけのことだと思う。あの件で俺らの間に長らく亀裂が入っていたんだ"** と彼は続けて回想する。

"まぁ、単にヒートアップしていたっていうのもあるだろうな" とショーンはつけ加え、幾度となくバンド・メンバーにブローを決めた過去を思い出す。**"俺は基本的に悪いヤツでさ。みんなに攻撃されることもあるから、自分の身は自分で守らなくちゃならなかった。どんなときも暴力的に人と接していたし、そもそも開演を待って廊下を歩いている間でも、ショウに向けてバイオレントな気分を作っていたから。それがやるべきことだったんだ"**。

『アイオワ』に伴うツアーで、彼らのマスクと衣装はさらにグロテスクなものになっていった。**"あの一連のツアーでのマスクは、俺らを素直に反映していたと思うね"** とショーンは話す。**"凶悪って感じで、それは俺らがそれを生業としていたからなんだ。正確な重さはわからないけど、あのツナギは25～40ポンド（約11～18キロ）くらいはあったと思う。あまりにも重いうえに地獄みたいに暑かったんで、死ぬかと思ったさ。それでも、俺らはもっと不快なものが来たってかまわないくらいに思っていたから"**。

ステージ内外を問わず、混沌とした状態は続いた。クレイジーで下品なことや生傷の絶えなかった逸話など、それはその後何年も語り継がれスリップノットの伝説となっていくが、それらのすべてが『アイオワ』のツアーで生まれている。**"俺が覚えているのは女の子たちが牛の心臓を持ってきて、食いちぎって俺の顔に叩きつけたことなんだ"** と、ショーンは当時のファンとバンドが"精神病患者"同士のような文化でつながっていたと明かしてくれた。**"俺らはそういった状況をそのままに受け止めて、むしろうながしていたよ"**。

2002年のツアーでバーミンガム公演を行なった際、オープニングの「サーフィシ

ング」のリフが刻まれた瞬間、会場内にはファンが剥がした赤い座席カバーが飛び交っていた。**“フリスビーみたいだぜ！と俺らは思ったよ”**とコリィが笑う。**“クラウンに目をやって「この光景が見えるか？　一体何が起こったんだ？」という感じだった。俺がそれまでに見てきたなかで、最大のピットだったんだ。まるで海のなかの渦みたいで、俺らは巻き込まれそうな感覚だった。シドなんか「今夜はオーディエンスのなかに飛び込んでしまうかもしれないぜ」って言っていたくらいで、あれは何かが降りてきたライヴだったね”**。

DVD 作品『ディザスターピーシズ』には、現在は取り壊されてしまったロンドン・アリーナでの４日間のカオスに満ちたライヴが収録されている。バンドがステージに向かう際に、ジョーイは床に向かって吐いてしまい、ショーンのツナギに吐瀉物を引っかけている。そのあとにシドはドラム・キットに向かって放尿。怪我だらけだがそれらの処置をする暇もないバンドはステージに上がり、ときには流血だけでなく骨折が疑われるような状態でもあった。

別のライヴでは、ファンが会場のトイレで出産していたことをショーンが振り返っている。その一方でポルトガルで行なったサイン会では、ファンが墓から掘り出してきた人骨と思しきものに［People = Shit］と書いて差し出してきたこともあった。**“さすがにあのときはどうすりゃいいのかわからなくて、俺らはお悔やみの念を伝えたよ。モラル的にも精神的にも俺はどうしよもないものを感じたけど、その骨の人に対して何かをしなくちゃならないと思ってさ”**。

ショーンはその頃、1st アルバムのツアー中に離婚した妻と３人の幼い子供たちとの別れに苦しんでいた。元妻のシャンテルはクローン病と診断されたばかりで、ツアーが進むに連れてショーンはホテルの部屋で孤独を感じるようになった。それは次第に深いうつ状態へのスパイラルとなっていく。

“あれは俺ら家族にとってかなり暗い時間だった”と重々しい口調で話す。**“あの頃俺の妻は痛みを抱えていた。そしてさらに子供たちだ。母が大病を患いながら、父はロードに出ていた。彼らにはタフなシチュエーションだったと思うね”**。

娘のガブリエラの 2019 年の死別により、“『アイオワ』期”への見方がさらに難しくなったとショーンは言う。**“命って本当にあっという間なんだよ”**と吐き捨てる。**“時系列をさかのぼって、俺が今までにたどってきたことのウラを取ってくれたってかまわない。でも俺は家族のこと以外、どうだってよかったんだ。実際に家族第一で行動するべきだったと悔やんでいるし、俺はそういった意味で最悪の男だったさ。もう取り返しのつかないことをしちまったんだ。飲み込むにはとても苦い事実さ”**。

女の子たちが牛の心臓を食いちぎり、俺の顔に叩きつけてきてね。——ショーン・クラハン

『アイオワ』は最終的に 2001 年 8 月 28 日にリリースされ、英チャート初登場 1 位を記録。現在でも疑う余地のない最もヘヴィで荒涼したアルバムとして認知されている。

デモインに戻ったバンドは再び集結し、システム・オブ・ア・ダウン、ラムシュタイン、アメリカン・ヘッド・チャージ、マッドヴェインらとともに《Pledge Of Allegiance》と銘打ったツアーに出る準備をしていた。

そしてツアーがキックオフとなる３日前、9.11 が発生。一機目の飛行機がニューヨーク市のツイン・タワーに突っ込んだとき、コリィは荷造りをしていた。ショーンは二機目が衝突していく光景をニュースで確認した。すぐにショウは９月後半に延期されたが、長期に渡ってバンドの活動に大きな影響を与えていった。

当初 MTV は『アイオワ』からの 1st シングル「レフト・ビハインド」を大々的にプッシュしてプロモーションを行なうと約束していた。当時の MTV はバンドのブレイクから終焉までをも決定づけるほどの影響力を有しており、9.11 以降はヘヴィ・ミュージックを流すのは不適当という判断をくだした。スリップノットは多くのメタル・バンドとともに、不本意ながらに電波から消

は、“このアルバムの計り知れない影響力により数えきれないバンドが生まれ、このアルバムがなければ今日のメタルの風景は別のものになっていただろう”と記した。このアルバムを作る際にバンドを覆った暗闇は彼らに長らく深い傷を残し、それは 3rd アルバム『VOL.3:（ザ・サブリミナル・ヴァーシズ）』（2004 年）のレコーディング・セッションにも影響を及ぼす。しかし『アイオワ』がなかったら、スリップノットのアルバムがそれ以降作られることはなかったのかもしれない。2019 年に発表された 6 枚目のアルバム『ウィー・アー・ノット・ユア・カインド』のような、勇敢で実験的なアルバムなど存在していなかっただろう。

“一瞬だけ爆発して、それ以降はフェードアウトしていくようなバンドにはなりたくなかったんだ”とコリィは言う。**“長い間やれるってことが、すでに決まっていると思ってきたから。ただ歳を重ねるに連れて、結果として、俺らが作り出したものを世の中が追いかけているってことに気がついた。ヘヴィな音楽に限らず、デヴィッド・ボウイやマーク・ボランみたいな、俺らがずっと愛してきた人たちを見てみなよ。彼らはみんなリスクを背負ってきた人たちだ。次の世代として、スリップノットはヘヴィな音楽でそれを今やっているんだ”**。

『アイオワ』によりスリップノットは現在の地位を築くに至り、彼らが予測のつかないバンドであることを決定づけた。またこれは、バンドがその結果を一切考えず、自分たちのやり方でゼロから作り上げたサウンドである。

“俺らは誰かに何かを証明しようなんて考えていなかった”とショーンは強調する。**“俺らは捧げられるもののすべてを捧げ、ビデオを作りインタビューに応じ、何杯でもジャック・ダニエルを呑んできた。今でも生きていられて嬉しいぜ。しかも俺だけじゃなく、ほかのヤツらもまだ生きている。それにまだ友人でいられていることも信じられないことさ”**。

“以前と同じ方法で安全にやっていたら、すぐに消えていただろう”とはコリィの言葉だ。**“それって自ら命を絶つようなことと同じで、そこでお終いになっていただろう。しかし俺らはそれを選ばず、ほかのヤツらに自分たちの歴史を書き換えさせることなく、自分たちでその運命を切り拓いていったんだ”**。

されてしまったのだ。

“純なヘヴィメタルだけが流れていて、俺らはまったくかからなくなった”とコリィは苦々しく振り返る。**“俺らがそのことに気づいたのはあの 1 年後くらいで、あるときたくさんのバンドの名前が書かれた巨大なブラック・リストを目にしたんだ。コンサートでプレイしてみると、オーディエンスは俺らの曲をメディアを通じて聴きたがっているということが伝わってきてさ。あの事件は俺らアメリカ人を傷つけただけでなく、俺らの片足を完全に切断したようなものだったから”**。

今日、ショーンとコリィと話をして感じるのは、『アイオワ』と当時の地政学的情勢は強く関連していて、互いを反映し合い、世界が破滅へと向かっていたことを象徴していたということ。**“[People = Shit] って言葉が持つ意味や比喩っていうのは、あのとき世界が迎えていた難しい状況を的確に表現していると思うね”**とショーンは説明する。**“当時はそういったことが空気感として伝わってきて、どこにいってもそんな感じだった。そこに俺らが『アイオワ』っていう小さな錠剤を差し出したんだ。沸き立つ命が封じ込まれたカプセルのなかで、多くのものが倒れて崩壊し、誰もが再び団結しなければならなかった”**。

『アイオワ』は 26 年に及ぶスリップノットのキャリアのなかで、彼らが取った最大のリスクであり、それによって打ち立てたものは現在でも高くそびえ立っている。5 年前に本誌が《The Greatest Metal Album of the 21st Century》の賞状を送った際に

The latest article from UK

Text by Rich Hobson
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』349

WHEN THRASH CONQUERED THE WORLD

それまでにも《モンスターズ・オブ・ロック》を筆頭に、ハードロック／ヘヴィメタル・バンドを一堂に集めたフェスティバルはあったが、1990年にスタートした《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》ほど、躍進的かつトレンドを集約したツアーはなかった。

スレイヤー、メガデス、アンスラックス……のちに“ビッグ4”と呼ばれるような当時の主要ラインナップが並んだこのパッケージ・ツアーを経て、スラッシュ・メタルのビッグ・ネームたちは、マニアのためのバンドから大会場でプレイするジャンルを超えた存在になっていったのだ。

バンド間の軋轢を回避するためにエゴを捨て、それでも勃発する問題を乗り越えツアーの成功へと邁進するメンバーたち。そののちの栄光とステータスを確立した伝説的イベントについて、ケリー・キング、デイヴィッド・エレフソン、スコット・イアン、チャック・ビリーといった中心人物たちが、当時の出来事を掘り起こす。

※掲載バンドは当時のママ

スラッシュが世界を制覇した瞬間

メタリカ、スレイヤー、メガデス、そしてアンスラックス。1980年代が終わりを迎えていた頃、沸き立つスラッシュ・メタル・シーンの王者として4つのバンドが存在感を放っていた。まだ“ビッグ4”と呼ばれる前のことではあるが、彼らはすでに代表的なアルバムをリリースしており、このジャンルが持つ巨大なポテンシャルを予感させていた。そのなかでもメタリカは頭ひとつ抜け出た存在であり、1988年の『メタル・ジャスティス』は全米《ビルボード・チャート200》にてトップ10を記録していた。

“メタリカは独自のテリトリーを築いていたな。アイツらはほかの誰かから何かをしてもらう必要などなく、自分たちの道を歩むことを選んだ。「ああいうもの（スラッシュ）は全部やり切った」って感じだったと思うし、アイツらはさらに高いところを目指していったんだ” と語るのは、スレイヤーのギタリストであるケリー・キングだ。

とは言え、スレイヤーとて当時迎えていた大きなチャンスを逃したわけではない。計画は密かに練られていたのだ。それこそ、スレイヤーとメガデスでツアーをし、メタリカが行なっていたアリーナ・クラスのヘッドライン・ツアーに追いつこうというものであった。

ただパッケージ・ツアーという形態そのものは、何ら新しいものではない。彼らの10年前には《Metal For Muthas》と銘打ったツアーが行なわれ、モーターヘッド、サムソン、サクソンといったバンドが各開催日で交代しながらプレイをしていった。さまざまな若手バンドをサポート・アクトとして迎えたパッケージ・ツアーで、スラッシュの直接的祖先と呼ぶべきNWOBHMの普及に大きく貢献した。

しかし、この《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》は、それとは少し異なっていた。偉大なる2大バンドによる連合で、それぞれ単独で活動するよりもさらなる飛躍が望めるものであった。《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》はツアーに革命をもたらし、スラッシュを大きなジャンルへと押し上げ、ビッグ4のコンセプトを強固なものとした。

★★★★★

ヨーロッパから始まる“スレイヤーとメガデスによる共同ヘッドライニング・ツアー”という構想は、彼らがプレイしてきた単独公演の規模（2000～5000人）とフル・サイズのアリーナ（平均16000人）とのギャップを埋めることを念頭に組まれた。

ただし、スラッシュのビッグ・ネームを競演させるためにはいくつもの詳細を詰めなければならず、両者が等しく映るように配慮するという面でもチャレンジが存在した。そのなかではさまざまな問題が勃発していき……。

ジョン・ジャクソン（[K2エージェンシー]創設者）：すでにスレイヤーのマネージメントをしていたリック・セールスからはOKが得られていた。当時メガデスは同じ期間にツアーすることを画策していて、“両バンドが組んだらスゴいことになるんじゃないか？”と考えたんだ。それだけが決定打となったわけじゃないが、彼らが組む理由のひとつにはなったよ。俺は、彼らは単独でやるよりも一緒にやったほうがもっとうまくいくと思ったんだ。

デイヴィッド・エレフソン（メガデス）：メガデスとスレイヤーで力を合わせれば——こののちアンスラックスとも組むんだけど——メタリカみたいなバンドと同じレベルの成功がつかめるんじゃないかと考えてね。それ以前にも俺らは何度か仕事をしたことがあって、ケリーなんかメガデスが始まった頃のメンバーでもあるんだから。

ケリー・キング（スレイヤー）：あのとき（メガデスでプレイしていたこと）は最高だったぜ！　俺がそれを検討したのは、ムステインの大ファンだったからにほかならない。メタリカがカリフォルニア南部のいちバンドだった頃、彼があのバンドでプレイしていたのを目にしたことがある。張り裂けそ

うなギター・サウンドには目をつぶっていても驚かされたもんさ。あのときは最初の5日間でプレイしたんだけど、いい時間を過ごしたよ。彼から手伝ってくれと言われて、とても光栄だったから。

ジョン・ジャクソン：“Clash Of The Titans”（※ギリシャ神話をもとにした1981年の映画『タイタンの戦い』の原題でもある）というタイトルにしたのは、これ自体がグレイトな名前だったからなのと、本当に名前どおりの出来事だったからだよ！

デイヴィッド・エレフソン：俺らはエゴを捨て去り、チーム一丸となって向かい合わなくちゃならなかった。恐らくそれが最大の衝突ごとだったと思うね。外の世界との衝突って意味じゃなくて、内なる衝突ってことだな！ “どっちのバンドがトリを務めるんだ？ 持ち時間はどうする？”なんて話し合いが何度もあり、舞台裏では細やかな交渉が行なわれていった。ヨーロッパではスレイヤーで締めて、メガデスは3番目という出演順で固定された。ファンはまだエネルギーがあってビールが効く時間帯でもあるから、個人的にはこれってベストなポジションだと思っているけど！

ケリー・キング：俺ならいつだってトリを飾りたいね。スレイヤーの前に誰がプレイしようが関係ない。俺らが喰ってやるつもりだから。

★★★★★

この《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》は、1990年9月22日にスタート。チケットは好調なセールスを続け、スイス、イタリア、スペイン、オランダ、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、イギリスと、どの会場でも次々とソールドアウトを記録し快進撃を続けていった。

出演バンドはテスタメントやスイサイダル・テンデンシーズといったベイエリアの同世代のバンドたちで固められ、スラッシュの新たな系譜を代表するLAのクロスオーバー・スラッシュ・バンドが迎えられた。当時このジャンルは商業的に決定的なピークを迎え、各バンドは流れを大きく変えるようなアルバムをリリースしたり、もしくはその準備をしていた頃でもあった。

デイヴィッド・エレフソン：スレイヤーは『シーズンズ・イン・ジ・アビス』を投下しようとしていて、俺らは『ラスト・イン・ピース』に取りかかっていた。あのツアーによって俺らはアリーナに足を踏み入れたんだから、これは紛れもないビッグ・ニュースだったよ。テスタメントは『ソウルズ・オブ・ブラック』をリリースしようとしていて、ヘヴィメタルにとって本当に特別なときだったね。

ケリー・キング：ああいったことは2バン

“WE HAD TO PUT OUR EGOS ASIDE”

DAVID ELLEFSON

俺らはエゴを捨て去らなければならなかった。——デイヴィッド・エレフソン

ドだとしてもなかなか起こらないもんで、それが４つのバンドならなおさらだ。基本的にビッグなアルバムを持つバンドは一緒にツアーを周らないし、俺ら４つのバンドはともに巨大なアルバムを持っている。スイサイダルは『ライツ・カメラ・レヴォリューション』をリリースしたばかりで、あれはグレイトなアルバムだったね！

チャック・ビリー（テスタメント）：《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》はかなり大きなチャンスだった。自分らじゃフェスティバルでもなければ出られないような場所でライヴができたしさ。実際に屋内でプレイするのが初めての地域もあったんだ！ “ツアーを続けていくためには新しいアルバムを出す必要がある”という忠告をもらうようにもなった。“クールだね。スタジオに入ってビールを呑ながら曲をプレイすればいいんだ！”って思ったからさ。

デイヴィッド・エレフソン：デイヴ（ムステイン）と俺はメガデスが始まった頃から、自分たちはアリーナ・バンドだと考えていた。だからそれが実現する遥か前からコンセプトとして思い描いてたってことは、頭に入れておいてほしいな。シカモア・アヴェニュー（※ハリウッド）のアパートでバンドの名前から何から、さまざまなことを話し合っていたよ。なかには“デイヴって名前がふたりもいるようなバンドってアリなのか？”ってことまでね。どんなバンドを目指し、そのビジョンをどうやって実現するかっていうことを徹底的に話し合ったんだ。

チャック・ビリー：あのツアーによって、テスタメントはヨーロッパでヘッドライン・ツアーを組めるようになってね。俺らは４年間自分たちの音楽に真剣に取り組み、自分たちがこのシーンに属していることを心から証明したかったんだ。ほかのメンバーはみんなクールで、地に足の着いたヤツらばかりさ。全員ステージでグレイトなパフォーマンスができる状態だったから。

★★★★★

しかし、ツアーそのものが滞りなく進んだとは言えなかった。スイサイダル・テンデンシーズのフロントマンであるマイク・ミューアは、当時ツアーの様子について ***“スレイヤーとの間に問題なんてまったくなかったし、彼らは本当にクールだ。クルーにも同じことが言えるさ”。***

ではメガデスについては？ ***“俺らは彼らと会っていないし、それでとても満足だ”*** と答えた。さらに、メガデスのふたりのデイヴは、ケンカ中毒を経てから新たにツアーに出ている。

チャック・ビリー：あの何年か前に、俺らはメガデスとツアーに出たことがあった。デイヴ（ムステイン）はタバコ、酒、ほかに何でもやっていたのに、その数年後には別人になっていて、建物内ではタバコを吸うなって言っていたんだ！ 俺らは若くて“それはお前の問題であって、俺らの問題じゃない！”という感じだったけど、自分たちだけでそういった尖った状態を解決するのは難しかっただろうな。自分たちが置かれた状態を理解するには、俺らはまだ若過ぎたんだ。

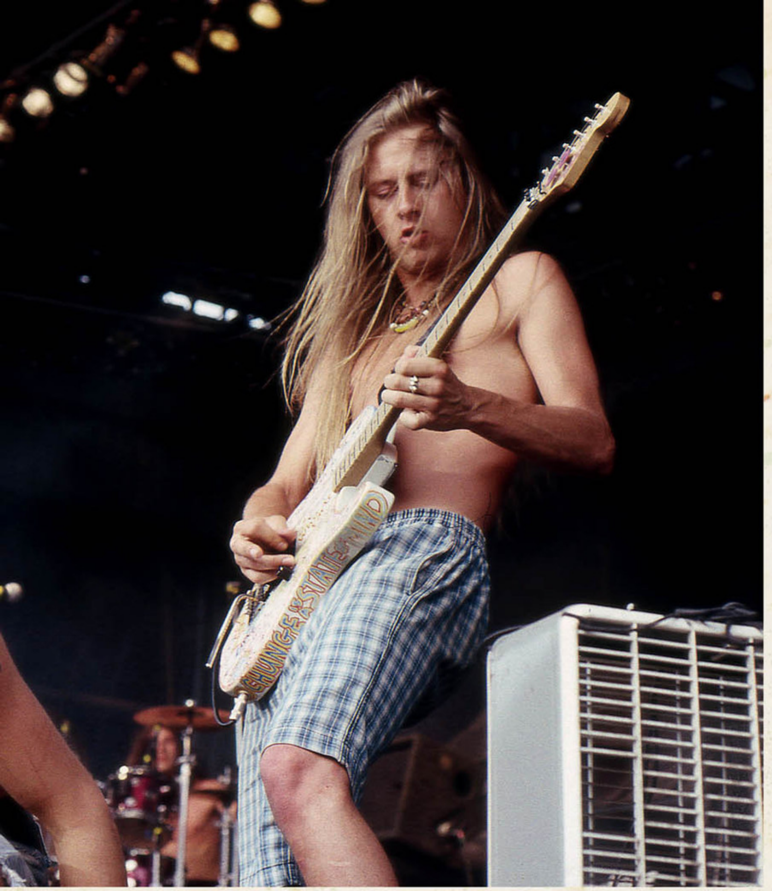
“WE WERE TOO IMMATURE TO REALISE WHAT WAS AT STAKE”

CHUCK BILLY

自分たちが置かれた状態を理解するには若過ぎたんだ。—— チャック・ビリー

ケリー・キング：誰にも難しいときってのはあるもんだ。俺とデイヴは何十年もピリピリしてきたが、それ以降の何十年では完璧にクールな関係になっていたから。当時の俺とムステインは行き詰っていたところがあったけど、それでもなんとかやってきた。のちにビッグ４のショウを一緒にやったとき、アイツから“ビッグ４の内ふたつのバンドでプレイしたことがあるのは俺らだけなんだぜ！”と言われたのはおもしろかったね。でも《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》の頃の俺らはみんな絶頂を迎えていて、自分たちの実力を知らしめようだとか、ファンにとって特別なライヴにしてやろうとか、毎晩息巻いていたのも事実だよ。

デヴィッド・エレフソン：俺らはクリーンだったから、パーティへ遊びに行くことはできなかった。そういった意味でロン・ラフィットは怖いマネージャーだったよ。彼にとってのアイコンはレイカーズ（※ LA のバスケットボール・チーム）のパット・ライリーで、常にチームをどう運営するか、各人の才能をどう発揮させるかを考えていた。おかげで俺らは同じ方向に行進させら



デイヴィッド・エレフソン：アリス・イン・チェインズには“神のご加護があるように”と祈っていたよ。あのメンツから考えれば、少しヘンな並びだったから。（ヨーロッパをツアー中だった1991年初頭に）チューリッヒの［フォルクハウス］という有名なコンサート・ホールにマーティ（フリードマン）と一緒にジ・オールマイティーを観に行ったんだけど、会場のスケジュール表にアリス・イン・チェインズの名前を見つけ“なんてヘンな名前なんだ？　コイツらは地元のバンドなのか？”と思ったのを覚えているよ。そしてメガデスの4人で彼らを観に行き、そして全員ブッ飛んだね。ロンにすぐさま電話をして、このバンドこそ俺らがツアーに連れ出さなくちゃならない連中だということを伝えたんだ。

ケリー・キング：最初は完全に嫌いだったんだ！「マン・イン・ザ・ボックス」がそこそこ売れていただけのバンドで、二度と耳にする気も起らなかったぜ。MTVはずっとあの曲ばかりプレイしていたし、そのこと以外俺は何も知らなかったから。でもアイツらを観て、その後はアイツらと一緒にほかのバンドのライヴも観ていたよ。レイン（ステイリー）は俺ら世代の最高のシンガーで、それまで観たことのない類稀なスーパー・スターだった。

れていたんだ。団体行動を取らされ、シラフになり、バンドでのミーティングを行ない……しかも酒抜きのね。うまくいくようにすべてが管理されていて、当時バンドが得ようとしていたグレイトなものに向かわせられていたんだ。

チャック・ビリー：頭突きし合うようなことも、そりゃ何度かあったさ。ケリーとデイヴ・ムステイン、俺とデイヴ・ムステイン、デイヴ・ムステインとデイヴ・ムステイン……ハハハッ！　結局俺らは全員とうまくやっていったけどさ。

★★★★★

当然、人間関係の衝突もいくらかはあったことだろう。しかし《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》のパート1は1990年10月14日にウェンブリー・アリーナでの大団円となり、その様子はスレイヤーの「ウォー・アンサンブル」のビデオで確認できる。

しかしバンドたちはその成功に酔いしれる間もなく、ツアーの続きを迎えた。アンスラックスが3つ目のヘッドライナーとして加わり、毎晩出演順を交代させることにバンドは合意した。オープニング・アクトは“ワイルド・カード”と呼ぶべき形でアリス・イン・チェインズが務めた。

スコット・イアン（アンスラックス）：俺らのアルバムがアメリカでゴールド・ディスクを獲得したばかりで、楽屋ではアイアン・メイデンといったヒーローたちと一緒だったりもしていて。そんなときに、同じ会場で数ヵ月後にプレイしないか？というオファーがきたんだ。俺らは“これを受ける必要はあるのか？　自分たちだけでもできるはずだ”という具合で、最初は断って。しかしある日ライヴを終えたあとにクソ長いファックスを受け取ったんだけど、そこには俺らがやるべき理由が山ほど書かれていてさ！

デイヴィッド・エレフソン：スラッシュ・メタル・ファンについて俺らが知っていることといえば、“スラッシュ好きじゃなければアウト”ってこと。それと同時に《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》のあとにアリス・イン・チェインズはヴァン・ヘイレンとプレイしてスーパー・スターになったけど、それはアイツらの自由さ！　撃たれてもすぐに溝に隠れて傷口から弾を取り出し、また戦い続けるアイツらの勤労意識を俺は常に褒めてきたさ。

★★★★★

ツアーのアメリカ・ラウンドは、1991年5月16日にダラスから始まった。ニューヨーク市のマディソン・スクエア・ガーデンではMTV『ヘッドバンガーズ・ボール』の特番が組まれ、メタル界の新星たちの到来を祝福する予定だった。

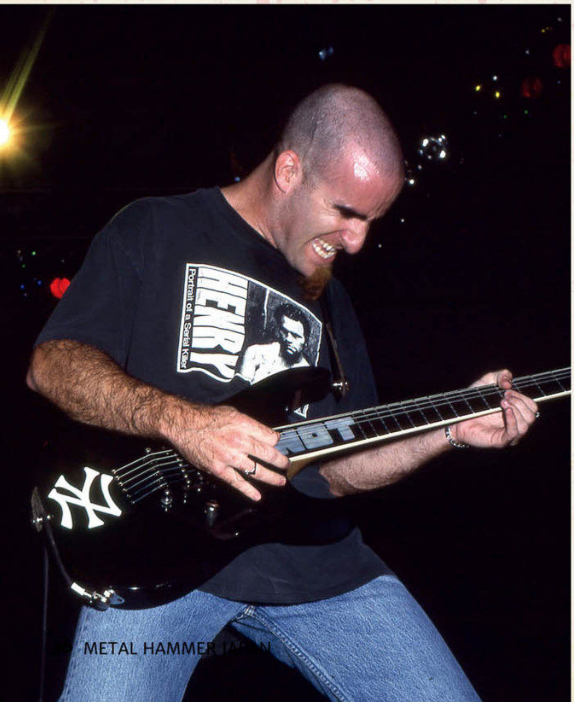
しかし当日はアメリカにおけるスラッシュの大きな分岐点となり、現場はなかなかに混沌と化していた。19000人のファンの一部は暴徒化しステージに向かって物を投げ始め、攻撃され続けたトム・アラヤはライヴ終了後にMTVのカメラに状況を説明している。

このことは地元のヒーローであるアンスラックスでさえも、トリを飾るために組んだ特別なセット・リストに対して、オーディエンスがどう反応するのかと不安になっていた。

スコット・イアン：パブリック・エナミーのチャックDとフレイヴァー・フレイヴを招いて「ブリング・ザ・ノイズ」をプレイしたんだ。あのツアーのオーディエンスがどう反応するのか見当がつかなくて、かなり異質な雰囲気だったよ。ディグってくれるヤツだけじゃなくて、"ラップとメタルを混ぜるんじゃねぇ！　ファック・ユー！"と叫ぶるヤツらもいるんじゃないかと思っていたから。しかしチャックとフレイヴがステージに上がってきたとき、それまでに感じたことのなかったエネルギーで溢れ返っていた。あれはかなり狂っていたね！

デイヴィッド・エレフソン：アンスラックスのホームタウンだったし、アイツらが主役の一日になったことを俺は誇らしく思っている。マディソン・スクエア・ガーデンでプレイするっていうのはとてつもないことだし、ああいったアンフィシアターのほとんどがグレイトな会場だ。あの夜は『ヘッドバンガーズ・ボール』のリッキー・ラクトマンを招いてさ。俺らはヘア・メタル・バンドではなくスラッシュ・バンドだったんで、MTVを気に入っていたんだ。ヘア・メタルが去ろうとしていた頃、メタリカやクイーンズライクといったバンドがチャートのトップに座るようになったよね。そしてシアトル勢が勢いづいて俺らを追いかけてくるのもわかっていた。確実に世界が変わろうとしていたんだ。

スコット・イアン：いくつかの会場では、フロアから座席を取っ払うなんて前代未聞だった。特にマディソン・スクエア・ガーデンなんて、そのなかでも最も大きなものだったから。まだあの頃はモッシュピットがどういったものなのか、会場もプロモーターもわかっていなかったんで、このことはすぐに大きな問題になったけどさ。だから、半分くらいの会場は座席を取り払わず"ウチはこのやり方で40年間やってきたんだから、仕事のやり方にゴチャゴチャ口を挟んでくるな！"といった感じで、その結果一万席くらいが破壊されてしまった。あのツアーのあとからは、メタルのショウではすべての会場の客席エリアがフェスと同じようなレイアウトになったんだ。



★★★★★

ヨーロッパ・ツアーの間にメディアで囁かれていた"対人関係のドラマ"は泡のように静かに消えかけており、バンドたちは良き時間を過ごしていた。彼らは若くしてアリーナを征服し、デイヴィッド・エレフソンはこのことを"サマー・オブ・メタル・ラヴ"と表現する。

デイヴィッド・エレフソン：当時メガデスとスレイヤーの間にはちょっとした確執が生まれようとしていて、それはおもに俺らのライフ・スタイルがかなり異なっていたことに由来している。食い物を投げ合うようなことも始まっていて、最初はパン程度だったんだけど、次第に七面鳥の丸焼きが部屋を飛ぶようになっていって。そうそう、アンスラックスはケータリングのレベルが高くてさ。アイツらには感謝祭のときに出てくるようなフル・スケールの料理があって、俺らは"レーズンでもいいから恵んでもらえないか"と物乞いをしていたんだから（笑）！

スコット・イアン：待ってくれ、俺らは基本的に同じ扱いだったはずだぜ！　食い物の投げ合いについては……それも事実とは違うんじゃないか？　トム（アラヤ）がやっていたのを目撃したし、チャーリー（ベナンテ）なんかは肩に魚を投げつけられていたから。トムが"またメカジキかよ！"みたいなことを叫び肩越しに皿を投げ飛ばしたんだけど、皿から飛んだメカジキがチャーリーの肩に見事に張り付いてさ。ただそれで誰かが気分を害するなんてことはなく、むしろみんな腹を抱えて笑っていたよ。

ケリー・キング：（いい思い出は）たぶんバンドらが集まったときかな。ほかのバンドと一緒にやるっていうのは簡単なことじゃなくて、特にキャリアや名声があるようなヤツらとだとなおさらだ。しかしそれがいつでもできていたのがグレイトで、みんなで集まることでスラッシュが勢いに乗っていることを世の中に知らしめることができたんだ。

デイヴィッド・エレフソン：あれは"サマー・オブ・メタル・ラヴ"だったんだ。ビールをかけ合ったり、女の子たちがシャツを脱いだりと……スラッシュのライヴではあまり目にすることのなかったロックンロールのヴァイブで溢れていた。ジェフ・ハンネマンとホテルのバーでグレイトな会話をしていたのも覚えているよ。アイツは何杯か

“I FUCKING HATED ALICE IN CHAINS!”

KERRY KING

俺はアリス・イン・チェインズなんて嫌いだったんだぜ!

——ケリー・キング

ビールを引っかけていて、俺らはずっと喋り続けていた。あれはジェフとの大切な思い出のひとつだな。あんなにも地獄のような曲を書く男なのに、とても親切でスウィートなヤツなんだ。俺はアイツの誠実さに敬意を表してきた。アイツは自分の力で独自のエンターテインメントの世界を作り上げてきたんだ。

スコット・イアン：ジェフとケリーはペイントボール・ガン（※絵の具玉が発射されるホビー銃）を手に入れて、クルーたちと遊んでいた。俺らが部屋に戻った瞬間にメッタ撃ちしたらおもしろいと考えたようでさ。結局俺らもそれを買って、日々撃ち合いまくるようになったよ。インディアナのヒルトンでは誰かの部屋が屋上につながっていたんで、協議の末に屋上の巨大なヒルトンの看板を40色の弾丸で撃ちまくってやったんだ！　おかげで再塗装することになり、クリーニングの費用も含めて1万ドルもかかったけどさ！　幸運なことに誰も逃げることはなく、それをみんなで折半して支払ったよ（笑）。

★★★★★

アメリカ本土での《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》ツアーにより、スレイヤー、メガデス、アンスラックスは、ロック・スターになること以上のものを得た。のちのビッグ４の原点となったのも事実である。“どうして○○はビッグ４に含まれないんだ？”と問う者がいても、答えは簡単だ。現在のメタルの地形を形成するための重要なツアーで、彼ら以外に誰がプレイした？　バンドの在り方、そしてメインストリームへと押し上げたあの重要なツアーでだ。

ジョン・ジャクソン：《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》は、その後私たちがパッケージ・ツアーを組むうえで大きな助けとなっていった。例えばスレイヤーが行なった《アンホーリー・アライアンス》ツアー（スリップノット／マストドン／ヘイトブリードらと2004年に第一弾が組まれ、ラム・オブ・ゴッド／チルドレン・オブ・ボドム／マストドン／ザイン・アイズ・ブリードによって2006年に、そして最終的にはトリヴィアム／マストドン／アモン・アマースらと2008年に行なわれた）はその代表的な例だね。

ケリー・キング：あのツアーはどれもバンドが前進し続けるためのものだった。あの時点で俺らはそのことに躍起になっていたわけじゃないが、80年代の終わりっていうのは実はスラッシュのピークじゃなかったんだ。というのも、あの直後にグランジっていうのがやってきて、すべてを蹴散らしていってしまったからな。音楽全体が変化し、俺らは『ゴッド・ヘイツ・アス・オール』で再びビッグになるまで待たなくちゃならなかったから。

スコット・イアン：あの時点では、俺らはビッグ４と呼ばれていなかったと思う。そもそも、そんな言葉は使われてすらいなかった気がするよ。メタリカはすでに巨大なバンドになっていたけど、この全米を周った巨大なソールド・アウト・ツアーをきっかけに俺らが大きくなっていったと言われるのは理に適っているさ。

デイヴィッド・エレフソン：ビッグ４っていうアイディアを思いついたのは、マルコム・ドーム（音楽ジャーナリストかつ英『METAL HAMMER』のベテラン・ライター）だと噂されている。彼がそれを知っているかどうかはわからないけど、確実に《クラッシュ・オブ・ザ・タイタンズ》以降にその言葉を耳にするようになっていったよ。俺らがあのツアーを始めたっていうのと、今もこうやって語り継いでいるってことは、かなり特別なことだから！

The latest article
from UK

Text by Matt Mills
Photo by Karl Smith
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』348

EVILE WERE MEANT TO BE THRASH'S NEXT SUPERSTARS

『Hell Unleashed』
輸入盤

イーヴァイルはスラッシュ界の新たなスーパースターになるはずだった。

……しかし、2000年代のスラッシュ・リバイバルを牽引したのち、ギタリストのオル・ドレイクは脱退、バンドは失速する。その後紆余曲折をたどった彼らだったが、2018年オルは復帰宣言をし、本年には待望の新作『Hell Unleashed』をリリースするに至った。シンガーとしての新たな顔も見せることになった彼が振り返る、空白の時間と次への自信。

2013年8月、オル・ドレイクは限界点に達した。大好きなスラッシュ・メタル・バンド、イーヴァイルのギタリストを14年間務め、ほかの仕事をしたことはなかった。バンドは台湾への往復20,000マイルの旅から戻ってきたところで、首都台北で行なわれた《Formoz》フェスティバルに参加するための長旅は5日間に及んでいた。まるまる1週間、友人や家族と離れて過ごしたことになる。戻って来たとき、彼らは20ポンドほど金持ちになっていた。

“すべての状況が「こんなことを続けていてもどうにもならない！」と叫んでいたよ”と、今日オルは振り返る。“全力を尽くしてはいたけど、まったく金にならなかった。「いつまで〈きちんとしたプロになれそうなバンド〉でいればいいんだ？」って”。

イーヴァイル初のアジア・ギグから1ヵ月もしないうちに、オル脱退のニュースが流れた。彼が16歳の頃から活躍を夢見た世界は、10年以上に渡る経済的な不安定

ベン・カーター（d）、ジョエル・グラハム（b）、オル・ドレイク（vo、g）、アダム・スミス（g）／L to R

によって彼をボロボロにしていたのだ。

燃え尽きた彼は、新たなパートナーであるナタリーと一緒になり、繊維の研究という新しい職を得た。のちに彼らには娘が生まれている。

これは“国民的スラッシュ・メタルの救世主”と称えられたミュージシャンのキャリアの人知れぬ終わりに思えたが、当人としては待ち望んでいたポジティブな状況の変化でもあった。***“バンドを辞めて普通のことをやれて良かったよ。世界で最もつまらないことのように聞こえるかもしれないけれど”***と認める。

1999年、イーヴァルとなるバンドに加入したとき、オルはまだ学生だった。兄でありフロントマンのマット・ドレイクは、学校の音楽室でドラマーのベン・カーターとジャムをしていた。そして“オルがメタリカの曲しか弾けない”という事実が、進む道を決定させる。ベーシスト、マイク・アレクサンダーを加入させると、4人はトリビュート・バンドを始める――“スラッシュ・メタルがこれ以上時代遅れになりようもない”というときにだ。ジャンルのリーダーであるメタリカやメガデスはスラッシュを捨てて久しく、デス・エンジェルやダーク・エンジェル、エクソダスといったバンドは解散していた。

“スラッシュをやっていたのはジョークだったんだよ。「メタリカ以外は聴く価値がない」って……俺たちが自分たちの曲を書かなかった理由のひとつはそれさ。無駄だと思っていたんだ。そこから曲を書き始めた理由ってのは、ギグのあとに「みんな俺たちに拍手しているけど、実際はメタリカに拍手している。自分たちの曲を書かなくちゃ！」と思ったからでさ”。

“WE WERE PUTTING SO MUCH EFFORT IN, FOR NO MONEY”

全力を尽くしたけれど、一銭にもならなかくて。

――オル・ドレイク

2004年になる頃には曲を書き、EPを録音していた。同じ頃、アメリカではブームが起き始めていた。アメリカには若いスラッシュ・バンドたちがいたのだ！　ミュニシパル・ウェイストやトキシック・ホロコーストといったバンドたちは、ただのアンダーグラウンドのハイプ（※過剰な宣伝）ではなく、実際に［リラプス］や［イヤーエイク］といった一流レーベルと契約を交わしていた。

“ミュニシパル・ウェイストのことを聞いて、「ほかにもこういうバンドがいるなんてありがたい。これで俺たちもアホっぽく見えないな！」なんて思ったことを覚えているよ”とオルは笑う。

盛り上がりを見せるスラッシュ・リバイバルのなかで、2006年《ブラッドストック》でのセットは、イーヴァイルをイギリス一番のビッグネームにした。ショウの翌日、イヤーエイクの創始者ディグビー・ピアーソンが、彼らを拾い上げたのだ。『メタル・マスター』のプロデューサー、フレミング・ラスムッセンにデビュー・アルバムを手がけてもらえないかと冗談で尋ねると、驚いたことに答えはOK。彼らはデンマークはコペンハーゲンの［スウィート・サイレンス・スタジオ］へと飛んでいった。

“圧倒されたよ。メタリカのゴールド・ディスクが何枚もあって。『メタル・マスター』や『ライド・ザ・ライトニング』が録音された卓を通して演奏したんだ。それだけでも充分異常なのに、俺がギターをミスるとフレミングが「ジェイムズはそんなことしないぞ！」なんて言うんだからね”。

イーヴァイルは『エンター・ザ・グレイヴ』を手に、デンマークから戻ってきた――狂ったようなリフと、ベイエリア全盛期のヘットフィールド風雄叫びに新たな生命を吹き込む懐かしいスラッシュとともに。

“これがリリースになると、ある雑誌は俺たちについて「このジャンルの復活を背負っている」と書いていて”とオルは振り返る。

これがイギリス・シーン再生の先例となり、サヴェージ・メサイアやシャープネルといった新しいバンドたちが爆発した。このアルバムのリリース後、ガマ・ボムといった同時期のバンドたちも、突如としてより大きなレコード・ディールを手にしたのだ。

“IT WAS DAUNTING TO SEE THE METALLICA GOLD DISCS”

ズラリと並んだメタリカのゴールド・ディスクには圧倒されたね。

―― オル・ドレイク

しかし、続く5年間がオルをボロボロにしてしまった。

2009年10月､スウェーデンをツアー中、ベーシストのマイクが肺塞栓症で死去。バンドは悲しむ間もなく、ひと月後にはイギリス・ツアーを発表する。翌年、彼らは数え切れないほどのショウをこなすも、収入不足でさらなるステップアップが不可能であることがわかったとき、ガラスの天井にぶち当たった。そして台湾への旅による悲惨な報酬で、我慢の限界を超えたのだ。

バンドを去ったのち、オルは『Old Rake』というソロ・アルバムをリリースしている。それをサポートするギグは一度としてやらないという条件つきで……だ。2015年から2018年の間、彼は一度だけ娘のために曲を弾いた以外、ギターに触れることはなかった。

残されたバンドのメンバーたちは、彼の代わりにフォーレン・フェイトのピアーズ・ドンノ・フラーを加入させたが、彼らはその5年間でほとんど曲を書かなかった。うまくいっていなかったということだ。

“マットは新曲をキッチリ作ることに集中したかったんだと思う”とオルは推測する。**“それがピアーズにはストレスだったんじゃないかな。マットと話をして、「なら俺に連絡してよ」なんて冗談を言ってさ。ただ、そのあとで「待てよ……それも悪くないな?」と真面目に思ったんだ”。**

家族もいて安定した仕事もある今、オルはイーヴァイルに戻ることに自信を感じていた。

2018年4月、彼の復帰が正式なものとなり、翌年の7月になる頃には、ニュー・アルバム用に充分なリフを書き上げていた。ほかに必要なものは、マットの歌詞だけだった。**“ただ、1年待ったけれど、何も出てはこなかった”**とオルは言う。**“イライラしたけど、理解はできた。彼にはとにかく時間がなかったんだ”。**

彼の兄はカークリーズの地方議会で働いているだけでなく、健康上の不安をいくつも抱えていた。近年マットは呼吸器の障害、キツい倦怠感、そしてなかでも最も恐ろしい、マイクの命を奪ったものと同じ肺塞栓症の兆候と戦ってきた。マットは2019年、あるインタビューにて**“それらの言葉を聞くや否や、俺は落ち込んで「また子供たちに会えるのだろうか?」と思ったよ”**と語っている。

2020年、マットは正式に身を引いた。この決断は、彼の健康状態とオルとの関係を改善することにもなる。**“イーヴァルをやっていないときのほうが、俺たちは仲がいいんだ。映画なんかの話をするただの兄弟だからね”**とオルは言う。**“彼とは毎日話をしているよ”**と。

オルはリズム・ギタリストとして、ベンの友人であるリップタイドのアダム・スミスを加入させ、歌詞のアイディアをデモにしたあと、自分はヴォーカリストの役割に収まった。**“メタル・ファンのことはわかっている。彼らは新しいシンガーを望まないだろ?”**と分析し、**“だから、知った顔が歌うのが一番抵抗が少ないんじゃないかと思って”**と説明してくれた。

イーヴァイルは『Hell Unleashed』とともに戻ってきた。復活が溢れ出る激しい大渦巻きだ。『エンター・ザ・グレイヴ』くらい猛烈で、リフは轟くように渦巻く一方、「Incarcerated」などのグルーヴ・モンスターは『サウス・オブ・ヘヴン』(スレイヤー)に入っていてもおかしくない。

ゾンビやサタン、『遊星からの物体X』といったお馴染みのメタル的テーマについて歌うとき、オルの奔放な雄叫びは、セパルトゥラのような野蛮なエッジを吹き込む。月並みな復活劇だが、それこそがポイントなのだ。**“初めての試みだからね。シェイクスピアにはなれないよ”**とニヤリ。

成熟したフロントマンであるオルは、自身を8年間もの引退へと追い込んだ悩みの種とはもう無縁であり、イーヴァイルの未来は安泰だ。**“このアルバムが完成する前に、すでに次のアルバムを書き始めていたよ”**と彼は幸せそうに笑う。**“おそらく2021年の終わり頃から新作に手をつける”。**

おかえりなさい、イーヴァイル。

METAL THRASHING MAD

イーヴァイルに続いたイギリスのスラッシュ・バンドたち

サヴェージ・メサイア

このロンドンのバンドは[キャンドルライド・レコード](かつてエンペラーやオーペスも所属)と契約後、スラッシュとNWOBHMをブレンドし大きな注目を集めた。初期の名盤『Silent Empire』や『Carnival of Souls』はただ速いだけではなく、派手なソロやサビからは古き良きメイデンを感じさせる。

推薦盤▶『Plague of Conscience』(2012年)

シャープネル

キャンドルライト・レコードと契約し、2度もラス・ラッセル(ナパーム・デス、アット・ザ・ゲイツ、ディム・ボガーなど)にプロデュースされたと言えば、一大事だということがわかるだろう。シャープネルはスイサイダル・テンデンシーズや初期セパルトゥラに匹敵するほど速く、そのリフはときを経るごとに強力なものになっている。

推薦盤▶『The Virus Conspires』(2014年)

レイン・オブ・フューリー

デビューEP『Psycho Intentions』には、非常にアンスラックスっぽいヴァイブがあったかもしれないが、チェルトナム出身の彼らはすぐにプログレッシブ・スラッシュに自らの居場所を見つけた。2nd(そして最高の)アルバム『Death Be Thy Shepherd』は、アクセル全開の突進するリフとクリエイティブなソロがぎっしりと詰まった10分超の曲を収録。

推薦盤▶『Death Be Thy Shepherd』(2015年)

ザ・ブリーディング

2010年に結成されたこの4人組は、イギリスのスラッシュ・リバイバルでは遅れてきたバンドで、デビュー・アルバム『Rites of Absolution』が出た2017年頃には､シーンは徐々に終わりを迎えていた。しかし、デス・メタル風の金切り声とトレモロ・ピッキング渦巻く本作は、消え行くムーブメントからの断末魔のようでシビれる。

推薦盤▶『Rites of Absolution』(2017年)

ヘヴィの流儀 #4

Text by Takahide“THUNDER”Okami
Translation by Tommy Morly
Photo by Mark Weiss（P.43、44）、William Hames（P.46）

イングヴェイ・マルムスティーン

Yngwie Malmsteen

ミュージシャンとは、自らの創造性を音楽という形へと昇華させ世に解き放つ芸術家だが、イングヴェイ・マルムスティーンほど、自分の感性に正直な人間はいないだろう。新作『パラベラム』にはコロナ期間中に作成した100に上る楽曲から選りすぐられたナンバーが並び、その全篇で怒涛のプレイを聴かせている。もちろん、どの曲にも速さに引けを取らないメロディが内包されているわけだが、では彼は“他人よりもヘヴィであること”を意識することはあるのだろうか？　ある意味ではバンド・サウンド以上にヘヴィな音域を誇るクラシックに大きく影響されたイングヴェイであるが、その彼の持つ“ヘヴィの流儀”、気になるところではないか。

Some people love it, but some don’t.
I’m not trying to do something I’m not.
This is what I do, this is Yngwie Malmsteen.

俺のアルバムを気に入る人もいれば、気に入らない人もいるだろう。
しかし自分らしくないことをするつもりはない、それがイングヴェイ・マルムスティーンという男なんだ。

15歳のときに聴いていたカセットにはブラック・サバスが入っていた。

――“イングヴェイ・マルムスティーンの音楽”と言えば、多くの人が“テクニカルかつメロディアス”というイメージを思い起こしますが、そもそも音楽を始めた少年時代、ハードな音楽そのものへの興味は持っていたものですか？

もちろんさ！　昔からハードでヘヴィな音楽を作っていたからね（笑）。15歳のときに聴いていたカセットテープには、ブラック・サバスが入っていた。ただ音楽には多彩な側面があって、俺が常に大切にしてきたのはメロディだったよ。モーツァルトが残した“メロディは音楽で、音楽はメロディだ”という言葉には完全に賛同するよ。

――ギターを本格的に始めたのはジミ・ヘンドリックスの映像（訃報ニュース）に衝撃を受けて、という話は有名ですが、その頃からハードなサウンドを求めていた？

そうとも言えるだろう。俺はクラシック一家で育ってきたから、家族はみんなオペラ声楽やヴァイオリン、ピアノなんかを演奏していて、4歳のときにヴァイオリン、5歳頃にはギターが与えられたよね。7歳のときジミがギターをぶっ壊している映像に衝撃を受け、本格的にギターをプレイすることになって。毎日10時間プレイして、9歳の頃には25歳ぐらいの大人ばかりのバンドでプレイするクレイジーなガキになっていたから。

――改めて、神童ですよね（笑）。

ただバッハやヴィヴァルディを聴いて育った俺にはブルースのペンタトニックがしっくりこなくて、それで対位法やペダル・ノートといったクラシックの手法を取り入れ、それらをヘヴィなサウンドでプレイすることにしたんだ。ヘヴィなドラムやギターは音を強めてくれたし、ブルースだとサウンドに限界があるような気もしたんだ。もちろんクラプトンを含めた連中も好きだし、あくまでもこれは俺の場合の話で、彼らとは少し違ったことがしたかったというのも忘れないでほしいね。

――ちなみに、当時の同級生はどんな音楽を聴いていましたか？　やはりハードな音楽を聴くという面でも、早熟ではあった？

いや、俺が子供の頃にはすでにキッスやスウィート、アリス・クーパー、ステイタス・クォーが人気で、誰もが日本製の安っぽいギターを持っていたな（笑）。俺自身アルバムを買っていたわけじゃないし、テレビやラジオから彼らの曲が聴けたわけではないけど、周りのみんなが何を聴いていたのかは知っていたよ。

――バンドにおけるギター・サウンドを知ってからも、“ロックよりもオーケストラのほうが迫力があるじゃないか”といった考えを持っていたりは？

そもそも両者とも、根本的に違うものという認識だな。俺はオーケストラとエレキ・ギターのための協奏組曲を書いたこともあるけど、大所帯のオーケストラでもメロウなサウンドはプレイできるだろ？　だからマーシャルのスタック・アンプを何台も積んだりツーバスのドラムで作り出すラウドなバンド・サウンドとは比べることができ

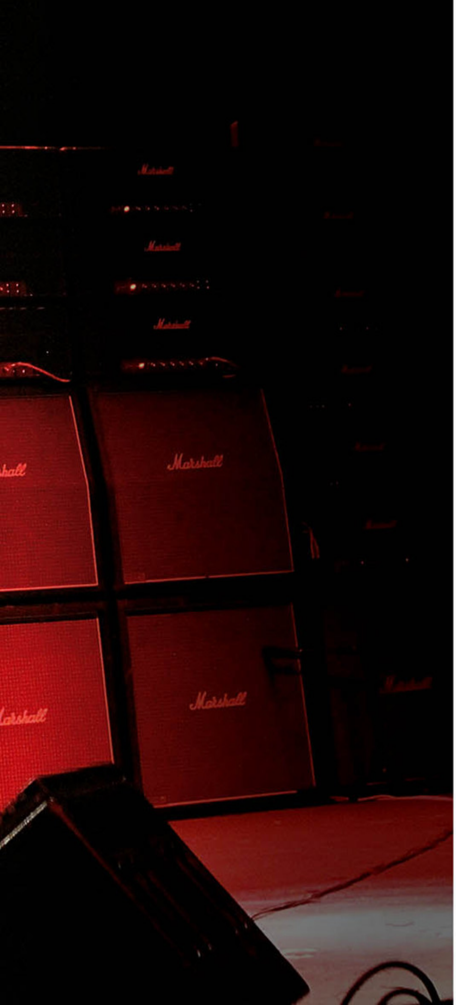
ないよ。ともにダイナミクスが異なっていて、違った意味でのパワフルさがある。俺はクラシック音楽が好きだけど、それをそのままプレイしたいとは思っていないから。

――なるほど。

かと言って、ロックだけをプレイしたいわけでもない。クラシック音楽からかなり影響を受けていて、それでいてマーシャルのスタックやツーバスのドラムから生み出されるハードなサウンドが好きなんだ。俺はほかの誰かを気にしたことなんて一度もないし、俺は自分の道を歩むだけさ。

――マーラーやバッハ、ワーグナー、ベートーヴェンなど低音の強烈な作曲家の楽曲は、生楽器でありつつ、バンド・サウンドとはまた異なる迫力があると言えますからね。

わかっているじゃないか！　ベートーヴェンからはとてもパワフルさを感じるし、バッハももちろんそうだよな。ワーグナーはコントラバスをC音まで下げるチューニングをしていたし、ベートーヴェンは聴覚に障害を抱えたからグランド・ピアノを特注して、ピアノが目立つようラウドにしていったっていうのもあるだろ。



誰かと自分を比べたことなんてなかった。それぞれがベストを尽くすよう祈るだけ。

――そうなんですよね。

歴史的背景を考えれば、演奏会場そのものがスピーカーのような音響特性を考えて作られていて、後方ではよりラウドに聴けるようにもなっているんだ。ただクラシック楽器ってヴォリュームだけに関して言えば、話し声程度のこともあるだろ。スタックのマーシャル・アンプから放たれる160dBなんて爆音はジェット機みたいだ。だからダイナミクスそのものが違うんだ。

70年代後半からすでに最もヘヴィなサウンドを作っていたから。

――あなたがプロフェッショナルのミュージシャンになったのは、まだティーンエイジャーの頃でしたね。

いや俺は12歳だったね。

――まだティーンエイジャー（※13歳以上の10代）ですらなかったんですね（笑）。プロ・ミュージシャンになるにあたり、ロック／メタル系ということもあって、“他者よりもヘヴィ”であるということは意識しましたか？

さっきも言ったように、そのときからほかの誰かと自分を比べたことなんてなかった。それぞれがベストを尽くすよう祈るだけで、“あいつらは俺よりもっとヘヴィなんだろうか？”なんて考えたこともなかったよ。70年代後半からすでに自分で最もヘヴィなサウンドを作ってしまったんだ。低めのチューニングでマーシャルのスタック・アンプを使い、速くプレイすることを知ってしまったから。そんなサウンド、ほかの誰からも聴いたことがなかったから（笑）。

――スティーラー、アルカトラスとしてデビューした1983年当時、すでに自分でも満足のいくヘヴィなサウンドでプレイできていましたか？　それともまだ進化できると感じていた？

当時から自分のギター・サウンドが好きだったし、機材は今とほとんど変わっていない。ただアルカトラスの頃はプロダクションに関してはあまり注目していなかったこともあって、今思うと軽くて冒険もしていない印象だな。それがまぁ80年代らしさでもあるんだけど、曲はいいものがそろっていたよね。

――また先程話に出ましたが、ソロとなってからは半音下げチューニングを基調としています。これは早い段階から、ベーシックの音域が低いということに重きを置いていたということ？

そう、スティーラーとアルカトラスは＜440HzのA＞でプレイしていたけど、最初のソロ・アルバム（『ライジング・フォース』）ではそれをフラットさせたんだ。おもしろい話をすると、ワーグナーはサウンドをラウドにさせるため、実はチューニングを半音上げていた。それ以降オーケストラではそのピッチが通例的に使われることになり、今に至っているんだ。だから現在俺らが＜E＞と呼んでいるものは、本来バッハの時代なんかではE♭だったということになるんだな。弦のテンションを上げればラウドになるといった考えがもとにあったそうだよ。そういった背景を知っているからこそ、Eの音を聴いても俺は実はE♭という風に認識してしまうところがあって。

○基準ピッチの変遷

◉A＝ラの音
（ギターの5弦開放の音）

バロック時代
A＝415Hz
（現代のA♭）

↗ 少し上がる

古典派時代
A＝430Hz

↗ 少し上がる

ワーグナー～現代
A＝440Hz

※諸説あり

避けたいところだけどね。だからソロは高い音でプレイするのが一般的なんだ。その質問に対して俺から言うことは特にないかな。

――あなたと言えば、インスト曲も人気が高いです。もしキーやテンポが同じ歌曲とインスト曲があった場合、迫力に違いがあると感じますか？

考えたこともなかったよ（笑）。まず、歌詞の有無という意味で、表現方法に違いがあるよね。メロディに乗った歌詞はひとつの表現方法であり、新たな次元を与えてくれるものだ。同じメロディだとしても歌えば歌詞が伴うわけであって……ただ、それがヘヴィかどうかとは関係ないかな。

――インストはヴォーカル・パートがない分、鳴っている音が減るということにもなりますよね。

ヴォーカルっていうのはヴァイオリンやフルートのように独奏曲を奏でる楽器のイメージで、"人の声"という、れっきとした楽器なんだ。ヴォーカル・メロディのある曲を作ったとしても、そこからヴォーカルを取り去ったら何かが足りないと感じるだろう。片やギターなどの楽器でメロディをプレイする曲を書いた場合、それを違う楽器に置き換えると別の曲になってしまう。これは何かを失うのではなく別物になるという意味なんだけど、前者のように人の声がない場合はほかの楽器でメロディを取るわけだが、俺はそれをギターで行なっている。だから常に曲をリードする何かしらの楽器が存在しているということだね。

――なるほど～。またダウン・チューニングという話では、例えば90年代の曲なら「ネヴァー・ダイ」や、2000年代の曲でも「デス・ディーラー」などは、もう少しピッチを下げてもマッチしそうな印象もあります。

いや、それはないかな。曲によっては6弦をC♯までドロップしたことはあったけど、基本的にソロ・アルバムに関してはずっとE♭でやってきたからね。まぁ、さらに言えば440HzのAにチューニングを上げるなんてことはこれからも絶対にしないだろうな。

――また速いパッセージのフレージングと、サウンド面の迫力やヘヴィさについての見解を聞かせてください。速さを求めるとダイナミクスが失われ、ヘヴィさが減ってしまうという意見をよく耳にします。その二点を共存させるのはやはり難しい？

そんなことを誰が言ったのかは知らないが、俺に言わせるとナンセンスだ。ヘヴィさやアグレッシブさというのはスピードとは関係ない。むしろ音使いによるところが大きいはずだ。まぁ、ソロを低い音でプレイするとドロッとしてしまうから、それは

みんなを満足させようと曲をイジっても結局は誰も満足しないと気づいた。

――ここまで聞いてきた信念をもとに作られたであろう『パラベラム』は、"まさにイングヴェイ色120%"な作品に仕上がりましたね。逆に、近年新しくインプットされ

ヘヴィさやアグレッシブさというのは、スピードとは関係ない。むしろ、音使いによるところが大きいはずだ。

た要素が反映された部分はあるのでしょうか？

作曲やインプロヴィゼーションのスタイルはすでにできあがっていて、スポンテニアスな形で発生したメロディやテーマを作り込んでいったんだ。外部からの雑音など一切なく、誰にどう思われるかなんて考えることもなかったさ。自分でグッドだと思うことをやるのみで、“以前こんなことをしたから次は何をしようか？”ではなく、“今したいことは何か？”を考えるのみだった。自分のなかから湧き出る情熱を音楽にするのみさ。それはアルバムを聴けばわかってもらえるはず。

――いつも以上に、各曲にてギター弾きまくりと言えますが、それは前作がブルースをコンセプトにした作品（『ブルー・ライトニング』）だったからという理由はある？

ハハハ、イヤイヤそれが理由ではなかったかな！　そもそもあのアルバムはリクエストを受けてのことで、長年“君はブルース・アルバムを作るべきだ”と言われていたからさ。“ゴチャゴチャうるさい！”と答えつつも、やっと実現したわけなんだが、だからといって俺は音楽への接し方や作り方を変えたわけじゃない。現在の自分にシックリきたものを作ったというわけさ。

――冒頭曲「ウルヴズ・アット・ザ・ドア」のようなハードなナンバーはオープニングにピッタリですが、「リレントレス・フューリー」のような叙情的なメロディを持った楽曲もあなたらしく、日本のファンは特に気に入りそうだなと感じました。収録曲のバランスについて意識することはありましたか？

年単位で時間があったから、実は100曲近く書いてきてね。そのなかでも、最もピュアなものを選んだつもりだよ。みんなを満足させようとあれこれイジっても、結局は誰も満足しないことになると昔気づいたんだ。

――我々も“イングヴェイがやりたい音楽”が聴きたいわけですからね。

そう、だから俺は自分が愛し情熱を感じる音楽を作ることを選んだ。その結果、多くの人に気に入ってもらえたなんて、とても恵まれていると思うよ。これからもこのやり方を変えずにベストな曲を詰め込んだベストなアルバムを、ベストなパフォーマンスで作っていくことを誓うよ。俺のアルバムを気に入る人もいれば、気に入らない人もいるだろう。しかし自分らしくないことをやるつもりはないし、それがイングヴェイ・マルムスティーンという男なんだ。

――自身の歌唱もちょっとハスキーで、収録曲にマッチしているように感じます。自分の声を意識して作曲をすることは？

お気に入りのkeyというのがあって、それはどことなく意識したかな。ロックンロールで一般的なEやAのkeyは好きじゃないんだ。できあがった曲のkeyをヴォーカルに合わせて変えることもできるけど、それはしたくなかった。このアルバムの曲はすべてkeyが異なっていて、すなわち曲が求めたままに歌ってみたということだ。「ウルヴズ・アット・ザ・ドア」はGマイナー、「リレントレス・フューリー」はEマイナー、「エターナル・ブリス」はAマイナー、「（ファイト）ザ・グッド・ファイト」はBマイナーなわけで、同じkeyの曲なんてありゃしない。シンガーには好みのkeyというものがあるが、もし俺にもそれがあったとしたら、すべて同じkeyで作曲していただろうさ（笑）。

――1曲目から<歌もの／インスト／歌もの／インスト～>と順番に展開していきますが、ここに意図は？

常に<テンポ、key、インテンシティ>を考えていて、このアルバムは強烈なものから始まり、レイドバックし、続く「トッカータ」のあとにはまた強烈なものがくり返されるよね。もちろん、このアルバムではヴォーカルが入っているか否かというのも関係していて、これらを上手く組み合わせていったんだ。

――このように、さまざまなカラーの曲が詰まった本作ですが、特にお気に入りのナンバーをひとつ挙げるとすると……？

それはかなり難しい質問だな！　アルバムを作り終えた今になって聴き返すと“あぁ、この曲はいいな。気に入った！”となるけど、また次の曲を聴くと“あっ、これもいいじゃないか！”となってしまい、どの曲もすぐ気に入ってしまう。今後それは変わってくるかもしれないが、結局は全部気に入っているってことになってしまうんだろうな（笑）。

――現在はツアーに向けた準備も進めているとのことですが、メンバー編成についてはどう考えていますか？

ヨハン・セバスチャン・バッハとアントニオ・ヴィヴァルディ、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンを連れていきたいけど……て、それは無理かっ（笑）！　基本的にいつも一緒にやっている連中で挑むつもりだよ。ドラムにブライアン・ウィルソン、ベースにエミリオ・マルティネス、キーボードにニック・Z・マリノというメンツだね。

――また、いろいろ大人の調整が必要になるとは思いますが、何人ものヴォーカルがスタンバイして歴代の曲を歌う“イングヴェイ・フェス”を期待する声も大きいですよね。

……ノー。

――で、ですよね……。そんな企画ものも含め、早くあなたのギター・サウンドにまみれたいものです。このにちもコロナ・ウィルスに気をつけつつ、1日も早い日本公演を楽しみにしております！

俺には日本との特別な友情がある。1984年の1月に初めて足を踏み入れたときから君たちが大好きで、世界最高のファンがいる国だ。日本でツアーをする日が待ちきれないし、近い内にすぐにでもプレイしに行きたい。ただそれまでの間は俺の新しいアルバムを最初から最後まで聴いてくれ。1曲聴いただけじゃ、俺の想いは伝わらないかもしれないからな。God bless you！　ドウモアリガトウ！

◎イングヴェイ印120%
2年半ぶりの最新が発売中！

『パラベラム』
キングレコード／KICP-4032

クラシック・ミュージシャンが解析する

イングヴェイの音楽はどうクラシカルなのか!?

“ネオ・クラシカル”というジャンルを確立し、メタル界きってのクラシック・フリークでもあるイングヴェイ。我々は彼の音楽を聴いて、各所で“クラシック的旋律”を連想するわけだが、これはクラシック畑で音楽をプレイするミュージシャンが聴いても“クラシカルに感じるもの”なのだろうか？今回は音楽的構造から、そのプレイ・スタイルをクローズアップしてみよう。

解説:土屋剛（協力:成瀬正樹）

Profile
つちやつよし● 1970 年生まれ。東京都出身。4 歳からクラシック・ピアノ、10 歳 からバンドを始める。幼少時の子守唄はベートーヴェンの交響曲。現在はキーボーディスト／アレンジャーとして精力的に活動。移動中、おもにメタルを聴く日々である。

ネオ・クラシカルで言われている“クラシカル”とは？

“ネオ・クラシカル”や“様式美”と呼ばれる世界のレジェンド、イングヴェイ・マルムスティーン。そんな彼の楽曲を聴いたときに感じるクラシカルな雰囲気には、どんな要素や仕組みがあるのでしょうか？その音楽要素に触れる前に、そもそもイングヴェイの音楽から感じられる“クラシカル”とはどのようなものなのか考察していきましょう。

†

クラシックと聞いて思い浮かぶ作曲家はバッハ、モーツァルト、それともショパン……いずれも超有名どころですが、それぞれ“バロック”、“古典派”、“ロマン派”という具合に、時代によってジャンルが分かれています。

イングヴェイの楽曲から色濃く感じられるテイストは、そのなかでもバロックと古典派からのものになります。アルバム『アタック！！』には「バロック＆ロール」や、バッハの名曲「G 線上のアリア」をカバーした「エア」が収録されていますよね。

また曲の展開からは、古典派の代表的な作曲家であるベートーヴェンの交響曲からの影響が見られます。イングヴェイ・ファン、ネオ・クラシカル・ファンを“クラシカルだ！”とシビれさせる要素とは、バロック的なフレーズと古典派の流れを組む壮大な楽曲展開、そこに攻撃的なメタル・サウンドが合わさったものでしょう。

このほか楽曲の特長として、長調（メジャー・キー）の曲はロック寄りが多く、短調（マイナー・キー）の曲はクラシック寄りが多いという傾向がある点も興味深いところです。

❋❋❋❋ イングヴェイの音楽から見たクラシック年表 ❋❋❋❋

◎：イングヴェイの音楽に影響を与えた音楽
( )：日本の歴史

○紀元前 6 世紀 （弥生時代）	数学者ピタゴラスが音階を発見
○14 ～ 16 世紀 （戦国時代～江戸時代への移行）	ルネサンス音楽の時代
◎17 ～ 18 世紀 （江戸時代中期～後期）	バロック音楽の時代 ピアノの原型“フォルテ・ピアノ”が発明される バッハ、ヘンデル が活躍
◎18 世紀 （幕末）	古典派音楽の時代 モーツァルト、ベートーヴェン が活躍
○19 世紀 （明治時代）	ロマン派音楽の時代 ベートーヴェン 、ショパン、リスト らが活躍
○1983 年	イングヴェイ、アルカトラス に加入
○1984 年	イングヴェイ、ソロ・デビュー・アルバム『ライジング・フォース』を発表

あのフレーズ、あの楽曲展開は本当にクラシカル？

イングヴェイのクラシカルさを、まずはフレージング面から見ていきましょう。彼のフレージングで特徴的なのは、ギタリストでありながらクラシック・ピアノで弾くようなフレーズを得意としている点です。

その“ピアノ的フレーズ”の特徴を技術面から見ると、ピアノでは弾きやすくともギターでは難易度が高いことが多く、また逆にギター向きのフレーズはピアノでは難しい場合があります。例えばアルバム『エクリプス』のタイトル曲のイントロは、ピアノ演奏ではあまり驚きませんが、ギターで弾きこなすのは至難の業。同じく『オデッセイ』収録の「デジャ・ヴー」のイントロなどもそうです。逆に『マ

グナム・オーパス』の１曲目「ヴェンジェンス」のイントロ・リフなどは、ピアノでは難しいと思われます。

この“ギター向き／ピアノ向き”の違いとなるポイントは“連続”と“音跳び”で、同じ音の連続はギター向き、音が上下に跳ぶフレーズはピアノ向きと言えるでしょう**【譜例①】**。

またイングヴェイは“ヴァイオリンのフレーズをギターに置き換えた”といった主旨の話をします。ヴァイオリンはメロディを弾くのが得意な楽器、つまり基本的には和音を弾きません（※和音＜ヴァイオリンの用語では重音と呼ぶ＞そのものを出すことは可能）。彼が言う“フレーズ”とは、ヴァイオリンで素早くマイナー・アルペジオやディミニッシュ・アルペジオを弾くことで和音のように聴かせるプレイを指すものと思われ、そのようなシュレッド（速弾き）は確かに多く用いられています。それまであったブルース・オリエンテッドな演奏から抜け出し、クラシック・ピアノ的なフレーズやヴァイオリン的な手法を用いているという点で、とてもクラシック的フレーズに近いと言うことができます。

†

次に楽曲展開を見ていきましょう。例えば「バロック＆ロール」のテーマ部分（25 〜 34 秒）のフレーズには、バッハ「インベンション 第４番」からのインスピレーションが感じられ、音跳び（27 秒、31 秒付近）や転調（キー・チェンジ／ 29 秒〜 34 秒）でのつなぎ方といい、ものすごくクラシカル！

ここでの“音跳び”とは、軸となる音を基点に音と音の間を行き来する動きで、イングヴェイが好む代表的なバロックっぽいフレーズ**【譜例②】**。転調では、それまでのフレーズとまったく同じものを別のキーに受け継ぐ際の“つなぎ”として、直前までマイナーだったフレーズをメジャーに置き換えることでスムーズにメロディを運んでおり、いずれもクラシカルに感じさせる展開です**【譜例③】**。「バロック＆ロール」以外の音跳び例としては、「ヴェンジェンス」イントロ（冒頭〜７秒）、「セヴンス・サイン」イントロ（冒頭〜４秒）。転調でのつなぎ方例には「セヴンス・サイン」イントロ（12 〜 13 秒）などがあります。

†

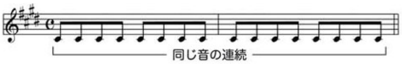
その一方で、“メタル界隈ではクラシックっぽいとされているが、クラシックとは違う”というものもあります。

例えば『オデッセイ』収録「ライジング・フォース」サビ（１分 21 〜 22 秒）でのコード進行です。全体的にはクラシカルなのですが（１〜３小節目まで）、４小節目ではクラシックではなかなか見られないコードが使われています**【譜例④】**。

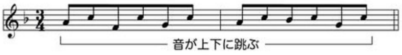
クラシックではもっと次につながりやすいコードを用いるのが定石ですが、そのようなコードを使うとクラシック的なキレイさが殊更に強調され、曲全体が持つロックの雰囲気には合わないとも言えます。私がこの曲を初めて聴いたときに一番印象的だったのはこの部分で、同時にとても魅力的に感じたものです。

譜例①　ギター vs ピアノ 弾きやすさの違い

◉ギターで弾きやすくピアノで難しいフレーズ例

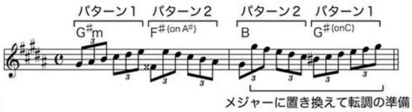


◉ピアノで弾きやすくギターで難しいフレーズ例

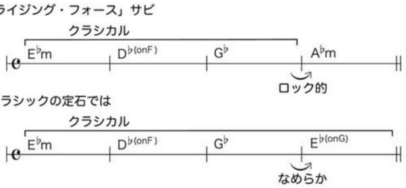


譜例②　バロックっぽさの出る音跳び

譜例③　「バロック＆ロール」で見られる転調へのつなぎ



譜例④　「ライジング・フォース」とクラシックの定石との比較



COLUMN　誰でもクラシカルになる音列がある！？

ギタリストの間では、例えば＜ハーモニック・マイナー・スケール＞という音列や＜ディミニッシュ・アルペジオ＞というアプローチを活用すると“イングヴェイっぽく（クラシカルに）なる”ということがよく言われています。

実際、ハーモニック・マイナーとディミニッシュ・アルペジオは、例えば「ライジング・フォース」、「セブンス・サイン」、「ファイアー・アンド・アイス」など多くの短調曲（マイナー key の曲）で使われています。ただし、イングヴェイのようなクラシカル・テイストにしたいのならば、曲中の一部分だけで特定の音列を使うのではなく、メロディのバックで用いたり、メロディそのものがその音列であったりと、楽曲全体でこれでもかと使い倒すことが重要。

例えばジャズでもそれらの音列を用いますが、そこでの使われ方は基本ピンポイントで、曲としてその響きのキャラクターを前面に出すような感じではありません。イングヴェイは音列の持つ響きを押し出すように、イントロ、メロディ、バック、ソロなど随所に織り込んでいます。それらの音列や音使いが曲中のいたるところで出てくるからこそ、聴き手をクラシカルな世界観へと誘うことができるということですね。

クラシック曲との構造的共通点

音楽には数学的に表わすことができる要素がありますが、そのひとつが＜度数＞と呼ばれるものです。“ドレミファソ～”の＜ド＞を基準とするなら“ドは１度”、“レは２度”、“ミは３度”……といった具合に、音の並びをナンバリングすることで、数字で曲やフレーズの構造をつかむことができます。

すると、それぞれがオリジナリティに溢れた異なる曲であっても、構成面では近い／遠いを比べることが可能となり、より曲の仕組みを理解することができるのです。イングヴェイのクラシカルなフレージングも、構造面からの類似性という視点からチェックすることで、さらに興味深く聴けるようになるのではないでしょうか。

まず、実際のクラシック曲に使われているキメと共通する部分がある一例として、「セヴンス・サイン」ソロ冒頭とモーツァルトの「小夜曲」を比較してみましょう。度数を使ってみると＜5→4→3→2→1＞と同様のラインであることに気づきます【**譜例⑤**】。このメロディの動きが転調しながら繰り返されていき、その転調自体が次の転調へのつなぎとなる展開も含めてとてもクラシカルです。

また「バロック&ロール」のテーマとバッハの「インヴェンション第４番」にも、メロディのモチーフの動きに共通性が見られます。６つの音符のくり返しで音階を上下するメロディがモチーフとなり、その６番目の音が１番目の音へのつなぎとなっています【**譜例⑥**】。そもそも西洋音楽の音階は数学をもとに発明されたものであり、その概念を音に置き換える構成もクラシカルさを醸し出す要因なんですね。

†

逆に、構造面では共通していながらも、クラシカルとはまったくの別モノとなっている場合もあります。例えば、ドラマチックでクラシカルな「ジェット・トゥ・ジェット」のソロ冒頭キメ部分と、キャッチーなポップスである「やさしく歌って」（ロバータ・フラック）のサビ【**譜例⑦**】。コード進行の度数の動きは同じですが、この２曲に共通性を

代表曲「ファー・ビヨンド・ザ・サン」をクラシック目線でアナライズ！

アナライズの最後は、全ネオ・クラシカル・ファンのアンセムとも呼べる「ファー・ビヨンド・ザ・サン」のクラシック要素をチェックしていこう！

収録
『ライジング・フォース』

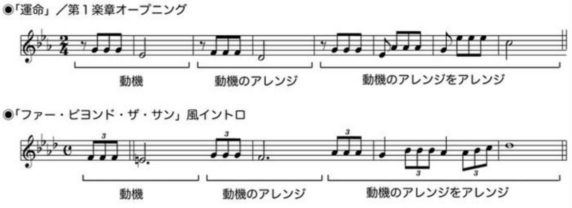
●オープニングに見るクラシック的動機

イングヴェイの代表曲と言えば、「ファー・ビヨンド・ザ・サン」。ソロ第一作『ライジング・フォース』に収録され、以降、ライヴでは必ず演奏される超絶鉄板曲であることは言うまでもないでしょう。インスト曲であることもあり、イングヴェイのクラシカル・フレイバーが詰め込まれた曲だと認識されていると思います。

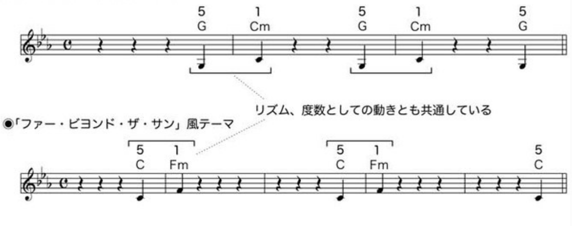
その「ファー・ビヨンド～」をクラシック音楽家目線で聴いた場合に浮かぶのが、ベートーヴェンの「交響曲第５番《運命》」との共通点です。まず楽曲冒頭ですが、あまりにも有名な「運命」の出だし“ジャジャジャジャーン”と、音高は違えどリズムの仕掛けなどのフレージング面で共通点が感じられます。この出だしのような部分を音楽用語で“動機（モチーフ）”と呼び、「運命」では動機を少しずつアレンジして次々と展開していくのですが、その手法が「ファー・ビヨンド～」でも同様に見られます【**譜例⑧**】。

コード進行においても、「ファー・ビヨンド～」のイントロが終わってすぐのテーマ部分に「運命」の第１楽章のエンディングに通じるものがあるなど【**譜例⑨**】、楽曲としてはまったく違うものでありながら、構成される要素や作りの面において共通する点が散見されます。

譜例⑧　「運命」と「ファー・ビヨンド・ザ・サン」　動機展開の共通点



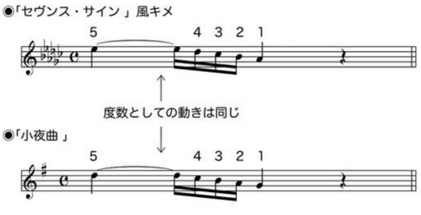
譜例⑨　「運命」と「ファー・ビヨンド・ザ・サン」　コード進行に合わせるキメの共通点



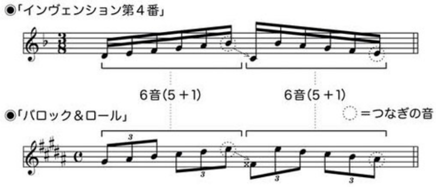
感じることはなかなかなく、「やさしく歌って」サビはクラシカルでもイングヴェイ的でもありません。

構造面では類似する部分がありながら、表現の仕方次第でテイストが異なることもある。そのような点への気づきも、音楽を深く聴いていくうえでのおもしろさのひとつだと思います。

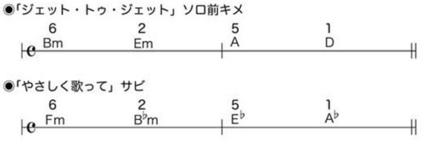
譜例⑤　「セヴンス・サイン」と「小夜曲」度数で見る共通性



譜例⑥　「インヴェンション」と「バロック＆ロール」



譜例⑦　「ジェット・トゥ・ジェット」と「やさしく歌って」



●クラシック的コード進行とロック的コード進行

共通項とは逆に、「ファー・ビヨンド～」にはコードの使い方において一般的なクラシック曲では見られない独特なところが多々あることも特筆すべきところです。

少々理論っぽい話ですが、コードのメジャーとマイナーの使い分けがそう。「ファー・ビヨンド～」冒頭部のコード進行とクラシック定石パターンを比較してみましょう**【譜例⑩】**。5つ目のコードが「ファー・ビヨンド～」ではF（メジャー）ですが、クラシックではFm（マイナー）となるのが一般的です。このような進行のなかでメジャー・コードを使うところが、クラシックではなかなか見られない部分です。

曲中にクラシック的な部分とそうではない部分があり、いい意味でコード進行やフレーズに期待を裏切られる独自性こそが、クラシック目線で見た際にむしろシビれるところです。

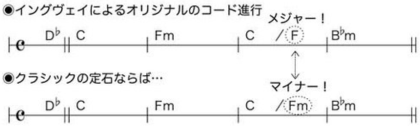
クラシカルと感じさせながらもクラシックとは異なる独特さは、イングヴェイのほかの曲でも多々見られるのですが、そうなるのは曲作りの概念の違いによるものであろうと思われます**【譜例⑪】**。

イングヴェイがリスペクトしているバロックや古典派のクラシックでは、そもそもメロディにコードを合わせるという（現代のポピュラー・ミュージック的な）概念ではなく、それは“コードがすなわちメロディでもある”というもの。コードと解釈できるような流れがメロディでもあるのならば、メロディとベース・ラインだけでも曲が成り立つようになります。

その概念のわかりやすい例としては、TVゲーム『スーパーマリオ』シリーズのメインBGMがそう。大きく分けて［上パート（メロディ）］と［下パート（伴奏）］で構成されていますが、上パートのサポートであるはずの下パートだけでもメロディとして成り立つ動きがとてもバッハ的です。曲調は全然クラシックではありませんが、音の組み合わせはクラシカルということですね。

「ファー・ビヨンド～」ではほかにも、ギターとキーボード・シンセが交互に出てくるソロ・バトル部分にも、とてもクラシック的な手法が見られます。同じ展開を次々と転調して登場させるアプローチは「運命」の中盤部分にもあり、加えて言うとチャイコフスキーの曲にも多く見られる展開です。

譜例⑩　「ファー・ビヨンド・ザ・サン」冒頭部



譜例⑪　曲作りの概念の違いから生じるコード展開の違い

なお「運命」は大きく4つのセクション（第1～4楽章）に分かれていて、「ファー・ビヨンド～」との共通点が多いのは第1と第3楽章で、特に最も有名な第1楽章に共通点が多く見られます。

ただし、もちろんそれは“パクっている”といった低レベルでの話ではありません。意識的・無意識的に音楽史の偉人からインスピレーションを得ている部分もあるかとは思いますが、クラシックの大曲と“同じ手法が用いられている”ということと、イングヴェイの絶対的個性……その両要素の融合こそが魅了的なのです！

両曲の相通ずる部分、反対に浮き立つ違いを意識し聴き直してみると、ネオ・クラシカル屈指の名曲「ファー・ビヨンド・ザ・サン」を、さらに興味深く感じることができるのではないでしょうか。

特集

ヘヴィメタルはイントロで聴け! with 人間椅子

昨今の流行り音楽は、手短に聴者を惹きつけるためイントロを排除している……そんな傾向に辟易としている貴兄も多いことでしょう。我々メタル・ファンとしては、やはりイントロから心を高揚させたいではありませんか。そこで今回は、メタル楽曲において特に大切なセクションであるイントロにスポットを当て、さまざまな角度からその重要性を再確認していきます！　これを読んだら"メタル・イントロ・ドン"、やりたくなりますよ～♪

Overtune

"聴き流せない"ヘヴィメタルのイントロ

ヘヴィメタルがほかの音楽に比べ印象的なイントロを持つ曲が多いのは、数多のメタル・ミュージシャンが"イントロこそ必聴・必殺のセクションである"としている証拠とも言える。まずは本特集の"開幕章"として、メタルのイントロとは何たるものか!?を見ていきたい。

文:山本彦太郎

ライター／編集者。イントロ、というか"始まり方"だと、アイアン・メイデンの「3月15日」～「ラスチャイルド」には衝撃を受けました。"終わり方"だとドリーム・シアターの「プル・ミー・アンダー」です。

メタル的イントロの効能

イントロとは［序奏・前奏］などと訳されるように楽曲の冒頭部のことですが、楽曲の名刺代わりとしてサビと同等のインパクトを持つこともある重要なパートです。かつては"イントロ当てクイズ番組"がお茶の間を賑わしたように、"その音"を聴くだけで楽曲が判別できるほど印象強いものと言えるでしょう。

イントロは序奏・前奏と書きましたが、それらをひっくるめて"導入"と捉えると、よりその存在意義がつかみやすくなります。では"何を何に対して導き入れる"のか。それはもちろん"リスナーを、その楽曲が持つ世界観や物語へ"です。その楽曲が楽しいものなのか悲しいものなのか、穏やかなのか激しいのか……それらをスムーズに、ときに劇的に伝えるのがイントロの役目と言えるでしょう。それを逆手に取って場面を急展開させるパターンもありますが、いずれにせよ"つかんで引き入れる"という作用が重要なわけです。

†

この"つかみ"という点を極端に推し進めたのが<イントロ＝サビ>、つまり"サビ始まり"の楽曲です。

CMタイアップが有力なプロモーション手段となった90年代末頃にも持てはやされた手法ですが、こと最近ではサブスクリプション・ストリーミング対策として、短い時間でパッと耳を惹くため（スキップさせないため）に、"サビ始まり"もしくは"イントロなしの歌始まり"の楽曲が増えているという考察を散見します。昨今巷を賑わせたＪポップ楽曲を思い起こせば、確かにうなずける意見です。

ではヘヴィメタル／ハードロック（HM/HR）の場合はどうでしょうか。ボン・ジョヴィの「禁じられた愛」、アイアン・メイデンの「キャン・アイ・プレイ・ウィズ・マッドネス」、メタリカの「フューエル」などサビ始まりの楽曲も確かにありますが、それほど多いわけではありません。

これは、HM/HR がサビなどと同等のインパクトを持つ"リフ"主体の音楽だということが一点。導入にしても、悪魔やファンタジー、SF など非日常的な世界観への誘いや、死や社会問題への怒りといった現実的なテーマを極端な形で表わすためのムード作りといった点で、ほかの音楽スタイルとは異なるわけです。

インパクトのあるリフや、先行きを期待させるようなイントロがあれば、小手先の策を弄さずともいい。メジャー・リーグやプロレスの選手入場曲として HM/HR が多く使われているのも、当スタイルが短いフレーズ（おもにイントロ）で一気にテンションを上げてくれる（引き込んでくれる）音楽であるという証拠と言えるでしょう。

メタル・イントロ・パターンを分類してみると……？

例えばビートルズの「ハード・デイズ・ナイト」や小田和正の「ラブストーリーは突然に」のイントロは、誰もがすぐに楽曲を思い浮かべる名イントロです。

ですが､あの“ジャーン♪”や“チャカチャーン♪”といったギター・ストロークはその後楽曲に登場するわけではなく、いわばイントロ用必殺フレーズ。

一方で、イントロのみならず、まさに字義どおり楽曲を通して繰り返し登場するのがリフであり、HM/HRの特徴、強い武器となっています。誰かに「スモーク・オン・ザ・ウォーター」を説明するには、サビよりも“デッ・デッ・デー♪”というリフを伝えたほうがわかりやすいはず。そのくらいリフは記名性の高いものであり、つかみであるイントロたり得るものであります。

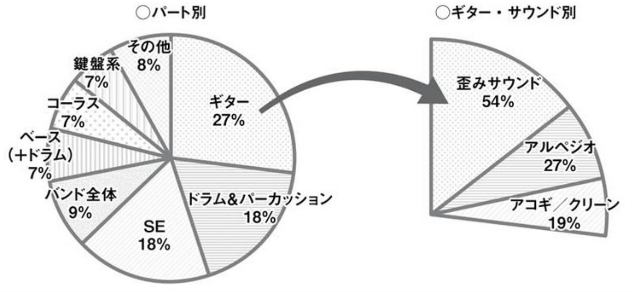
HM/HRのイントロと言えば歪んだギター・リフを思い浮かべますが、念のため手元のiTunesをランダム再生して、200曲強ほど始まり方を集計してみました。結果はやはりギターが59曲でトップ。以下、バンド全体：19曲、ベース（&ドラム含む）：15曲、ドラム&パーカッション：40曲、キーボード(ピアノ、オルガン含む)：14曲、コーラス：15曲、ストリングス&オーケストラ：５曲、SE：39曲、フェード・イン：8曲、民族楽器：1曲、声：４曲。

ギター59曲の内訳としては、アコギやクリーン･トーンが11曲､アルペジオが16曲で、それ以外はイメージどおりの歪みギターによる定型フレーズやコード弾きとなります。筆者の音楽嗜好の偏りや、ギター・リフも含む“バンド全体”といった曖昧な区分けなどはご容赦願いたいですが、思いのほかバラけたなというのが正直な感想です。

SEは、雷雨、鐘、銃声、クワイア、演説や朗読などのパターンが多かったほか、時代が新しくなるほどデジタル・ノイズ的なものが多くなっていく印象。いずれにせよ、おどろおどろしさや荘厳さ、無機質な SF 感など、楽曲の魅力を底上げするのにピッタリな導入という印象。

ドラムは、バッキング・リズムの先出しと言えそうなベーシック・パターン始まりが多く、ドラム・ソロのようなものは数えるほどでしたが、アイアン・メイデンの「イーグルス・デア」とジューダス・プリーストの「ペインキラー」は、新ドラマーのお披露目的な配慮も感じられ興味深い例でした。

●メタル・イントロ開幕パターンの内訳（当企画調べ）



メタルの王道：ギター・リフ・イントロを考える

話をギター・リフ／フレーズによるイントロに戻すと、それらは大別して［コード弾き型］と［フレーズ型］に分類できるかと思います。境界が曖昧な感じもありますが、オジー･オズボーンの「月に吠える」が前者で、「クレイジー・トレイン」が後者というイメージ（「クレイジー・トレイン」の場合、正確には<イントロ２>となりますが)。

前者の［コード弾き型］は、HM/HR の特徴でもある“パワー・コード（ルート音＋５度音)”を主体としたもの、またヘヴィさを出すためにギターの最低音、つまり６弦開放音を絡めたものが多く見受けられます。HM/HR らしさを出すのに間違いのない手法ですが、一方で組み合わせに限りがあり、ほかの曲とどこか似通ってしまうというマイナス点も。

LAメタルを俯瞰してみると、初期はこの［コード弾き型］リフが多く、90年代近くに技巧派ギタリストたちが台頭してくると、後者の［フレーズ型］リフが増えてくる印象があります。逆に言うと、ある意味縛りのある［コード弾き型］リフで多くの名イントロを作り上げたモトリー・クルーのミック・マーズなどは、非常にセンスのある、過小評価されたギタリストと言えるかもしれません。

後者の［フレーズ型］はよりギタリストのエゴが出たものと言え、技巧的に組み立てられたものや、歌メロをなぞる／サポートするものが多く見られます。［コード弾き型］に比べ記名性が高い一方、勢いやパワーで一気に巻き込む力が若干弱かったり、フレーズを展開／積み重ねることでイントロ部分が長くなってしまったりという一面もあるでしょう。

このあたりはさじ加減が重要ですが、やはりアイアン・メイデンはその組み立てが抜群にうまい。代表曲の「撃墜王の孤独」では<イントロ１>で重厚感を、<イントロ２>で疾走感を提示し、かつ<イントロ２>は曲のシメにもなるという構成ですが、ライヴではさらに「チャーチルズ・スピーチ」という演説 SE が冒頭に加わり雰囲気を盛り立てます。これらを含めて５分程度というコンパクトさは見事のひと言です。

もちろんアイアン・メイデンの例は HM/HRの多様な表現方法のひとつに過ぎず、メタリカのようにリフを積み重ねてテンションを上げていくパターン、プログレ・メタル勢のようにアンサンブルに重きを置いたパターン、スリップノットなどのようにとにかく強烈な先制パンチで有無を言わさず聴く者を巻き込むパターンなど手法はさまざま。ですが、いずれもそのバンドや楽曲の世界観に誘うためのイントロという部分は共通しています。

この言わば非常に丁寧な前置きは、このご時勢の風潮とは真っ向から対立するものですが、それが HM/HR という“聴き流せない”音楽の大きな特徴であり、武器になっているわけです。

では次のページからは、より細かくそのバリエーションを見ていくことにしましょう。

1st Intro 時流を代弁するジャンルの盛衰

メタル・イントロにも時代による変化はあるのか!?

“ヘヴィメタルのイントロは、時代やジャンルによって何かしらの特徴があるのか”が本章のテーマ。イントロは楽曲を構成する一部なので、その特徴も曲によってさまざまだが、それでも時代的な流行り廃りはあるのでは？　ということで、少々こじつけっぽい部分もあるが、各時代のイントロについて考えてみたい。

文:竹内伸一

1968年生まれ。某音楽専門誌の編集部勤務を経てフリーのライター／編集者に。ヘヴィメタル関連では、『ラウドパーク』の公式パンフレットの制作などに携わる。好きなイントロはモーターヘッドの「キルド・バイ・デス」。

その後の礎となった70年代イントロ

まずは70年代……メタル黎明期のイントロから。

まず率直に感じるのは、長尺なイントロが多いという点。例えば、ブラック・サバスの「魔法使い」（1970年）は1分15秒あり、全体が4分22秒なので、約1/4がイントロということになる。レッド・ツェッペリンの「永遠の詩」（1973年）は、全5分35秒のうち1分27秒がイントロだ。比較的イントロをコンパクトにまとめる傾向があるジューダス・プリーストも、「ラン・オブ・ザ・ミル」（1974年）では1分11秒という長尺のイントロを持つ（全体は8分35秒）。

アルマゲドンの「肉食鳥」（1975年）は印象的なリフが冒頭から2分4秒も続き（全体は8分21秒）、ビートルズなら1曲終わってしまうほどだし、ディープ・パープルの「レイジー」（1972年）は前半はインスト・パートという感じではあるが、歌い出しまで4分22秒かかる（全体は7分23秒）。

インプロヴィゼーションで曲が延々と引き伸ばされたり、プログレッシブ・ロック的に複雑な構成を持っていたりと、曲そのものが長尺な傾向にあった時代なので、当然と言えば当然。80年代以降もメタル系の楽曲では長いイントロを持つ曲も多々あるのだが、それらは70年代の音楽の影響を受けている部分も大きいので、70年代に生まれたインパクトのある長尺イントロが、メタルの定番になったと言えるのではないだろうか。

and more!

①

②

③

④

ブラック・サバスは長尺イントロが多いが、その代表が①「ウォー・ピッグス」。ライヴではハイハットの刻みに合せて手拍子が巻き起こるのが定番であり、メタル史上最も盛り上がるイントロのひとつなのでは。プロト・メタルのひとつされるハイ・タイドの②「失意の終局」は、1969年発表だがご容赦を。1分46秒におよぶイントロは、サバスばりのヘヴィなリフにストリングスが舞う劇的な逸品。

UFOの③「ドクター・ドクター」は、全4分13秒のうち、58秒がイントロ。マイケル・シェンカーの流麗なギターが泣ける。④「アム・アイ・イーヴル？」は1980年発売だが、70年代から演奏されていた曲なのでここで触れておきたい。ギター・ソロも盛り込んだ起承転結のあるイントロは、スラッシュの雛形とも言える。

メイン化で二極化する80年代イントロ

80年代のメタル・イントロの特徴のひとつは、キーボード＆シンセサイザーの大胆な導入だろうか。

象徴的なのがヨーロッパの「ファイナル・カウントダウン」（1986年）だろう。イントロで派手に鳴り響くシンセのフレーズ（曲中にも登場）はとてもキャッチーで、サビのメロディよりも有名。この印象的なフレーズのおかげ（？）でこの曲はアメリカを始め、全世界で大ヒット。スウェーデン出身の彼らを、一躍ワールドワイドな存在へと押し上げた。

キーボード＆シンセの導入で世界的な存在になったと言えば、ラッシュも同様。70年代にはツェッペリン・タイプのハードロックを鳴らしていた彼らだが、70年代後半からは鍵盤類を大胆に活用するようになる。「トム・ソーヤー」（1981年）のイントロでは、シンセサイザー、オーバーハイムOB-Xの低音フレーズをフィーチャー。のちにヒップホップのサウンプリングのネタとしても重宝された。

ヴァン・ヘイレンの「ジャンプ」（1984年）も象徴的。ここで聴けるエドワード・ヴァン・ヘイレンによるキーボート・イントロも、今だ何かにつけて使われる超頻出フレーズとなっている。

ではなぜ、キーボード＆シンセサイザーが多用されたのか。単刀直入に言えば、売れるためだろう。

80年代に入ると、アメリカではヘヴィメタルがメインストリームの音楽に。多くの人に受け入れられるためには、サウンドを大衆向けにアップデートする必要もあったというわけだ。その一翼を担ったのがキーボード＆シンセで、イントロでもそれらを印象的に使った曲が多くなったのだと考えられる。

そのいい例がホワイトスネイクの「ヒア・アイ・ゴー・アゲイン」。1982年に初リリースされた際には、ジョン・ロードのオルガンによる哀愁味を帯びたフレーズがイントロを飾っていたが、1987年の再レコーディング版では、シンセ版としてリアレンジ。よりキャッチーかつドラマチックなイント

ロになっている。

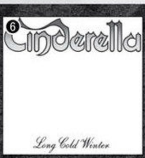
さらに、これとは別のメンバーで録音し、アメリカでシングル・リリースされた“Radio Mix”と呼ばれるバージョンも1987年に登場。ここでのイントロは、おそらく“キーボードによる導入パートは長尺でエアプレイ向きじゃない”という理由から、ばっさりとカット。ギターの比重が大きくなっているものの、味つけとして加えているキーボードが、全体をソフィスティケイトした雰囲気に仕立て上げていて、まるでAORのよう。1982年のパワー・バラードとは別物になっている。

†

80年代のもうひとつのトピックは、スラッシュ・メタルの台頭だろう。

アメリカでの成功を目指してAOR化を加速させるメタル・バンドがいた一方で、スラッシュ・メタルはそのカウンター的な存在となった。こちらのイントロは70年代を踏襲するかのごとく長尺なものも多く、また核となりリフでグイグイと押していくようなパターンが典型だろうか。さらにはイントロにも起承転結を作り、劇的に本篇へとなだれ込むような楽曲も多い。メタリカの「メタル・マスター」（1986年）やスレイヤー「レイニング・ブラッド」（1986年）、アンスラックス「インディアンズ」（1987年）、メガデス「イン・マイ・ダーケスト・アワー」（1988年）あたりが代表例だろうか。

and more!



⑤「ホーム・スウィート・ホーム」と⑥「ドント・ノウ・ホワット・ユー・ゴット」はキーボード&シンセではなく、ピアノがイントロを飾る。いずれも甘美なバラードで、ライヴではそれぞれトミー・リー、トム・キーファーがピアノを演奏。ワイルドな風貌としなやかにピアノを奏でる姿とのギャップに萌えた婦女子が続出したとか。

一方、スラッシュは世界各地に伝播。ドラムのリズムに導かれて加速していくクリエイターの⑦「Storm Of The Beast」を始め、起承転結を持つスラッシーなイントロも多い。日本ではCASBAHの⑧「Russian Roulette」が白眉。緩急をつけながら高揚感を高め、高速で鋭利なリフへと転じて突き進む構成が見事。

90～2000年代のモダン系に傾向はあるのか？

90年代に入ると、アメリカではグランジ禍によりメタルは一気に冬の時代へ。メタルの主戦場はヨーロッパへと移り、そんななかからスウェーデンを中心にメロディック・デス・メタルが勃興する。

このジャンルの特徴は、言うまでもなくデス・メタル的スピード感&過激さと、王道メタルのメロディアスな部分の融合で、イントロにもその傾向が見て取れる。

例えば、このジャンルの先駆となったカーカスの「ハートワーク」（1993年）。このイントロではブラスト・ビート風の高速ドラミングが飛び出す一方で、ギターが流麗なメロディを奏でており、メロディック・デス・メタルを体現するような要素が詰め込まれている。アット・ザ・ゲイツの「ブラインデッド・バイ・フィアー」（1995年）、イン・フレイムス「ビハインド・スペース」（1994年）なども同様のイントロを持っており、これらのメロディック・デス・メタルの確立期を牽引したバンドにはその傾向が強いように思う。

†

21世紀を迎えたメタル・シーンのトピックといえば、メタルコア勢の台頭だろう。そのイントロの特徴を挙げれば、咆哮、絶叫の多用ではないだろうか。

メタルコアのルーツとなっているメロディック・デス・メタルやハードコアにもその手のイントロはあるし、さらに言えばレッド・ツェッペリンの「移民の歌」のイントロではロバート・プラントが有名な雄叫びを上げているので、古典的な手法ではあるのだが、メタルコアではより恣意的・効果的に用いられている。

例えば、オール・ザット・リメインズの「This Calling」（2006年）やキルスイッチ・エンゲイジ「ザ・シグナル・ファイア」（2019年）、ブレット・フォー・マイ・ヴァレンタイン「Breaking Point」（2013年）などは、いきなりヴォーカルが大絶叫し、曲の昂揚感を高めている。

ブレット・フォー・マイ・ヴァレンタインではさらに「Tears Don't Fall」（2005年）が秀逸で、静謐なギターが鳴り響くなか、突如“Let's Go!!!!”の大絶叫が響き渡り、聴き手のテンションを一気に高めていく。同様の手法は、トリヴィアムの「斬り捨て御免」（2008年）でも見られ、荘厳なイントロの途中で冒頭の歌詞“He who walks the fire breathes!”を叫び、これをきっかけにテンポ・アップするという劇的なイントロとなっている。

ではなぜ、絶叫・咆哮をイントロに配するようになったかと考えると、シンプルにヴォーカルがグロウルを多用するようになったからではないか。ダミ声で叫ぶように歌うということは、当然、何を歌っているのかわかりづらく、またメロディを聴かせるわけでもない。つまり、声もヘヴィな音楽を構成する楽器のひとつとして使うことで、楽器演奏とともにアグレッションを高めていくのが役割。イントロにおいても、その役割を果たすために絶叫や咆哮が多用されているのではないだろうか。まあ、単純にカッコいいし、テンションが上がるというのが大きいとは思うが。

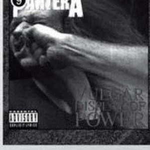
†

70年代にも短いイントロや、咆哮を取り入れてた曲はあったし、スラッシュ・メタルにもリフで押さないイントロもたくさんある。

冒頭にも書いたように、その曲に必要とされる要素のひとつがイントロなので、その個性も曲によるところが大きく、類型化しづらいのが本当のところではあるのだが、それでも時代やジャンルによってなんとなくの傾向が見て取れるのは興味深い。

メタルと言えど“歌は世につれ世は歌につれ”な部分もあるのである。

and more!



ここではアメリカの動向を。パンテラはシーンの先駆で、⑨「ア・ニュー・レヴェル」のイントロなどは、ミドル・テンポで大きなグルーヴを描きながら高速パートに転じるグルーヴ・メタルの好例だと思う。ヒップホップの要素を加えたラップ・メタルもブームに。⑩「ジャスト・ライク・ディス」はイントロからスクラッチが飛び交い、その世界観を端的に表現している。

ドリーム・シアターはプログレッシブ・メタルの旗手に。⑪「ザ・ダンス・オブ・エタニティ」のイントロからの超絶技巧の応酬は真骨頂。21世紀にはジェントが派生。⑫「I」はその先駆メシュガーの21分におよぶ大曲で、ヘヴィなギター・リフから高速かつノイジーなパートへつなぎ、カオスな世界観を演出。

2nd Intro　ギター・リフだけにあらず！

他楽器で幕を開ける インパクト・イントロ

ギターのフレーズやリフの印象的なメロディで始まるのがヘヴィメタル・イントロの定番ではあるが、もちろん、それ以外の始まり方をする曲も数多存在する。ここでは、そんな定番外のメタル・イントロを探していきたい。

“ドラム・ソロ”でイントロからインパクトは絶大

まずはドラムから。ドラムで始まるイントロの多くは、いわゆる“ピックアップ・フィル”と呼ばれるもので、曲の冒頭にきっかけとなるフレーズを叩き、それを曲に入る合図とする。ロックを始めとするポピュラー・ミュージックでは頻繁に登場するもので、もちろん、メタルでも有名なピックアップ・フィルは多い。

なかでも、レッド・ツェッペリン「ロックン・ロール」、ディープ・パープル「ファイアボール」、レインボー「スターゲイザー」が三大古典だろう。いずれもジョン・ボーナム、イアン・ペイス、コージー・パウエルというレジェンド・ドラマーの代名詞とも言えるプレイで、メタルを嗜むドラマーならば一度はコピーした経験があるはずの定番フレーズだ。加えてジューダス・プリースト「ペインキラー」（ドラムはスコット・トラヴィス）も大定番なので、これで四天王といったところか。

ドラムの場合、フィルインではなくリズムを叩き始め、そこにほかのパートが音を重ねるというパターンも多い。アレックス・ヴァン・ヘイレンの高速シャッフル・ビートが曲を牽引するヴァン・ヘイレン「ホット・フォー・ティーチャー」、チャーリー・ベナンテがトライバルなビートを叩くアンスラックスの「インディアンズ」、フィル・テイラーのいなたいツーバスが疾走するモーターヘッド「オーバーキル」、印象的なドラム・フレーズにギター、ベースがユニゾンで重なる「ラスト・イン・ピース ... ポラリス」（メガデス）あたりが代表例だ。

†

ドラムをイントロに置く意図としては、先にも書いたように演奏上の合図としての意味合いがまずひとつ。

加えて、打楽器の派手なプレイによるインパクトを狙ったという面もあるだろう。ソロのような派手なドラミングを冠した「スターゲイザー」と「ペインキラー」が好例だろうし、ドラムによるリズムからスタートするのも、躍動感のあるドラミングで耳目を奪うといった効果があるのではないだろうか。

ミュージシャンのセンスが光るベース・イントロ

ドラムとともに楽曲のボトムを支えるベースで始まる曲もある。ブラック・サバス「N.I.B.」、モーターヘッド「エース・オブ・スペーズ」あたりが古典だろう。

「N.I.B.」はギーザー・バトラーのサイケデリックなベース・フレーズから入り、メインのリフへとつなげていく。なかなかにスリリングな展開だ。「エース・オブ・スペーズ」はレミーの歪んだベースが疾走し、そこにドラムがクレシェンドして入り、続いてギターがリフを鳴らす。わずか13秒ほどのイントロだが、一気にテンションの上がる構成が熱い。

アイアン・メイデン「ラスチャイルド」、メガデス「ピース・セルズ」、メタリカ「フォー・フーム・ザ・ベル・トールズ」、MR.BIG「アディクテッド・トゥ・ザット・ラッシュ」なども、イントロから印象的かつ超絶なベース・プレイが飛び出すのだが、ドラムも鳴っているのが残念（？）。ともかく、必聴ベース・イントロだと思う。特に「アディクテッド〜」はビリー・シーンのタッピングを交えた高速フレーズが目玉となるイントロだ。

ベースの必殺技と言えばスラップが代表的だが、それを使ったイントロも押さえておきたい。ココバットの「Grasshopper」は冒頭でTake-Shitのスラップを用いたソロが炸裂。マッドヴェインの「Dig」は、厳密にはベースで始まるイントロではないが、イントロからライアン・マルティニーがスラップ・フレーズをこれでもかと言わんばかりに引き倒す圧巻のイントロになっている。

†

「N.I.B.」や「Grasshopper」の劇的なプレイは、ドラム・イントロと同様にインパクトを狙ってのものだろう。そのままリフにつながっていくので、曲想を端的に伝えるといった効果もありそうだ。

そのほかのベース・イントロはインパクトうんぬんではなく、その印象的なベース・プレイがゆえ、結果的にベースが目立ってしまったというイメージ。ベーシストの力量と、バンドとして作曲〜アレンジ・センスの良さが表われているのがベース先行型イントロだと言えるのかもしれない。

and more!

⑬

⑭

⑮

⑯

デス〜ブラック・メタル系では、ブラスト・ビートを盛り込んだイントロも多い。デス・メタルの開祖のひとつモービッド・エンジェルの1stアルバムでは、⑬「サフォケイション」を始めイントロからブラストが炸裂する曲が多々。⑭「ディスコンティニュード」はドラム・フレーズから始まり、ファンキーなスラップ・ベースも飛び出す複合技的なイントロ。ミクスチャー・ロックに先駆けた刺激的な名演だ。

ドラムとベースによるイントロをもうふたつほど。⑮「ジ・アート・オブ・シュレッディング」は、ドラムのピックアップからベースが入ってリズムを形成するとギターが切り込み激しいリフへと転じるという聴き応えのあるもの。ユナイテッドの⑯「Mosh Crew」もベース＆ドラムが冒頭からトライバルなリズムを奏で、躍動感を演出。

打楽器、民族楽器、クラシック楽器で多彩に発展

メタルではあまり使われない楽器がイントロを飾っている曲もチェックしていきたい。特にパーカッションやヴァイオリンなど、ほかのバンドにはない楽器を担当するメンバーが在籍するバンドでは、それらを大きくフィーチャーするのは当然とも言え、もちろんイントロでも活躍している。

ラテン・パーカッショニストを擁するイル・ニーニョでは、「イン・ディス・モーメント」で軽快なパーカッションのリズム・ソロをイントロに配しているし、二胡をフィーチャーする台湾のソニックは、同国の民族楽器から日本の尺八、琴までも取り入れ、オリエンタルなサウンドを演出。『武徳』のオープニング曲「Arising Armament Intro」は、これは民族楽器によるインスト曲。当然、冒頭から笛や太鼓が鳴り響く。

民族楽器の導入と言えば、セパルトゥラを忘れてはならない。『ルーツ』では、彼らの出自であるブラジルの民族楽器を大胆に取り入れ、トライバルなサウンドを作り出した。「アティテュード」ではビリンバウがイントロを彩り、「ラタマハタ」ではブラジルの打楽器奏者カルリーニョス・ブラウンとコラボレイトし、冒頭には打楽器アンサンブルを配置している（ラストの隠しトラックでもブラウンとの打楽器ジャムを収録）。ブラジル先住民のシャヴァンテ族と共演した「イツサリ」では、儀式での歌のような唱和から始まっている。さらに『アゲインスト』の「カマイタチ」では日本の和太鼓集団、鼓童と共演。イントロでは重厚な和太鼓の合奏が聴かれる。

ヨーロッパに目を転じれば、クラシカルな楽器を導入している曲が目立つ。バイキング・メタルの代表格であるチュリサスは、デビュー作『バトル・メタル』の冒頭「神々の戦い」から勇壮なホーンが響き渡り、「ワン・モア」ではストリングスがイントロを華々しく彩っている。

オランダのエピカは、ストリングスと合唱隊をフィーチャー。こちらもデビュー作『ザ・ファントム・アゴニー』のオープニング「アディタ」のイントロからそれらが荘厳でシンフォニックな世界観を作り出している。

and more!

⑰

⑱

⑲

⑳

スリップノットも打楽器が大活躍。⑰「アイレス」ではドラムンベース的なフレーズからドラムが高速で切り込み、そこに打楽器陣が重なる激烈なイントロを作り出している。イレギュラーな楽器を取り込んだイントロといえば⑱「Shoots and Ladders」も必聴。冒頭からバグパイプが不穏な雰囲気を作り出す。

アジアのフォーク・メタル勢もさまざまな楽器を取り込む。祖国のフォーク曲をカバーしたインドのBLOODYWOODによる⑲「Ari Ari ft. Raoul Kerr」は、イントロからタブラと思われる打楽器や笛がフォークロアな雰囲気を醸す。それを打ち破るようなメタリックな咆哮が熱い。モンゴルの伝統楽器を取り入れたザ・フーは、⑳「Wolf Totem」などでホーミーも聴かれる。

ヴォーカルで始まるイントロも実は定番!?

最後にヴォーカルから始まる曲もまとめておきたいが、ギターに並ぶメタルの花形だけあって、実は枚挙にいとまがない。なので、各時代の印象的なものを紹介しておこう。

70年代はレッド・ツェッペリン「ブラック・ドッグ」が代表だろう。ロバート・プラントの伸びやかなヴォーカルからヘヴィなリフに連なるイントロは、今なお刺激的だ。80年代はドッケンの「イン・マイ・ドリームス」。美しいアカペラのハーモニーによるサビ始まりで、メロディアスなバンドの魅力が凝縮されている。

90年代はマリリン・マンソン「ザ・リフレクティング・ゴッド」を推したい。マンソンの陰鬱な歌声に導かれるダークかつヘヴィなこの曲は、混沌としていた世紀末の世相を現わしているように思う。21世紀の歌始まりの曲としては、キルスウィッチ・エンゲイジの「ローズ・オブ・シャリン」を。正確には歌始まりではなく“せーの、ドンッ”状態で全員が演奏に入り、ヴォーカルも叫ぶように歌い出すのだが、全員で一気にテンションを上げていくさまが圧巻だ。特にライヴでは、ハワード・ジョーンズが“1、2、3、4”とカウントを絶叫する、もしくはドラムのシンバルでカウントを入れてスタートし、一気に爆音が轟くという壮絶なまでのカッコよさを誇る。ということは、カウントが曲のイントロになっているとも言え、ほかにあまり類を見ない曲でもある。

†

ほとんどのメタル楽曲では、ベース、ドラム、ギター、キーボードといった定番楽器をフィーチャーしたイントロが多いのは当然だが、その他の楽器を使ったイントロも数多く存在していることを再認識し、改めて驚いた。

ほかにも、ベース＆ドラムやギター＆ヴォーカルなど、コンビネーションによるイントロや、メタリカ「フォー・フーム・ザ・ベル・トールズ」の鐘の音、ブラック・サバス「スウィート・リーフ」の“咳”といったSEを巧みに使ったものなど、パターンはまだまだたくさんある。

門外漢からは“どの曲も一緒”といったイメージを持たれがちなヘヴィメタルではあるが、実は多様性に豊んだ音楽であることが、イントロで使われる楽器からも窺い知れるのではないだろうか。

and more!

㉑

㉒

㉓

㉔

ここではヴォーカル・イントロの変わり種を。ご存知㉑「クレイジー・トレイン」は、“All aboard ha…”というオジーの雄叫びからスタート。トレインだけに“ご乗車ください！”という意味。フロム・オータム・トゥ・アッシズの㉒「The After Dinner Payback」は“ヨーイドン！”で一斉にスタートするパターン。厳密にはイントロはないのだが、いきなりの咆哮に昂る。

ヴァン・カントはドイツのアカペラ・メタル・バンド。㉓「バッテリー」はメタリカのカバーだが、アカペラなので当然イントロも声。各パートのフレーズを“ばってり〜ばってり〜”と歌ってアンサンブルを作り上げている。㉔「フィア・オブ・ザ・ダーク」も歌で始まる曲ではないが、ライヴではイントロが始まると同時に、観客が“お〜お〜お〜”と歌い出す。声が重要な役割を果たしているイントロと言えるだろう。

3rd Intro

壮大なイントロなら独立させてしまえ！

主曲を盛り立てる導入曲の功績

短いリフから本篇に入る曲もあれば、凝った展開で段階的な盛り上がりを作っていく曲もある。この後者のパターンがさらに壮大になると、そのイントロとなるパートが1曲として独立しタイトルも与えられる場合がある。ここではそんな導入曲の仕事っぷりを見ていこう。

文:舩曳将仁

1974年生まれ。大阪府藤井寺市出身の音楽ライター。大げさに展開するプログレや過剰なまでに勇壮なヘヴィメタルを愛する者として、今の若者の多くがイントロ＆アウトロをスキップするという事実に驚愕しています。

独立型シンフォニック系とセット型コンビ系

イントロのなかには、単独でタイトルが与えられていて、完全に曲として独立し、アルバムの冒頭に配置されているものがある。それはもう何の疑いもなくイントロと言えるものだが、そのバリエーションも大きく分けてふたつのパターンがある。

ひとつは、イントロと２曲目との間にブランクがあり、その落差によって、２曲目の激情、パワフルさ、スピード感を盛り立てるもの。このパターンのイントロは、クラシック曲の流用やそれらしいシンフォニックな小曲である場合が多い。

例えば、プリティ・メイズ『レッド・ホット＆ヘヴィ』（1984 年）におけるカール・オルフの「フォーチュナ（カルミナ・ブラーナ）」からの「バック・トゥ・バック」、アングラ『エンジェルズ・クライ』（1993 年）におけるフランツ・シューベルト「交響曲第８番」をもとにした「アンフィニッシュド・アレグロ」からの「キャリー・オン」などがそれにあたる。いずれも荘厳かつクラシカルな響きのイントロで惹きつけるが、イントロ後に一瞬のブランクがあり、それを経てスピード＆パワー・メタルへ続く展開となっている。

これらはイントロとして正統派と言えるが、逆にイントロとそれに続く曲との関係性はそれほど強いものでない。

†

一方で、単独曲として存在しているイントロではあるが、２曲目と切っても切れないセット関係で存在しているパターンがある。

その古典的傑作と言えるのが、クイーン『クイーンⅡ』（1974 年）の冒頭に用意された小曲「プロセッション」とシームレスにつながる「父より子へ」だろう。いずれもブライアン・メイ作で、ギター・オーケストレーションを生かした「プロセッション」から、壮大な「父より子へ」につながるが、タイトル的にもテーマ性が共通しているばかりか、この２曲のセットでアルバムのドラマ性豊かな作風が印象づけられていると言えるだろう。ここが重要なポイントで、イントロ＋２曲目が“アルバム全体の序章”として機能している。

このパターンの魅力を、1980 年代のヘヴィメタル・シーンにおいて輝かせたのが、アイアン・メイデン『キラーズ』（1981 年）の「３月 15 日」～「ラスチャイルド」と言える。そして、そこに決定打を放ったのがジューダス・プリースト『復讐の叫び』（1982年）の「ヘリオン」～「エレクトリック・アイ」だ。両曲は分離不可能と言えるほど密な関係性にあり、ライヴでも必ずと言っていいほどセットで披露される。前作『黄金のスペクトル』（1981 年）がアメリカでの成功を狙った軽めの内容でマスコミやファンから批判されたこともあり、『復讐の叫び』は徹頭徹尾ヘヴィ・メタリックさを強調したアルバムとなっていた。本２曲が醸しだす勇壮さは、そんな同作の完璧なイントロダクションになっている。

†

このイントロ＋２曲目のセットを、アルバム全体のイントロとして使用するパターンは、シンフォ・メタルやパワー・メタル系のバンドに多く見られるが、それをバンドのトレードマーク的に使用しているのがハロウィンだ。

彼らのデビュー・アルバム『ウォールズ・オブ・ジェリコ』（1985 年）では、「ロンドン橋落ちた」のメロディを用いたイントロ「ウォール・オブ・ジェリコ」から２曲目の「ライド・ザ・スカイ」へつなげるというパターンを導入。そこでのイントロはまだ借り物感があったが、『守護神伝 - 第一章 -』（1987 年）収録の「序章」～「アイム・アライヴ」、続く『同 - 第二章 -』（1988 年）の「インヴィテーション」～「イーグル・フライ・フリー」で当パターンを自分たちのものに。彼らは 1996 年のシングル「タイム・オブ・ジ・オウス」のカップリング曲で「ヘリオン」～「エレクトリック・アイ」をカバーしているが、そのジューダス・プリーストにも匹敵するクオリティを聴かせ、以降もいくつかのアルバムでこのパターンを導入している。

長尺のイントロを用意したり、わざわざイントロを単独曲扱いにする最大の理由は“もったいぶり”だろう。そう書くと身も蓋もないが、仰々しく見せるのもヘヴィメタルの醍醐味のひとつと言えるのでは。

and more!

㉕

㉖

㉗

㉘

メタル・ファン必聴のイントロとのセット技として……アングラ『テンプル・オブ・シャドウズ』㉕収録の美麗ピアノ曲「デウス・レ・ヴォート！」～「スプレッド・ユア・ファイア」、ラプソディ・オブ・ファイア『ザ・フローズン・ティアーズ・オブ・エンジェルズ』㉖収録のオペラ曲「ダーク・フローズン・ワールド」～「シー・オブ・フェイト」、アーチ・エネミー『ウォー・エターナル』㉗収録の「プレリュード・イン・F・マイナー」～「ネヴァー・フォー・ギヴ、ネヴァー・フォーゲット」を挙げておきたい。

ちなみに、ハロウィンは最新作『ハロウィン』㉘でもセット技「オービット」～「スカイフォール」をやってます。

こんなパターンもイントロ曲か？

スレイヤー『レイン・イン・ブラッド』（1986年）の「ポストモーテム」～「レイニング・ブラッド」のような、シームレスにつながっている先の曲を、あとの曲のイントロとして捉えるのはどうだろう。単なる組曲的構成と言えなくもないが、より凶暴な「レイニング・ブラッド」の前哨戦的イントロとして「ポストモーテム」があるようにも感じられる。

ほかにもサヴァタージの『ストリーツ・ア・ロック・オペラ』（1991年）では、ハードに展開する「ユア・アライヴ／サミー・アンド・テックス」、同じミドル・テンポの2曲を組み合わせて感動的にラストを飾る「サムホエア・イン・タイム／ビリーヴ」と、先の曲が次の曲を盛り上げるパターンが使われている。

†

ひとつの曲のなかにイントロ風展開を有している曲もある。メガデス『キリング・イズ・マイ・ビジネス』（1985年）のタイトル曲がそれで、冒頭部分とそののちの展開が異なっていることで、冒頭部分が曲全体のイントロのようになっている。

ただメガデスに関して言えば、同作でも「スカル・ビニース・ザ・スキン」や「ラトルヘッド」など、途中で別の曲のようになるものが多くあり、この前半部分が後半部分のイントロであるというのは少々乱暴かもしれないが。

4th Intro 1曲目に配置するには意味がある

“アルバムのイントロ”とも言える開幕曲

ここまで語ってきたイントロとは、当然ながら楽曲の導入部分に当たるパートのことだった。ただ導入的な役割という意味では、アルバムの1曲目も作品の世界観に入るための重要な存在であり、これも大きな意味ではイントロと呼んでもいいのではないだろうか！？

1曲目それ自体がアルバムのイントロではないか？

アルバムの1曲目それ自体が、アルバム全体のイントロダクション的性格を持っているものも多い。

チープ・トリック『蒼ざめたハイ・ウェイ』（1977年）の「ハロー・ゼア」は、“レディース＆ジェントルマン、ロックする用意はできているかい！？”とショウの始まりを告げる曲で、アルバムの幕開けを飾るのにふさわしい1曲目になっている。マノウォー『ファイティング・ザ・ワールド』（1987年）のタイトル曲、ガンズ・アンド・ローゼズ『アペタイト・フォー・ディストラクション』（1987年）の「ウェルカム・トゥ・ザ・ジャングル」、パンテラ『鎌首』（1996年）のタイトル曲……などなど挙げるとキリがないが、1曲目がアルバム全体のイメージを伝えるイントロ的役割を担っていることは間違いない。

このパターンで秀でているバンドとしてまず名前が浮かぶのは、AC/DCとアイアン・メイデンだろうか。

AC/DCは、シンガーのボン・スコットが他界し、ブライアン・ジョンソンを新たに迎えて1980年に発表した再出発作『バック・イン・ブラック』の1曲目に、「地獄の鐘の音」を置く。冒頭の鐘の音がボン・スコットの鎮魂のように響き、歌詞では地獄の鐘を聴くのは俺たちじゃないと歌う。アルバムのというだけでなく、第二のAC/DCのキャリアのスタートを告げるイントロにもなっていた。

アイアン・メイデンは、デビュー作『鋼鉄の処女』（1980年）の「プローラー」に始まり、『パワースレイヴ』（1984年）の「撃墜王の孤独」、『ブレイヴ・ニュー・ワールド』（2000年）の「ザ・ウィッカー・マン」など、多くのアルバムで1曲目にスピード＆ハード・ナンバーを据え、パワフルなアルバム全体のイントロとして機能させている。やはり1曲目はアルバムの顔なのだ。

いずれにせよ、こうして見ていくとイントロにはアーティストの楽曲に対する……ひいてはアルバムに対するこだわりの強さが表われていることがわかる。これからも聴き手を打ちのめし、メタル史に残るようなインストの登場を期待したい。

and more!

㉙

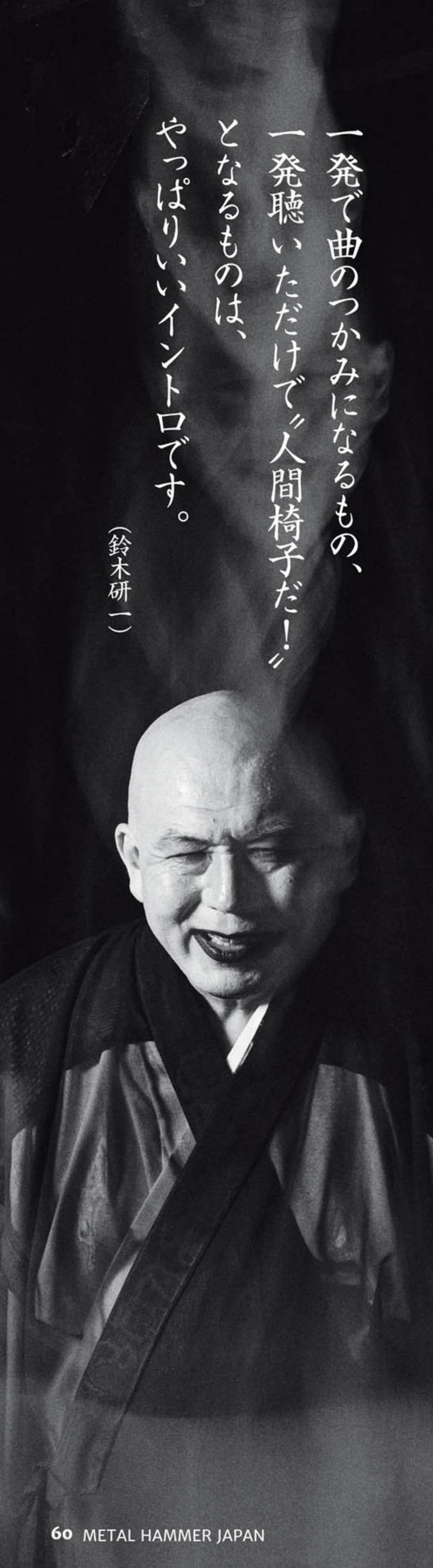
㉚

㉛

㉜

ガンズ＆ローゼスのメンバーとストーン・テンプル・パイロッツのスコット・ウェイランドらで結成されたヴェルヴェット・リヴォルヴァー『リベルタド』㉙の「レット・イット・ロール」、デフ・レパード『アドレナライズ』㉚の「レッツ・ゲット・ロックド」は、「ウェルカム・トゥ・ザ・ジャングル」と同じくアルバムの景気づけ効果を持つトップ曲。この手のものはパーティ・ロック系に多い。

“偽物メタルに死を”のスローガンを掲げるマノウォー『ファイティング・ザ・ワールド』㉛のタイトル曲やウィグ・ワムの復活作『ネヴァー・セイ・ダイ』㉜のタイトル曲（イントロあり）のように、バンドの主義主張をトップ曲で表わす例も。



一発で曲のつかみになるもの、
一発聴いただけで〝人間椅子だ！〟
となるものは、
やっぱりいいイントロです。
（鈴木研一）

聞き手:岡見高秀

ミュージシャンに聞く

イントロの役割とその重要性 feat. 人間椅子

鈴木研一　和嶋慎治

リフのみで押す曲だとすればイントロがすべてですね。──和嶋

──サブスクがリスニング・スタイルの主流となった現在、曲冒頭でリスナーの心をキャッチするため、すぐに歌に入るという曲が増えていると言います。ややもするとイントロというセクションが蔑ろになっているとも取れるのですが。

和嶋　いわゆる“歌モノ”だとすれば、聴いてほしいところはサビだったり歌い出しだったりするわけでしょ。その場合、イントロっていうのは“単なる導入”なんだよね。だから今みたいにサブスクが普及して皆さんにすぐに聴いてもらうためには、然もありなんと思います。

──ただ、ハードロック／ヘヴィメタルというスタイルに関しては、イントロって超重要なパートでもあり。

和嶋　僕らはブリティッシュ・ハードロックに影響を受けて音楽をやっているわけで、そこでも歌は大切なんだけど、一番大事なのは実はギター・リフっていう。そういう“ロックの視点”だと、イントロは重要ですよね。

鈴木　やっぱりいきなりサビを歌うよりも、レッド・ツェッペリンの「幻惑されて」みたいに始まったほうが、ロック・ファンは嬉しいんだと思うんだけどな。

和嶋　ロックとか歌モノとかっていうくくりをはずしても、音楽全体のサウンドというところでスゴく重要だと思うんだよね。楽曲の完成度っていうところで考えても、イントロはすごく重要ですよ。

──そもそもヘヴィメタルにとって、イントロとはどういう役割を担うパートだと考えますか？

和嶋　リフのみで押す曲だとすれば、イントロがすべてですね。例えば「胸いっぱいの愛を」（レッド・ツェッペリン）なんて、あのリフ１個だから（笑）。サビでちょっと変わるけど、イントロがすべてであり、そのカッコよさに歌が乗っかるってことだから。違うパターンで“サビにカッコいいリフがある曲”だとしても、そこへ導入するために連想させる伏線としてもすごく大事だし。

──初めて聴いた場合でも、“この曲はこうなるんだろう”という想像をさせますよね。

鈴木　一発で曲のつかみになるのは、やっぱりいいイントロだと思う。それを一発聴いただけで、人間椅子だ！　ディープ・パープルだ！ってわかるのはいいイントロですよね。“つかみはオッケー！”みたいなのってあるじゃないですか。リフで押し切るって、ハードロックの肝だと思います。

和嶋　ちょっと名刺みたいなことでもあるわけですよ。そのバンドのサウンドが如実に出ているというのが、いいイントロだと

ここまでいろいろな角度からメタル的イントロについて分析してきたが、本特集のラストは、実際に楽曲を生み出すミュージシャンに登場いただき、その重要性を語ってもらおう。個性的なイントロが鳴り響く70年代ハードロックから強い影響を受けた人間椅子の鈴木研一、和嶋慎治両名は、当ジャンルにおけるイントロの存在意義をどう捉えているのだろうか。また最新作『苦楽』各楽曲でのイントロに託した役割まで、創作者ならではの貴重な話を聞くことができた。

短いイントロからいきなりAメロになるとポップすぎるというか、生き急いでいるように聴こえる。（和嶋慎治）

◎人間椅子の最新22thアルバムが発売中！
『苦楽』
徳間ジャパン／TKCA-74961

思います。ディープ・パープルの『マシン・ヘッド』を聴くと全部ペンタトニックなんだけど、リッチーのギターにジョン・ロードのオルガンが乗っかって、あのイントロなわけじゃないですか。「ブラック・ナイト」（収録は『イン・ロック』）とかもそうだけど、ユニゾンでやるあのイントロで“あのバンドだ！”ってわかるから。音使いも大事だし、サウンドも大事だし。

鈴木　やっぱりラジオでかかる「パラノイド」のハンマリング・オンに勝るイントロはないんじゃないかっていうぐらい、カッコいい音してるんですよね。どういうフレーズかも大事だけど、“サバスの音”っていうものをイントロで表わしてるのがすごいよね。何百回も聴いている曲だけど、ラジオであれを聴くと毎回ドキッとするもんな。

和嶋　“いいイントロ”っていうのがあるとすると、そこではバンドのサウンドを凝縮させたものが出ていると思うんだよね。だいたいロック系は、イントロあるいはイントロに近いバリエーションが何回もくり返されるわけですよ。１番が終わったらまたイントロが出てきて、２番が終わったらそのイントロから変化してギター・ソロにいき、３番になるとそこにブレイクとかが絡んだりして、バリエーションでずっとイントロが来る。だからやっぱりスッゲー重要なんだよね。なんだったら歌よりも重要なんじゃないかっていうぐらい。

――そもそもイントロがカッコよければ、サブスクであっても曲を変えられないわけで。

和嶋　多分、みんなそこの重要性を忘れているんじゃないかと思います。ただね、いいイントロを作るのは難しい（笑）。

「ウォー・ピッグス」のイントロは、そこしか出てこないからね。――鈴木

――ロック／メタル系にも、いろいろな構造のイントロがありますが、好きな傾向はありますか？

和嶋　基本的には、自分でも弾けそうだなっていうシンプルなリフものが好き。ジェイク・E・リーとかが弾くような難しいイントロは、カッコいいなとは思うんだけど、これ弾けんのかと。

――逆に、曲調がガラッと変わるイントロもありますよね。アコギで入ったり、シンセから入って曲調が変わるとか。

鈴木　ハードロックだけじゃなくてプログレも好きだから、そういう曲で好きなのはピンク・フロイドの「エコーズ」ですね。あの音がピーンっと鳴っただけで会場のみんながワーッとなるって、スゴいことだと思うんです。誰でも弾けるわけですから。

――ハハハ、確かに。

和嶋　シンプルなリフで始まった場合は“この曲はこの感じで最後までいくんだな”って期待できるし、それが一番正しいやり方

だと思う。曲と違うイントロって自分らも好きで、例えばアコースティックな感じで始まると逆の意味で期待があるというか。“このままでは終わらない”じゃないですけど、このあとに何がくるんだろう？ってスゴくワクワクする。そういう部分は1分くらいあってもいいと思うんだよね。曲をドラマチックにしたい場合は、そういうほうがいいと思うし。

鈴木　ストレートにいきたいときは簡潔なイントロがいいだろうし、ドラマチックにしたいときは新しい一風変わったイントロがいいんじゃないのかな。

――逆に、イントロにしか出てこないフレーズなんかもありますよね。

鈴木　サバスで言えば「ウォー・ピッグス」のイントロはそこしか出てこないからね。でもアレはもうスゴいイントロですよ。

和嶋　サバスはあるパートが1回しか出てこなかったりするんだよね。それがやっぱりカッコよく聴こえる。

鈴木　「アイアン・マン」だって、ギターがギューンっていってるだけですけど、アレに勝るイントロはないもんね。ほかの誰がマネしてもアレにしか聴こえないですから。

――スタジオ音源とは別に、ライヴでのイントロにはまた別の役割があるのでは？

和嶋　2時間くらいのショウをやるうえで、例えば全曲歌から始まったら多分全部同じ曲に聴こえるんじゃないかな。ショウ全体を抑揚のある感じに見せるためにも、楽器だけの部分ってスゴく重要だと思いますよ。効果音みたいなのでもアリなわけじゃないですか。例えば「21世紀のスキッツオイド・マン」の前の、ただゴーってだけのメロトロンみたいな音。それを彼らがライヴでやるかどうかは別として、ああいうのって意外に重要で、あれもイントロと言っていいと思う。「アイアン・マン」で言ったらギューンの前はバスドラの音だけ。でもあれを聴くだけでウォー！ってなりますよね。

鈴木　“せーの”で弾き始めるより、バスドラだけのほうがより盛り上がるよね。ライヴでは楽器だけでなかなか始まらなくて、みんなが気持ちいいところで入ってくるっていう。それはポップスでもそうで、ポール・サイモンがギターを弾いていて、その最後のほうで“タンランランラン♪”と始まり「サウンド・オブ・サイレンス」だとわかったときのみんなの歓声がスゴかった。あのフレーズもいいイントロですよね。

一番伝えたいパートは最初に出てくるけど、それがイントロだったりする。――和嶋

――では、実際に曲を作るうえでの話を聞かせてください。ズバリ、イントロを作る際に意識していることとは？

和嶋　今言ったことを実践しているんだと思うんだよね。ある意味人間椅子はイントロの重要性を体現しているグループだなって。なかなか歌が始まらない。そういうグループはあんまりないのかもしれないです。今回のアルバムだと1曲目の「杜子春」とか。

――コード・ストローク、アルペジオを経てリフに入るという構成ですね。

和嶋　本篇とは全然違うイントロですよね。この曲に限って言えば“杜子春という人が今どこにいるのか”、“この世じゃないところにいる”っていうのを表わす意味で、ストロークではメジャー・セブンの音で浮遊感を出してみたんです。状況、場面設定をするっていう使い方。

――言葉にせずとも、“彼はこういうところにいるんです”というのを想像してもらうという。

和嶋　長いイントロって、そういう曲の世界を作るうえで必要だと思うんだよね。いきなり杜子春が歌い出しちゃったら、言葉の説明になっちゃうから入りづらいと思う。

――音で場面を表現することで、日本語がわからない人にも曲のイメージが伝わりますからね。逆に「恍惚の蟷螂」はシンプルにリフを聴かせながら曲にいくという作りで。

鈴木　僕らは長い曲が多いけど、それだけだとバリエーションが少なくなるから、かなり短い曲も入れたくなって。長い曲ばかりだと疲れるでしょ（笑）。それで短い曲を端的に表わすのは、やっぱりギターのイントロなんですよ。ギターでリフを弾いてもらって、ベースとドラムがキメをこなして本篇が始まるっていうのは、スラッシュの王道じゃないですか。

――イントロのリフがそのまま歌のバックになるというのは、王道パターンのひとつでもあります。そういったタイプも含め、作曲プロセスのなかで、イントロってどのあたりでできるものなんですか？

鈴木　自分は最後ですね。最後っていうか、浮かぶまで待つみたいなところがある。和嶋君は最初からイントロを作るタイプかな。

和嶋　一番伝えたいパートは一番最初に出てくるんですけど、それがイントロだったりする。同時っていうこともありますけど。

鈴木　「宇宙海賊」はギターのリフからケツまではできていたんだけど、イントロだけがどうしても浮かばなくて。それでイントロのギターは“宇宙をやってくれ”と漠然とリクエストをして。そうしたらすごいディレイとフェイザーで……今どきこんなエフェクターのけかたする人いないと思うんだけど（笑）。

和嶋　しかも昔ながらに自分でツマミをいじりながらで。

鈴木　でも、そのおかげで宇宙という風景がよくわかるわけじゃないですか。すごくいいイントロになったと思っています。

――タイトルを知らない状態で聴いても、スペーシーな感じを想起させます。

鈴木　夜、車の運転をしてるときにラジオからシュワシュワシュワって流れたら……。

――なんだ！　なんだ！って（笑）。

和嶋　ヘヴィな感じでイントロが始まり、曲が始まったら“あれ？　曲が違う”っていうのは「肉体の亡霊」ですね。リズムを変え

るのも効果的なんですよ。

――「クレイジー・トレイン」的な、リズムも雰囲気も変わるというパターンですね。そこにはどういった意図が？

和嶋　緊張感というか。裏切るってわけじゃないんですけど、曲のほうに耳を向ける効果が出せるんだよね。

――ロック・バンド形態だと、ギターから入ることが多くなりますが、敢えて別の楽器からスタートさせようなどは？

和嶋　鈴木君の曲はありますよ。レミーみたいにベースから始めるやつ。

鈴木　ライヴでずっとギターからだとちょっと単調に聴こえるかもしれないなと思って。クイーンの「地獄へ道づれ」とかドラムとベースから始まるじゃないですか！　あれカッコいいですよね。

――ドラムから入る曲は、ライヴでは特に映えますよね。

鈴木　その際たる存在はコージー・パウエルだと思いますね。「ア・ライト・イン・ザ・ブラック」とか「ロスト・イン・ハリウッド」とか、もうみんなあれ聴いて育っているから、やっぱりドラムから始まる曲も作りたくなりますよね。

――逆に、歌から入りたいと思うことは？

和嶋　いや、なんかすごく違和感を感じるかな。自分でもときどきやってみようと思うんですけど、短いイントロからいきなりＡメロになると、ポップすぎるように聴こえるっていうか、なんか生き急いでるように聴こえるっていうか。ある意味、もったいつけたいのかも。だから今後もいきなり歌からとかはないと思う。

――“ポップになりすぎる”ということは、つまりポップスの人たちが歌から入るのは、非常に理にかなっているとも言えるのでは？

和嶋　それほど楽器に重きを置いてない音楽の場合は、それがあってもいいでしょうね。でも、全部それだとやっぱり変じゃないかな。音楽の膨らみっていう意味では、やっぱりイントロはあったほうが。なんだったらエンディングもしっかりあるほうが、作品として美しく聴こえるだろうっていう。

――なるほど、エンディングの重要性ですか。フェイドアウトで終わるエンディングもありますが、イントロとエンディングでの、力の入れ具合というと？

鈴木　僕なら４：６でエンディングに力を入れたくなるような。

――あ、想像とは逆でした。その心は？

鈴木　すんなり終わりたくないっていうのはあるかな。もちろんフェイドアウトはしたくないし。

和嶋　そうね。僕らにもフェイドアウトの曲はあるんだけど、なんとなく逃げてるように聴こえるっていうか（笑）。

――“あぁ、浮かばなかったんだろうな”みたいな（笑）。

和嶋　ギター・ソロでフェイドアウトはアリにしてるかな。それでも逃げているように聴こえるよね。結局ライヴでどうするんだ？って話になるから。で、「ホテル・カリフォルニア」のライヴ・バージョンを観たときのあの衝撃。それはエンディングとしていいんだろうかって思いませんでした？

――キメでバッと切っちゃうヤツですね。

和嶋　あのすごく長いイントロの割に、最後は“ジャジャジャジャ！”って（笑）。だから僕としてはイントロとエンディングで半々くらいかな。

――イントロが良ければいいってもんじゃないと。

和嶋　カッコよく始まったらカッコよく終わらないと。

鈴木　やっぱりサバスをかなり聴いているからかもしれない。サバスは相当後奏がおもしろいですからね。

――そうなると、いよいよ“サラッと聴き始めて、サビが終わったから次の曲”という聴き方はもったいないですね。

和嶋　そうなんだよね。自分らはレコードで音楽を聴き出したから、曲を跳ばせないんですよ。だからエンディングが重要だと思うわけだよね。最後まで曲を飽きさせてはいけないという。さらにひと言だけ言うなら、イントロがしょぼい曲は、最後までしょぼかったりしますよね。

――確かに（笑）。

和嶋　だから本当に重要だってことですよ。イントロはしょぼいんだけど、途中からスゴく良くなるってあんまりないから。

鈴木　イントロはヘヴィでカッコいいのに、歌ったら急にポップな曲ってのもありますよね。

和嶋　イントロがカッコいいから、一応は聴こうという気になるわけじゃない。

――今回お話を聞いて、改めてロック・ミュージックにとってイントロはとても重要なものだということがわかりました。もちろん人間椅子の新作『苦楽』でも、力の入ったイントロ＆アウトロを堪能してもらいたいですね！

和嶋　いわゆるロックのカッコいい部分を散りばめられたのではないかなと思っております。世相のどうしたらいいのかなっていう暗いところに、ヘヴィさのなかにもスカッとした爽快感とか、“いつかこの状況が変わるんじゃないか”ということを匂わせつつアルバムを終えていて、今の時代にこそ聴いてほしいと思っています。

――最後の曲は、アルバムにとってのエンディングでもあるわけですから。

和嶋　そういうつもりで作ったので。けっこうヘヴィな曲が多いんだけど、最後に“でも今は夜明け前にいるんだ”ってことを言って終われればいいなと。

鈴木　最後の曲は、いつも一番力の入ってる曲にするんですよ。１曲目、２曲目……といい曲が続くけど、最後まで絶対聴いてくれっていう。最後が一番いい曲だから！

和嶋　アルバムってトータルなものだと思うんです。それは我々がレコード世代だからというわけではなく。やっぱりいろんな曲が入っているので、みなさんにもそういう聴き方をしてほしいですね！

STARS' WORDS
トミー・モーリー　シュザイの復習
EPISODE-6

トミー・モーリー

音楽専門誌にて、通訳／ライターとして活動。"誰もが持つ王道ギター"という偏見で、ストラトキャスターを敬遠してきたものの、昨今は唯一無二の名器であることを再認識。いいものを素直に認められる年齢にやっとなったのだ、と感慨にふけるばかりなり。

Absolutely!

――そのとおりだ!

By Yngwie Malmsteen

当コラムでは、本誌通訳の私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、こぼれ話とともに、英会話としても使える言い回しをピックアップしていきます。

ついに登場、スーパー・ギタリスト界の王者＝イングヴェイ・マルムスティーンの《Stars' Words》です。前回当コラムで取り上げたポール・ギルバートに続き、皆さんご存知の異次元ギタリストですね。

最新アルバム『パラベラム』が相当な自信作となったゆえに取材を楽しみにしてくれていた氏は、その熱量が抑えきれなかったようで、サウンドへのこだわりを御自慢の光速プレイの如く語ってくれました。

なお、10代でスウェーデンからアメリカに移住しスターダムに昇り詰めた氏ですので英語はもちろんネイティブ並みですが、時折発せられるイントネーションから、そのルーツはやはり現在も北欧にあるのだなと感じた次第です。

さて今回ピックアップした[absolutely]は、氏がリスペクトして止まぬマーラーやバッハ、ワーグナー、ベートーヴェンといったクラシック界の大作曲家たちについて、"彼らが書いた曲にはバンド・サウンドとは異なる迫力があるのではないか？"とうかがった際の言葉です。

この［absolutely]、何気ない会話でウマいことや賛同を得られるようなことを言った際に、相手から急に言われることが多いです。いろいろな意味があるのですが、口語的には＜そのとおりだ／もちろんだ＞として使われることがほとんどでしょう。

そもそも＜絶対的に／完全に＞を意味する副詞（形容詞を修飾する言葉）であるため、[absolutely heavy（絶対的にヘヴィな）］というように状態を示す言葉が次に続くものです。では氏が放った［absolutely!］がどうして＜絶対的に！＞とならないかというと、本来［absolutely (right)！］＜絶対的に（正しい）！＞となっているところから［right／正しい］が省略されて＜そのとおりだ＞という意味合いになるのです。

ほかにも類語として、[definitely]、[totally]、[exactly］を用いることがあります。これらもすべて副詞ですが、ほぼ同様に［definitely (Yes)！］＜本当に（イエスだ）！＞から転じて＜そのとおりだ！＞という意味で、話者の感嘆を表現する形で使われます。

もちろん［-ly］という接尾語をはずせば、[absolute］＜絶対的な／完全な＞という形容詞になります。[He is an absolute king of the kings!（彼は絶対的な王のなかの王だ！）」と言われてきたイングヴェイ氏、これからもその座を譲ることなく、強烈なプレイを届けていただきたい……いや、そんな気持ちには目もくれず、彼は自分らしさ溢れる爆音を浴びせ続けてくれるでしょう。

ではまた次号でお目にかかりましょう！

[absolutely] ＜副詞＞

【意味】絶対的に／完全に／確実に／そのとおり

【語源】《ab-》（接頭語：～から離れている）＋《solve》（動詞：解く）＝解き放たれた

例文

Have you gotten the ticket for that concert?　Yes, absolutely!

あのコンサートのチケットはもう取ったの？――もちろんだよ！

10 YEARS OF BABYMETAL IN UK

～英国が見た彼女たちの10年

◀UK『METAL HAMMER』誌2021年7月号の表紙。"THE STORY OF A MODERN METAL PHENOMENON"と題し、20ページに及ぶ特集が組まれた。またふたりの単独バージョンに加え、ペア・バージョンと3パターンのカバー・デザインが作られた。 Photographer：宮脇進（PROGRESS-M）

Text by Stephen Hill
Translation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』349

**先日、キツネ様のお告げにより、来る10月10日を持って
これまでの10年間のLEGEND＝ライヴが“封印”されることが告げられたBABYMETAL。
この10年、多くのメタル・ファンを取り込み大きな鋼鉄の渦を作り出してきた彼女たちであり、
それはもちろんここ日本だけではなく、ワールドワイドなムーブメントとなっていった。
そのなかで本邦に次ぎBABYMETALに愛情を注ぎ、
また彼女たちの成長の一環を担ってきたのが“メタルの母国”イギリスである。
大海原を越えた異国の地で彼女たちの活躍はどのように見られ、また変化していったのか。
英国から見た彼女たちの10年を追うことで、
BABYMETALの知られざる新たな一面が見えてくるのではないだろうか。**

I: IN THE BEGINNING

はじまり

**BABYMETALが「ギミチョコ！！」で世界を驚かせる4年前、
伝説の種はすでに蒔かれようとしていた。**

“メタルは日々過去のものになっていくばかりです。だから私は何か新しいことをやりたいと考えていました。まだ誰もやったことがないようなものを”。BABYMETALの頭脳であるKOBAMETALは、2014年にそう語ってくれた。“アイディアは天から降ってきたものなんです”と。

天使にインスパイアされたかどうかは別として、メタルに革命を起こすという彼のゴールは見事に果たされた。彼女たちの活動が始まってから10年、ハイパー・アクティブなJポップ、ブルータルなリフ、ヘヴィメタルの壮大さを混ぜ合わせたサウンドを武器に、BABYMETALはアリーナをソールド・アウトさせ、メジャーなフェスでの話題をさらい、メインストリームを制覇していく。そして、このジャンルにおける愛らしさを備えたレジェンドとして君臨し、本誌(UK誌)のフェイスブック・ページではメタル・ファンたちがいくつもの話題を繰り広げてきた。

しかし彼女たちがどのようにしてシーンにやってきたのかを、我々は目撃してはいない。どのようにして彼女たちは生まれたのか？　これまで“キツネ様のみぞ知る”と教えられてきたが、実に不思議であり、我々はすでに充分待ち続けてきたのではないだろうか。これはBABYMETALがどのようにしてヘヴィメタルの中心になっていったのかを記したストーリーだ。

――スティーヴン・ヒル

ときは2010年。KOBAMETALによって考案・プロデュースがなされ、SU-METAL、YUIMETAL、MOAMETALの３人編成からなるメタル・ダンス・ユニットとしてBABYEMTALは結成された。これはアンスラックスのようなバンドとは異なる結成の経緯だったといっても差し支えないだろう。

“Jポップとメタルの融合は、日本のメタルと音楽を発信していくための素晴らしい方法だと考えました”とはKOBAMETALの言葉だ。

間もなくBABYMETALは、コンサートでオリジナル曲をパフォーマンスするようになる。元・音楽誌『CDでーた』編集部の大窪

"I DIDN'T GET WHAT THEY WERE DOING, BUT I WAS FASCINATED."

彼女たちのやっていることが理解できなかったけど、どんどん惹かれていった。
——ジェイムズ・モンテース

由香は、当時精力的にガールズ・グループ・シーンを追いかけていた。

"私は担当編集者として、のちにBABYMETALとなる3人に会い、密接に追いかけてきました。2010年に彼女たちを観に行ったとき、ありきたりなグループとはかなり違うなという印象も持ちましたが、その頃はまだ、ただただキュートだなという印象が強く、こんなにもビッグになるとは思っていませんでした"。

"当初、彼女たちはこのスタイルを、バッキング・トラックを流しながら行なっていました"と大窪は振り返る。"ただ2012年にO-EASTで観たときには、アンコールでフル・バンドを引き連れてきたんです。そこでやっと「あぁ、彼女たちはこのスタイルをさらに発展させていくのか」と気づきましたし、かなり真剣にやっていくつもりなのは明確でした"。

その時点でBABYMETALはすでに数曲のリリースを行なっていた。キバオブアキバとのスプリット・シングルのリリース後、インディーズ・シングル「ヘドバンギャー!!」(2012年)をリリース。これにより同年夏には千葉と大阪で開催された日本の名高き音楽フェスティバル《サマーソニック》に、グリーン・デイ、リアーナ、ニュー・オーダーといったアクトたちに並んで出演を果たす。本フェスの史上最年少での出演となった一方で、諸手を挙げて受け入れられたわけでもなかった。

"最初は誰もが、キュートなガールズ・ユニットだと認識していたと思います"と大窪は話す。"彼女たちはそういったカテゴリーにいましたが、どうすればそこからステップアップできるのかと、常に模索していたと思います。その後BABYMETALがロックやメタルのフェスでもプレイするようになってくると状況が変わり始めていきましたが、当時彼女たちは「まだ受け入れられていないように感じていた」と話してくれました"。

それから年月を重ね、BABYMETALはティーン向け雑誌からロック向け媒体へと露出の仕方が変化していった。2013年には再びサマーソニックで、そしてさいたまスーパーアリーナでの《ラウドパーク》でプレイし、またメタリカのドキュメンタリー&ライヴ映画『スルー・ザ・ネヴァー』の特別イベントで披露されたプロモーション映像にも出演する。

デビュー・アルバム『BABYMETAL』は2014年2月26日にリリースされ、日本のビルボード・チャート最高位2位を記録。3月には東京の伝説的会場である日本武道館で2夜公演が組まれ、28,000人のファンが詰めかけた。

"武道館公演は、彼女たちが本当に大成したと確信した瞬間でした"と大窪は話す。そして、5845マイル遠く離れたヘヴィメタルを発明した国では何かが巻き起ころうとしていた。

インターネット上で注目を集める映像といえば、愛らしい猫の映像がそのひとつとして挙げられるだろう。ほかにもヘンで困惑してしまうようなユニークな映像が、多くの注目を集めることもある。

2014年の初め、BABYMETALはメタル界に"WTF"(What the Fuck?＝なんじゃこりゃ?)な瞬間をもたらした。「ギミチョコ!!」のビデオである。

この曲は、彼女たちにとっての大きな瞬間を作り出した。誰もが"あの映像を観たのか?"とすぐさま口にするようになったのだ！ "「こいつは狂っている！一体何なんだ?」と思ったね"と語るのは[Kilimanjaro]のプロモーターであるアラン・デイだ。彼はのちにBABYMETAL初となるUKのショウをブッキングすることになる。

またベテラン音楽ジャーナリスト、ポール・ブラニガンは"私はビデオを観て、多くの人々と同様に「こりゃ何なんだ?」と思ったよね。クレイジーな真新しい曲で、こんな曲は本当に観たことがなかったから"と話してくれた。

BABYMETALがイギリス・デビューを飾った2014年の《ソニスフィア・フェスティバルUK》のメイン・ステージで、彼女らの直前にプレイしたテッセラクトのギタリスト、ジェイムズ・モンテースはそのときの気持ちをこう振り返る。

"誰かがビデオを教えてくれてね……そのときはかなりバカげてるなと思ったんだよ。本当だよ。彼女たちのやっていることが理解できなかったが、奇妙なことにどんどん惹かれていったんだ"。

初見の段階で3人中ふたりの心を鷲づかみにしたのだから、悪くはなかっただろう。しかしハッキリと言えることがあり、それはここUKにてBABYMETALが我々の注目を集めたということだ。

Listen to the Sound of Those Days in Analog Vinyls, Download & Streaming!

『LIVE~LEGEND I、D、Z APOCALYPSE~』

今や伝説として語られる"目黒鹿鳴館"でのライヴを経て、初ワンマンとなった3公演が初の音源化。活動初期の初々しい歌声のなかにも、すでにメタルの次代を担う風格も感じられる。《LEGEND"D"~》に収録されるカバー曲は、現在では非常にレアとも言えるのでは。

『LIVE~LEGEND 1999&1997 APOCALYPSE』

SU-METAL、YUIMETAL＆MOAMETALの聖誕祭の模様を収めた作品で、こちらも初音源化となる。《LEGEND "1997" ~》は彼女たち初となるアリーナでのライヴであり、またのちの世界を席巻する足がかりのひとつ「ギミチョコ!!」がここで初披露。

『LIVE AT BUDOKAN ~RED NIGHT~』

1stアルバム『BABYMETAL』をリリースし、満を持して初進出となった日本武道館公演より、初日のステージがレコードに。メガデス、メタリカ、スリップノットなども手掛けるテッド・ジェンセンがマスタリングを担当したことでも話題となった音源だ。

II: UK TAKEOVER

UKの奪取

「ギミチョコ!!」の成功に続く形で、BABYMETALはついにUKへと降り立つ。そして以後、快進撃をくり返していった。

「ギミチョコ!!」はイギリスで大きな現象となり、彼女たちを放そうとはしなかった。

“イギリスからオンラインでたくさんのコメントが送られてくるようになったんですが、それはどれも想定外の、素晴らしいレスポンスばかりだったんです”と、私たちが初めてBABYMETALにインタビューを行なった2014年にSU-METALはそう答えてくれた。“受け入れてもらえたんだって感じましたし、それは夢のような心地でもあって”。

“彼女たちが＜日本ではない別の国で人気を博した＞という噂が周り始めてから、やっと日本での状況が本格的に変わったんです”と大窪は振り返る。“海外のファンがBABYMETALにどう反応しているのかということに興味を抱いていました”。

それと同時に“どうやってイギリスに彼女たちを連れてくるのか”という競争も始まっていた。2014年7月5日、BABYMETALはソニスフィアにてイギリスでの最初のパフォーマンスを行なう。同日にはアイアン・メイデン、デフトーンズ、アンスラックス、ゴースト、そしてオープニング・アクトのテッセラクトという面々が出演していた。

“すぐにでも彼女たちのマネージャーを探さなくてはならなかった”。プロモーターのアラン・デイは語る。“私たちは彼女たちをキャッチして、ソニスフィアとフェス直後のケンティッシュ・タウン・フォーラム(ロンドン)でのライヴをブッキングすることができたんです。当初はテント規模のステージを計画していたんですが、そのままでは観客が殺到してとても危険だということが明らかになってね。その結果、メイン・ステージに格上げされ、私たちはそれまでに観た午後一時のアクトとしての最大のオーディエンスを目撃することとなったわけです”。

> **“IT WAS THE BIGGEST CROWD I’VE EVER SEEN FOR A 1PM SET”**
> 午後一時のアクトのなかで、それまでに観た最大のオーディエンスだったんだ。
> ――アラン・デイ

“俺は自分の出番が終わって撤収作業をしていて、彼女らが準備をしているのを見たんだよ”と語るのはテッセラクトのジェイムズだ。“彼女らはヒドく場違いなくらいに目立っていてね。長髪の古典的なメタル野郎たちと一緒に、ユニフォーム姿でドレスアップした少女たちがいたんだ。そしてバック・バンドのメンバーはフェイス・ペイントとコスチュームでウォームアップをしていた。彼らは驚異的なプレイヤーだったよ。俺は単に「こういうのってなかなかお目にかかれるものじゃないよな……」って感じだったね”。

BABYMETALがステージに上がったとき、フィールドは熱狂的なファンや興味深げな人々、そして腕を組んだ懐疑的なオーディエンスらが入り乱れて満員の状態だった。“ほとんどの人たちは開いた口が塞がらないといった状態だったね”とアランは笑う。“彼らは目の前で起きていることを信じることができなかったようで”。

“前のほうで家族と一緒にショウを観たんだ。息子はかなり気に入ったみたいで、自分の父親もプレイしたってことすら忘れていたようでさ”とジェイムズはため息をつくものの、実のところイヤな気分ではなかったようだ。

BABYMETALのパフォーマンスはその週末最大の話題となったが、それはBABYMETALフィーバーに乗ったファンだけの間ではなかった。3人がカーク・ハメット、チノ・モレノ、ケリー・キングらと写った写真は、彼女たちの出現によって我々のジャンルがどれだけ魅力的になったのかを示すものでもあったのだ。

“ソニスフィアはとても大きな経験となりました”と、2日後のケンティッシュ・タウン・フォーラムにてSU-METALは語ってくれた。“あんなにも多くのオーディエンスの前でプレイしたのは初めてのことだったんです”。

当日オーディエンスのなかのひとりとしてEarMUSIC(ドイツの音楽レーベル)のMDであるジョナサン・グリーンも彼女たちを目撃し、相当な衝撃を受けたひとりだ。“周囲を見回したら、確実に何かが起こっていると

感じたね”と振り返る。“オーディエンスのリアクションはアメイジングだったよ。大きな瞬間を迎えていたような気がするんだ”。

EarMUSICはイギリスとヨーロッパでの契約を行ない、2015年6月1日にアルバム『BABYMETAL』をリリースした。“グローバルなレベルでのメタルの進化を感じた大きな瞬間だったと私たちは信じているよ”とジョナサンは振り返る。

もしかしたらソニスフィアとフォーラムでの成功は、“新たな<Idol Metal>に興味を持った人がたくさんいただけだ”と思われたかもしれないが、それが一時的な成功ではなかったことを彼女たちは次の一手で示した。2014年の11月8日、彼女らは5000人キャパのブリクストン・アカデミーにて、ソールド・アウトのショウを実施したのだ。

“海外のバンドのショウをブッキングすると、大抵その国の人たちがライヴを観に来るものだ。私がフォーラムに足を運んだときも日本の音楽ファンがたくさんいるのだろうと期待をしていたんだが、そこにいたのはイギリスのメタル野郎ばかりでね。そ

こでやっとクロスオーバーが起きていることを確信して、ブリクストンでのライヴを考えたんだ。特別なライヴにさせることを念頭に、ブリクストンでしか彼女らを観られないようにしてね。そして多くの人が「ギミチョコ!!」や「メギツネ」をクリックするにつれ、さらに需要が高まっていくのが感じられたよ”。

しかし、まだすべての人が確信していたわけではなかった。頭の固いメタル・ファンのなかには、10代の女の子たち……すなわち作り上げられたポップ・スターたちがメタルをギミックとして扱っていることに憤慨する者もいたようである。“あの服装はなんだ！”、“笑顔を見せるだと？”、“踊っているじゃないか！”、“彼女たちはカーカスの『腐乱屍臭』を聴いていないばかりか、彼らがグラインド・コア・バンドとして始まったことすら知らないだろう！”という声が挙がっていたのだ。しかし、こういった保守的な信者たちからの辛口の叱咤は、彼女たちと拡大していくファンベースとの絆をより強めていくことにつながっていくのみであった。

“彼女たちの賢かったところは、自分たちが生粋のメタル・ファンから始まったわけではないとわきまえたことにある”と本誌ライターのポール・ブラニガンは肩をすくめる。“彼女らはこのジャンルにまだ足を踏み入れたばかりの幼い女の子たちだったんだ”。

“正直なところ、私はBABYMETALに加入した頃は、まだメタル・ミュージックが一体どんなものなのかまったくわかっていませんでした。でも今はメタルの素晴らしさを体感し、そこからたくさんのことを学びました”。YUIMETALは2015年、我々にそう語ってくれていた。

メタルに“未知なるファンベースのポテンシャル”があることが歓迎された一方で、メタルのコミュニティで高名なメンバーたちのなかには、BABYMETALに対して扉を閉ざした者もいた。

“フェスティバルのブッキングを行なう者として、個人的に彼女たちは[ダウンロード]のスピリットには適合しないと考え決断した”。2015年にポッドキャスト番組『That's Not Metal』のなかで、アンディ・コッピングは語っている。

しかし同年、フェスティバルが近づくに連れて状況は変化していった。当時最も勢いに乗り生意気さもあったパワー・メタル・レジェンドのドラゴンフォースは、すでに「Road of Resistance」でBABYMETALと共演を果たしており、フェス当日の金曜午後の彼らのステージで、即興で「ギミチョコ!!」の競演を行なおうとしていたそのとき、本誌はBABYMETALに密着していた。

“彼女らが会場にいるということが、口コミで広がっていたようだった”と、ジョナサンは振り返る。“BABYMETALがドラゴンフォースのステージに参加するという噂が広まった途端、ステージのあったテントはオーディエンスでパンパンになったんだ。会場の外には、入れなくてケンカをしている人たちまでいたからね”。

“彼女らがゴールデン・ゴッズ(ゴールデン・ゴッド・アワーズ)のためにやってくるっていうのは知っていたし、実現したらおもしろいことになるだろうと思ったよ”とハーマン・リは語る。“彼女らがステージに現われた瞬間のオーディエンスのリアクションは絶対に忘れることはないだろうね”。

その3日後、ロンドンで行なわれた英メタルハマー誌主催の《ゴールデン・ゴッド・アワーズ》受賞式にて、BABYMTEALは“ブレイクスルー賞”を受賞した。彼女らがプレイする直前、会場に集結した白髪交じりのベテラン・メタル・ミュージシャンたちは、彼女たちのパフォーマンスを観に楽屋からステージ前にまでやって来ていた。

「ギミチョコ!!」を耳にしてから18ヵ月が経過しても、イギリスではBABYMETALはピークを維持し続けている。これは“聴いてからせいぜい15分程度しかインスパイアできないだろう”という多くの人が最初に抱いた感想をはるかに超えたものである。彼女たちが単なる一発屋ではないという思惑が膨らんでいった。しかしBABYMETALはどこまで大きくなるのだろうか？

Listen to the Sound of Those Days in Analog Vinyls, Download & Streaming!

『LIVE IN LONDON
- BABYMETAL WORLD TOUR 2014 -』

武道館公演を成功させ、“海外武者修行”をスタートさせたBABYMETAL。初のワールド・ツアーでの、英国公演2ステージのパフォーマンスを収めた作品だ。《02アカデミー》公演ではのちのアンセムとなる「Road of Resistance」が初披露され、初見にも関わらず現地ファンからは大合唱が巻き起こり、その臨場感・空気感も本作の聴きどころと言えるだろう。なお、当ワールド・ツアー中に彼女たちは[ソニスフィア]のメイン・ステージに登場し、国内外で大きな話題を作った。

III: GLOBAL CONQUEST

世界制覇

アメリカ上陸からメタル・レジェンドたちとの共演まで、BABYMETALの熱狂列車は止められない。

[ウェンブリー・アリーナ]は地球上で最も名声のある会場のひとつだ。この会場で単独公演を行なったメタル・バンドは数えるほどで、実現できたとしてもそれは長年の道のりを経てからのことである。

アイアン・メイデンが同地で初めて単独公演を行なったのは1988年の《Seventh Tour Of A Seventh Tour》でのことで、その2年後にはメタリカが『メタル・ジャスティス』のツアーでプレイしている。メタル界最大のバンドをもってしても10年近いハードワークを経てやっと実現しているのだ。しかしBABYMETALは、それをイギリスにおける3度目の単独公演として成し遂げた。

彼女たちの輝かしいウェンブリーでのライヴ前日は、すべてのBABYMETALファンがカレンダーにチェックを入れている……4月1日、"Fox Day"として知られている日だ。2016年以来、バンドを祝福する日として、何かしらの発信がなされているからだ。当時、バンドは2枚目のアルバム『METAL RESISTANCE』をリリースしていた。

『オブザーバー』(イギリスの一般的な新聞のひとつ)からメタル系のプレスまで、各所から称賛のレビューが寄せられ、本誌のドム・ローソンは"滑稽だが、最高の形で実現した歓びである"と表現して10点中の8をつけ、バンドにとってのキャリアを決定づける瞬間を与えた。

"今も現実ではないように感じます"。2016年の初頭に行なったインタビューで、SU-METALはそう語った。"ウェンブリー・アリーナが伝説的な会場であることはわかっていたので、自分たちがそこでプレイするとなるとちょっと驚きますね"。MOAMETALは"本当に観に来てもらえるのかな?"と疑問に思っていたようだ。

しかし、その心配は無用に終わる。デビュー・アルバムの成功、ソニスフィア、2015年のダウンロード、メタリカと同日出演となったリーズ(《レディング・アンド・リーズ・フェスティバル》)といった一連のフェス出演の評価が重なり、バンドにとってのパーフェクトな嵐が巻き起こったのである。

"これは昔ケビン・コスナーが言っていたことなのだが"と、EarMUSICのジョナサン・グリーンが笑いながら話す。"築き上げていけば、自ずと結果はついてくる。私たちはバンドがそう進んでくれると信じ、実際にそれが報われたってことだよ"。

プロモーターのアラン・デイは、2016年の4月2日のことを思い出すも、今でも理解に苦しんでいるようだ。

"私が会場に足を踏み入れたとき、マーチャンダイズ担当者のひとりが売り切れてしまったTシャツを新たにプリントするために走り回っていてね"……と、信じられないという表情で思い返してくれた。"そんな光景を見たことがなかったから。開場前の時点で物販が売り切れていて、追加でTシャツをプリントするだなんて……どういうことだったんだ? 彼女たちは今後破られることのない、あの会場でのひと晩での物販売り上げ記録を打ち立てたんだよ。テーブルの端まですべて見てまわったけど、売り物が何ひとつなかったんだから"。そして日本のアーティストがこの国で行なった最大規模の単独公演となった。しかも3回目の単独公演で……ほかに一体誰ができるっていうんだ?

"THEY BROKE WEMBLEY'S RECORD FOR MERCH SALES"

彼女たちはウェンブリーの物販の売り上げ記録を破ったんです。
——アラン・デイ

称賛の声はイギリス国内だけでは留まらず、彼女たちに向けアメリカが鋭い視線を送り始めていた。

ウェンブリーから3日後、バンドは伝説的なトーク番組『ザ・レイト・ショウ・ウィズ・スティーヴン・コルバート』に出演し、アメリカのテレビ・デビューを果たした。"今から私は何を目撃しようとしているのかわかりません。しかし、かなり興奮しています"と司会者はニカッと笑い、バンドは「ギミチョコ!!」でエネルギーを爆発させてアメリカ全土を困惑させた。

"BABYMETALのノイズはサタン的だ!!

これはヒドイ!!”——怒れる視聴者のひとりがツイートし、同様に多くの怒れる頭の腐った狂信的宗教論者たちがそれを増幅させていった。3人の少女たちがチョコレートを楽しむことを歌ったこの曲について、メタル界の一部の高名な人たちも同様に怒り狂っていたことだろう。

たとえ多くの者が中傷しようとも、ロブ・ハルフォードのような影響力のある人物が彼女たちを支持したことは、多くのメタル・ファンたちの関心ごととなった。2016年にBABYMETALが《オルタナティブ・プレス・ミュージック・アワード》に招待された際、メタル・ゴッドを招いてジューダス・プリーストの代表曲「ブレイキング・ザ・ロウ」と「ペインキラー」をプレイしたのは信じられない戦略だったと言えるだろう。

“自分が「多くの注目を集めるだろう」と感じたものに対して、私は常に大々的にサポートをしてきたよ”とロブは語ってくれた。“だから私は頼まれたとき、嬉しかったよ。あれは慌ただしい日で一瞬で終わってしまったけど、かなりブッ飛んだからね”。

世界が急速に彼女らに追いついてきた頃、日本ではまた新たな展開を見せていた。《METAL RESISTANCE》ツアーは9月19日で千秋楽を迎え、その場所として55000人を収容する東京ドームという巨大な会場がブッキングされたのだ。それでも需要が上回ったため、翌日には追加公演も決定した。

“「日本ではメタルそのものの人気が高いのではないか?」という見方があった”とポール・ブラニガンは話す。“しかしそれは作り話なのかもしれない。メイデンとメタリカを除き、我々のどんなにビッグなバンドでも東京ドームでプレイなんでできなかった(編注:アイアン・メイデンは東京ドームではプレイしていない)。日本でアヴェンジド・セヴン・フォールドを観たことがあるが、彼らは日本じゃアリーナでプレイすることすらできない。BABYMETALみたいなバンドが東京ドームでふた晩もプレイするなんてほとんど聞いたことすらなかったよ”。

“東京ドームでのライヴに招待されたんだ”とアラン・デイは振り返る。“世界で最も大きな屋内のライヴ会場だと思うね。こっちでいうとU2をウェンブリー・スタジアムで観るようなものかな。これ以上大きな会場でプレイすることなんて不可能なんだ”。

バンドにとってもランドマークとなり、これはその数年前では夢に見ることさえなかったことだろう。

“日本では武道館のような大きな会場でもプレイしてきました”。ショウに向けて準備をしていたとき、SU-METALは『ケラング!』に語っている。“そして、東京ドームは常にやってみたい場所として夢見てきたんです。日本でも、「誰でもプレイできる」なんて会場

Listen to the Sound of Those Days in Analog Vinyls, Download & Streaming!

『LIVE AT WEMBLEY
BABYMETAL WORLD TOUR 2016 kicks off at THE SSE ARENA, WEMBLEY』

名だたる大物ミュージシャンが会場としてきた英ウェンブリー・アリーナが、彼女たちにとっては初の海外アリーナ公演となった。2nd『METAL RESISTANCE』発売翌日の開催であり、日本公演と同様のステージ・プロダクションで英国ファンの度肝を抜いた。

『LIVE AT TOKYO DOME
BABYMETAL WORLD TOUR 2016 LEGEND - METAL RESISTANCE - RED NIGHT & BLACK NIGHT』

8ヵ国、全22公演に及ぶワールド・ツアーのトリである、東京ドーム公演2Daysの模様を両日パッケージ。2日間で当時のオリジナル・ソングをすべて披露するというセットリストであり、“初めてライヴ作を買う”という人にもお薦めの一枚となっている。

『LEGEND - S - BAPTISM XX -
(LIVE AT HIROSHIMA GREEN ARENA)』

SU-METALの20歳を記念して開催された初の広島公演。観客には“三種の神器”が配布され、その着用者のみが参加できる特別なショウだった。YUIMETALが体調不良で不参加となったため、「GJ!」、「4の歌」は図らずもMOAMETAL単独で初プレイされた。

ではないですからね！"。

生涯に一度はやってみたいことリストのもうひとつが、2017年1月11日に叶う。韓国はソウルにある17000人のキャパシティを誇る[高尺スカイ・ドーム]にて、BABYMETALは歴史上最大のメタル・バンドのメイン・サポートに抜擢されたのだ。"メタリカは私たちにとって神様のような存在なんです"と、当時SU-METALは語った。"長い間彼らのことを憧れ続け、一緒にプレイするのを夢見てきました。だからこんなにもすぐに実現するなんて思いもしませんでした！"。

ここまでのところ、BABYMETALは次から次へと流星のようなサクセス・ストーリーを歩んでいった。しかし華々しく打ち上がったとしてもいつかは沈むものであり、2018年はバンドにとって災難な一年となった。

2017年12月30日、長らく神バンドのギタリストを務めてきた藤岡幹大が大けがを負い、1月5日に妻と娘たちに看取られて36歳の若さで死去した。バンドは楽曲「THE ONE」の歌詞、<We are the one, together, we're the only one, you are the one, forever.>とともにこのニュースをツイートした。

この不幸に揺さぶられながらも彼女たちは2018年5月にロードへと出て、バンドのオリジナル・ストーリーを題材にしたコミック・ブック『Apocrypha:The Legend Of Babymetal』を出版。しかし何の説明もないままにもうひとつの出来事が起ころうとしていた。YUIMETALのアメリカ・ツアーからの離脱である。

バンドのマネージメントは"YUIMETALはバンドのメンバーとして残り続ける"と声明を出したが、6月にヨーロッパを周った際もまだ不在であった。そしてついに10月に健康上の問題によりバンドを脱退したことがアナウンスされる。

"何度も考え直したのですが"と始まったYUIMETALの発表。"私はこの度BABYMETALを辞めさせていただくことになりました。(中略)もう一度ステージに立ちたいという強い思いもありましたが、今も体調が万全ではありません"。

"YUIMETALはこのグループにとって家

証言 HERMAN LI

彼はどのようにしてBABYMETALの"ファン筆頭"となり、彼女たちとコラボレーションするにまで至ったのか。「Road of Resistance」での共演についてなど、ドラゴンフォースの類稀なるシュレッダーが語る。

——あなたが初めてBABYMETALを聴いたのは？

オレたちが『ザ・パワー・ウィズイン』(2012年)をレコーディングしていた頃だったんで2011年あたりになるけど、このバンドがバズっていたのを小耳に挟んだんだよね。インターネットで彼女らのミュージック・ビデオを観てみると、ロック、メタル、Jポップをミックスした、かなりクールなものに感じられてさ。ただ、オレはかなり日本文化に馴染みがあるから、これはショッキングなことではなかったよ。多くの人が"オー・マイ・ゴッド！彼女らは一体何をしているんだ？"となっていたのを知っているけど、オレはクールなコンボでとてもオリジナル性を感じたよ。そして曲そのものがキャッチーでかなりメロディックだったから、夢中になっていったんだ。

——彼女たちへの風当たりが強かった理由はなんだったと思いますか？

誰かと異なることをすれば嫌われるものさ。それがいいものか悪いものかなんて関係なくて、インターネットってのは愛と憎悪のためにあるようなものだから！　正直に話すとロックやメタルのファンの多くは強情で、異なる方法でやられたものを嫌うんだよ。だからそれをうまくかわして、自分の道を進み続けるべきなんだよね。

——「Road of Resistance」でのコラボレーションはどのようにして実現したのでしょう？

彼女たちが1stアルバムをリリースする以前からコンタクトを取ってきてくれたんだ！メールをやり取りしているなかで自分たちのことを説明してくれたんだけど、オレとしては"君たちが何者なのか、オレはわかっているよ！"という感じだった。サム(トットマン／g)と話をしたんだけど、こっちは完全にやる気になっていたね。オレたちはよくゲスト参加のオファーをもらうんだけど、フレッシュでオリジナルじゃないと断ることにしている。でもこの件に限ってはイエスと即答させてもらったよ。

——コラボレーションのプロセスはどのように進んでいきましたか？

KOBAMETALと話をしたところ、"ドラゴンフォースでプレイしているスタイルのままでやってほしい。曲はすでに書いてあるので、そこで君たちらしくプレイしてもらえないかな！"と言われてさ。その段階では歌がまったく入っていないデモといった状態だったけど、BABYMETALのバックグラウンドや彼女たち自身について考えつつ、オレたちはオレたちらしくプレイしたんだ。

——彼女たちと初めて会ったときの印象は？

ドラゴンフォースが日本でプレイしたときに、彼女たちが観に来てくれたんだ。SU-METALとスタッフが全員来てくれてね。オレらは曲について少し話をしたんだけど、おもしろいことに、もっとエクストリームなソロを求めてきたんだ！　"わかったよ、じゃあもっとクレイジーにやらせてもらうよ！ハハハッ！"って感じだったな。彼女たちは皆礼儀正しくてリスペクトの念があり、本物のドラゴンフォースのファンだったね！

——2015年のダウンロードでの、「ギミチョコ！！」の競演について教えてください。

オレらはちょっとヘンなことをやるのが好きでさ。そして"BABYMETALは絶対にダウンロードでプレイできない"っていう噂が流れていたので、彼女たちをドラゴンフォースのステージに呼ぶことにしたんだ。オレらは以前にもショウをしたことがあるし、ゴー

族のような存在です”。2019年に彼女たちをキャッチした際にSU-METALが語ってくれた。“彼女は離れていきましたが、私たちは今後も彼女をサポートしていくつもりです”。

大窪のような長年のファンでさえも当初このニュースには驚いた様子であった。“彼女たちは小学生の頃からお互いのことを知っていました。絆はあまりにも強く、ずっと一緒にいるものだと心から信じていました。だけど、これはネガティブなことではありません。彼女はこれからもずっとBABYMETALの一部なんです”。

現在までにいくつもの成功を収めてきたが、これらの件についてはキツネ様も想定外だったのではと感じざるを得ない……。

ルデン・ゴッズのためのリハーサルもしていた。だから、オレらが初めて彼女たちと一緒にプレイしたのは「ギミチョコ!!」だったんだ。コンピューター上でイントロを3回もクリックしてしまったんだから、実際は相当緊張していたんだろうね！　そのせいで何度も止まってしまい、オレは発狂してしまったよ。SU-METALは“一体何をしているの？”という感じでこっちを見ていて、パニックになったオレの顔を見て大笑いしていたよ。それまではキチンとリハーサルを一緒にしたことがなくて、“どうしてコンピューターがカタまるんだ！”って動揺しているのが彼女には伝わっていたようだった。オレたちはとにかく大笑いすることになったんだけど、彼女たちは本当におもしろい女の子たちだよ。

――そして、その数日後のゴールデン・ゴッズでの「Road of Resistance」のパフォーマンスは、あなたがプレイした最初で最後のものですか？

そのとおり。ドラゴンフォースとしてあの曲は一度しかプレイしていないから！　だからもし君たちがあの場所にいたら、歴史の一部になっているということかな！　ファンを目の前にしてメタルハマーがBABYMETALをああいった形で盛り上げてくれたのはファンタスティックだったよ。あのときは彼女たちとリハーサルができて、とても記憶に残る瞬間となったなぁ。

IV: METAL GALAXY

鋼鉄の銀河へ

グラストンベリーからギャラクシーまで、3枚目のアルバムを引っ提げたBABYMETALに“免疫”を持った場所などどこにもない。

世界を制覇したら、次は何をするのか？　宇宙を制覇することは明確である。

2018年に行なわれた挑戦は、彼女らにとってスポットライトから遠ざかる初めての事態となった。そして2019年の4月1日――BABYMETALの暦における“Fox Day”――に沈黙を破り、その年の後半に3枚目のアルバムをリリースし、《BABYMETAL AWAKENS - THE SUN ALSO RISES》と《BABYMETAL ARISES - BEYOND THE MOON - LEGEND M -》という一連の単独公演の開催がアナウンスされた。

6月28日、横浜アリーナでのショウにて、夏らしく飛び跳ねるような新曲「PA PA YA!! (feat. F.HERO)」が解き放たれ、ニュー・アルバムのタイトルが『METAL GALAXY』となることが明らかになった。そのライヴではステージ上にYUIMETALの代わりとなるダンサーが招かれ、それはアベンジャーズと呼ばれる3名のなかの誰かひとりが加入するというスタイルであった。

“これは新たなBABYMETALの始まりです。SU-METALとMOAMETALをサポートするアベンジャーズは、キツネ様により召喚された選ばれしダンサーたちなのです。誰が選ばれるかはキツネ様のみぞ知るところです”とKOBAMETALは表現する。

横浜アリーナでの2日目のライヴののち、BABYMETAL一行は飛行機に跳び乗りイギリスへと向かう。メイン・ストリームへの大きな一歩を踏み入れるべく、ストームジー、ザ・キュア、リアム・ギャラガー、カイリー・ミノーグといった巨大なアーティストたちとともに《グラストンベリー・フェスティバル》に出演するためだ。日曜の午後の“ジ・アザー・ステージ”にて、フェスティバルのメイン・ステージでプレイする最初の日本人として歴史を作った。

バンドはすべての人たちとの競い合いの場に立つこととなり、そのなかにはザ・ピラミッド・ステージに出演したサー・デイビッド・アッテンボロー（※学者、活動家）もいた。彼の“アフリカの野生動物たちの交尾に関するありがたい講演”を拝聴するのと同様に、私たちはサークル・ピットや死ぬほどのリフを浴びることを楽しんだ。

UK誌編集部員マーリン・アルダースレイドは現地で目撃したことについて、“興味を抱いた多くのオーディエンスは困惑し、それが次第にアミューズメントへと変わり、そして純粋な歓喜になっていった”とレビューしている。

“グラストンベリーが世界最大のフェスのひとつであることは知っています”。ライヴ終了後にSU-METALがNMEに語った。“かなり緊張していましたが、数曲プレイしたところでオーディエンスの皆さんが両手を挙げてスクリームしてくれたんです”。

噂が噂を呼び、名声だけが巨大化したように思われていたが、『METAL GALAXY』の「Distortion」ではアーチ・エネミーのアリッサ・ホワイト＝グラズが、「Oh! MAJINAI」ではサバトンのフロントマンであるヨアキム・ブロデーンといった実力派アーティストたちのゲスト参加が明るみになるにつれて、周囲は実力が伴っていることをついに認めざるを得なくなったのだ。バンドに対して高みの見物をしていたメタル野郎でさえも、クールなサウンドであることを認めたのだ！

“IF YOU MAKE IT TO 10 YEARS, YOU’RE PART OF THE FURNTTURE”

もし10年もい続けられたのなら、
もはや当たり前の存在になったということだね。――ロブ・ハルフォード

“俺に参加してもらいたいと彼女らが言っていたと知って驚いたね”と、ヨアキムはアルバム・リリースを前にして我々に語ってくれた。“もちろん、参加を断るなんてあり得なかったさ！　彼女らは素晴らしい人たちだし、かなりグッドなライヴをしているんだからね”。

“アーチ・エネミーは日本とは強い関係があるの”と、アリッサがつけ加える。“彼女たちから参加してもらえないかと聞かれ、イエスと答えたわ。どういったものを思い描いているかをかなり詳細に教えてくれて”。

くり返しになるが、BABYMETALはメタル・

Photographer：宮脇進（PROGRESS-M）

シーンの話題の中心である。世界中のファンが待ち望んでいた『METAL GALAXY』を耳にしたのは10月11日のことで、キャリアを通じて最大級かつ最も多彩で挑戦したアルバムであることを即座に証明した。

メタル・コミュニティ外のレビュワーたちのすべてが理解したわけではなかったが、『ザ・ガーディアン』(イギリスのポピュラーな新聞のひとつ)は"カワイイ・メタル、マイ・ビューティフル・ダーク・トゥイステッド・ファンタジー"と、ジャンルを決定づけたカニエ・ウェストの名盤(『マイ・ビューティフル・ダーク・ツイステッド・ファンタジー』2010年)を引き合いにして評した。しかし10点中8点という評価を得ていることについて、ダニー・レイヴァースは"存在そのものが巨大な変化球のようなバンドともなると、いくつもの見方が出てきて、バンドはこれからも未知なる分野への成長の余地があると期待させるものだ"と話す。

本アルバムはイギリスのトップ40チャートで上位20位以内を記録し、アメリカの[ビルボード・トップ200]にも入り込み、同国における日本語アルバムとして最上位を記録した。そしてアメリカのトップ・ロック・アルバム・チャートの首位をアジアのバンドとして初めて獲得したのだ。

ちょうどその頃BABYMETALは、アメリカでの初のヘッドライン・ツアーを敢行しており、リリース日はロサンゼルスはイングルウッドの[ザ・フォーラム]での17000人のファンを集めた自身初の現地アリーナ公演の日と重なることとなった。自分たちが地球規模のメタルの新たな担い手であることを示すべく、彼女たちはモンゴルが生んだフォーク・メタラーであるザ・フーを、ポートランドとシアトルのショウに招いた。

"僕たちはともに独自のコンセプトを持ったバンドなんだ"と語るのは、ザ・フーのマルチ奏者であるジャヤだ。"僕らは自分たちのネイティブな言語で歌っていて、そんな僕らのことをヘヴィメタルとする人たちもいるだろう。しかし僕らが音楽に持ち込んでいる日本やモンゴルのサウンドは、新たな次元を作り出しているんだ"。

そしてショウについては…… "バックステージではちょっとお喋りしたりもしたんだ"と振り返る。"毎晩僕らは愛とサポートを

証言 ROB HALFORD

メタル・ゴッドは、BABYMETALを聴いた瞬間に恋に落ちた。そして彼らは一緒にプレイすることとなる。

——あなたが初めてBABYMETALを聴いたのは?

彼女たちが始まったばかりの頃だったと思う。2012年か2010年のことだったかな。ただ私が本当に彼女たちに夢中になったのは、世間でも注目を集めるようになって1stアルバムをリリースし、「ド・キ・ド・キ☆モーニング」を聴いてからだね。日本人は本当にクリエイティブで実験的だ。ほかの国では見られないようなことをしてくるし、恐れ知らずなんだ。彼女らのルックスは私の頭から離れず、音楽はそれまでに経験したことのないようなものだったから。

——彼女たちと初めて会ったときの印象は?

ワンダフルだったよ! フェスのバック・ステージだったと思うけど、それがどこだったのかは覚えていないがね。彼女らはパッとやって来て写真を撮っていったんだ。彼女らは見てのとおりメタルの大ファンで、とても礼儀正しくてラブリーな人たちだった。グレイトだったね。

——2016年の《オルタナティブ・プレス・ミュージック・アワード》でのBABYMETALとのパフォーマンスは、どのようにして実現したのでしょうか?

彼女らのマネージメントからコンタクトがあって、私はイエスと答えた。当時私はアメリカに住んでいたんで、簡単なことだったよ。彼女たちは「ペインキラー」と「ブレイキング・ザ・ロウ」を提案してくれて、ラブリーなアイディアだと思ったね。ちょっとしたリハーサルをしたんだが、全員の手際の良さを気に入ったし、洒落た声を持った女の子たちだけでなく、バックアップしていたバンドも気に入ったね。あのバンドの連中は皆相当な腕前を持っていて、影の薄い存在として見られていたことがアンフェアに感じられたよ。私にとってBABYMETALは彼らを含めた全員なんだ。とにかくブッ飛んだね。一緒にパフォーマンスをすると決まってから彼らの衣装を頭に入れ、私はヴィンテージ・ショップに行って黒と赤のレザー・ジャケットを手に入れ、アマゾンで黒と赤のTシャツとスニーカーをいくつか購入したんだ。だから私はBABYMETALのために衣装を用意したんだね。今でもクローゼットのなかのどこかに置いてあるはずだよ。

——実際にプリーストの楽曲をプレイしてみて、今度はBABYMETALの楽曲をプレイしてみたいと思ったりは?

ぜひやってみたいね。「ギミチョコ!!」や「ヘドバンギャー!!」に飛び入りで参加できたらグレイトなことだと思う。しかしそれ以上に、私は日本語で歌ってみたいと願っている。私はそういったことを今までやったことがなかったからね。BABYMETALの曲を歌うとなると、それはスリリングなことになるだろうが、既存曲をやるよりももっとユニークなことにトライしてみたい。一度きりの特別なものをやれたら、それもまた夢のようなものだ。次にプリーストが日本に行った際には、スタジオに入ってオリジナル曲をやってみるのもいいだろうね。「Fox God Metal God」ってのはどうかな!

——彼女たちのイメージについてどう思いますか?

私は愛しているよ。私たちがプリーストで過去にやってきたことと似ていて、キツネ様とそれにまつわる神話的なものって、メタルと日本文化を想起させるものだよね。そして彼女たちは成長していく過程でプリーストやほかのさまざまなメタル・アクトたちにインスパイアされてきたと話してくれたけど、とても恐縮してしまうね。

——彼女たちは自分たちのシャツにプリー

感じていて、BABYMETALのファンたちが「フー！　フー！」と叫んでくれた。僕らはみんなでショウを観たけど、本当にアメイジングだったんだ。彼女たちのヴォーカル、振りつけ、それにミュージシャンたちのテクニックとすべてが驚異的だったよ”。

2020年、BABYMETALは初となるヨーロッパ単独ツアーを行ない歓迎されたが、キツネ様でさえもパンデミックを予測することはできなかった。多くの同胞たちと同様に彼女らも活動を維持するために、従来のツアー・サイクルに頼らない新たな方法を探さなければならなくなった。

そのなかでも彼女たちの最も知られた活動は、ブリング・ミー・ザ・ホライズンのEP『ポ

ストを示唆するようなプリントをしたこともありますからね！

それもグレイトなことだよ。愛らしいオマージュだし、本当にナイスなジェスチャーだね。これは何かモノを介して行なわれた循環的なことだとも感じるよ。というのも、私たちは『イン・ジ・イースト』で日本の書道を取り入れたから。だからあのときやったことが自分たちに巡ってきたという感じだね。

——どうしてメタル・ファンたちは、彼女たちを受け入れるのに難航したんだと思いますか？

それは、彼女たちが型を壊したからだろう。嫌われる者は大抵成功する者だということに、君は気づいたことがあるかい？　私自身それを理解したことはなかったが、メタルはみんなのものであって、多くの人に受け入れられ、そしてオープンなマインドでチェックされていくべきものだ。私はそれがどんな表現であり、どんなものであっても受け入れるよ。そして、それが10年以上続いていくものなのであれば、うまくいっているという証拠だろ！

——彼女たちに向けて、10周年のバースデイ・メッセージを！

ハッピー10thメタル・アニバーサリー。キツネ様とともにラウド・メタルの未来のためにホーンを立てろ！　君たちのメタル・ゴッドより。

スト・ヒューマン:サバイバル・ホラー』に収録された「キングスレイヤー」で実現する。我々のジャンルでの最新ヒットを飛ばす2バンドによるコラボレーションである。

12月には10周年を祝う形でベスト・アルバム『10 BABYMETAL YEARS』をリリースし、1月から4月にかけて日本武道館で10回の公演を行なった。最終日にはキツネ様からの暗号のようなメッセージが届き、近く大きな動きがあることがほのめかされた。

"パンデミックが流行しながらもBABYMETALはパワフルなパフォーマンスを披露し、10公演に及ぶ日本武道館でのショウを完走しました"。バンドのマネージメントからプレス・リリースがなされた。"10公演目のライヴのエンディングで、BABYMETALは地球を離れLIVING LEGENDへと向けて歩み出すことがアナウンスされました"と。

これが何を意味したものなのかは推測の域を出ないし、BABYMETALという現象がどういったものになるのかを推測すること自体意味がないだろう。

多くの人にとってただ物珍しく、ギミック、そして一発屋だろうと思われていたグループだった彼女たちだが、実際にはスペクタクルな10年をたどってきた。下馬評とはかけ離れた、誰も見たことのないサクセス・ストーリーをBABYMETALは歩んだのだ(もちろん唯一キツネ様のみは見られていたというべきだろうか)。

"BABYMETALがスタートする以前、東洋の文化やJポップがメインストリームで注目を集めるようなことはありませんでした"とポール・ブラニガンは話す。"そして、どんなメタル・バンドにとってもそれを実現させることは不可能でした。そのため、これが計算し尽くされていたとか、いとも簡単に成功したという言葉は……真実とは言えないでしょう。これはどう考えても、普通なら起こり得なかったことなのです"。

"彼女たちが今いる場所は、プリーストが『ブリティッシュ・スティール』のときにいた場所だ"……そうロブ・ハルフォードはつけ加える。"それをぜひ覚えておいてもらいたい。この業界に10年もい続けるっていうのはどんなバンドにとっても難しいことで、それを実際にやってのけるなんて大したものだ。彼女たちはもはや当たり前の存在になったということだね"。

そして、これからの10年が始まる。

Listen to the Sound of Those Days in Analog Vinyls, Download & Streaming!

『LIVE AT THE FORUM』

世界同時発売された3rd作『METAL GALAXY』リリース後、初となるアメリカ単独アリーナ公演を収録。新作リリース後ということもあり、新曲が多く並んだという印象も。神バンドの演奏も含め、アメリカ的なグルーヴが感じられるライヴ作なのでは。

『LEGEND - METAL GALAXY (METAL GALAXY WORLD TOUR IN JAPAN EXTRA SHOW)』

2020年1月という、本邦がコロナ禍に襲われる直前に開催された幕張メッセ2Daysの模様を収める。両日それぞれで『METAL GALAXY』の楽曲の多くがプレイされ、またアンコールでは東西の神バンド、アベンジャーズ全員が登場。その圧巻のサウンドをレコードでも楽しんでほしい。

最新映像作『10 BABYMETAL BUDOKAN』 ◎9月29日発売/トイズファクトリー

昨年リリースされたベスト・アルバム『10 BABYMETAL YEARS』の10曲を中心に、5種類のセット・リストにて行なわれた日本武道館ワンマン・ライヴ10公演。本作にはそのなかから9&10公演目の模様を収録。彼女たちの10年の結晶を捉えた、貴重なステージだと言えるだろう。

【DVD盤】、【Blu-ray盤】の通常盤には4月14日・15日の模様を収録。また同通常盤の内容に1月公演の映像がセットとなった2枚組アナログ・サイズ・ジャケット仕様の【初回生産限定盤(Blu-ray2枚組)】、ほかに【2枚組ライヴCD】、【2枚組ライヴ・レコード】もラインナップ。

●2Blu-ray(初回生産限定盤)/TFXQ-78193～94
※アナログ・サイズ・ジャケット仕様
●Blu-ray(通常盤)/TFXQ-78195
●DVD(通常盤)/TFBQ-18237
●2CD(通常盤)/TFCC-86782～83
●2VINYL(完全生産限定盤)/TFJC-38096～97

【収録曲】※通常盤

01.BABYMETAL DEATH - Shin ver. -
02.イジメ、ダメ、ゼッタイ
03.ギミチョコ!!
04.ド・キ・ド・キ☆モーニング
05.GJ!
06.NO RAIN, NO RAINBOW
07.Distortion (feat. Alissa White-Gluz)
08.PA PA YA!! (feat. F.HERO)
09.メギツネ
10.KARATE
11.ヘドバンギャー!!
12.THE ONE
13.Road of Resistance

METAL HAMMER JAPAN

LET'S TALK METAL!

レイザーラモンRG

“あるある”に乗せて歌うのって、
中学・高校で浴びるほど聴いてきた曲で、
それが助けてくれたという。
なんとなく聴いていることも、すべては仕事になると思って。
結局は、趣味も仕事も真面目にやるヤツがカッコいい……
それを信じてやっています。

“趣味を仕事にしたい”という願望は、もしかしたら全社会人が思うことかもしれない。“バンドをやっていたから音楽業界に”、“マンガが好きだから出版社に”……なかには、それを実践した人もいるだろう。

ただし、それまで無邪気に楽しんできたことを仕事にするということは、自己満足というゴールではない目的地が生まれることであり、どこかで純粋な気持ちを置いていかなければならないことでもある。

さまざまな“メタル・バンドあるある”を持つレイザーラモンRGは、音楽、ファッション、プロレスと多彩な知識を自らの芸に落とし込んだ、ある意味では“趣味を仕事に”できたケースだと思うかもしれない。しかし、それもプロの目線で見ると、やはり簡単なことではないのがわかる。

取材・撮影：オカミ・タカヒデ

Profile

1974年6月8日生まれ、熊本県甲佐町出身。吉本興業所属。1997年10月、レイザーラモンHGとともにお笑いコンビ“レイザーラモン”を結成。ファッション、バイク、プロレス、音楽と幅広いジャンルへの造詣が深く、それぞれの知識を生かしたメディア出演も多い。個人では《R-1ぐらんぷり2014》大会にて準優勝を果たしている。ベーシストとしての面も持ち、過去には専門誌『ベース・マガジン』の表紙を飾ったことも。現在はバンド“あるあるメタルオールスターズ”として、ライヴ活動も行なっている。

●レイザーラモン公式YouTubeチャンネル『新春漫才番組絶対呼ばれたいんや！』
https://www.youtube.com/channel/UCIs70n_ydZjkI3wohUU0R4A

メタルとプロレスは軽くできない。覚悟のジャンルなのかも。

僕らだけがメタリカをやって工業高校のヤツらが観にくるという。

── RG さんと言えば、ファッションやスポーツ、バイクなど幅広い趣味をお持ちですが、そのなかでも音楽への造詣は、芸の一部としても大きなウェイトを占めていると言えるのでは？

そうですね。結局自分は歌いたかったというのがあって。中学生くらいから有名になりたくて、なんやかんやで“あるあるを歌います”って言ってますけど、今それで飯が食えているのが感慨深いですね。

── 現在は“あるあるメタルオールスターズ”として、ライヴの配信もやっているくらいですからね（笑）。そもそも、メタルへの入り口になったバンドというと？

最初は NHK の『ジャストポップアップ』で観た聖飢魔Ⅱさんです。いわゆる“悪魔悪魔していたとき”はまだ小学生だったんですけど、『ジャスト～』でやっていた『THE OUTER MISSION』（1988 年）の曲はどれも洗練されて、演奏力もすごくて。そこからハマってラジオを聴くようになり、ミサも観るようになっていったんです。

── 土橋さんプロデュースで、ハード系一辺倒ではない作風に変わったアルバムでもありますよね。そして、当然自分でもバンド活動をしていくという。

その後もメタリカやモトリー・クルー、アイアン・メイデンの CD を友達に借りてダビングしたりしていたんですけど、その子の家が新築して屋根裏をスタジオにすることになったんですよ。それで高一のときにメタル好きの友達とバンド組むことになって。僕は聖飢魔Ⅱで一番目がいったのがゼノン石川和尚だったので、高二の夏休みに修学旅行で東京に行ったタイミングで、念願のエレキ・ベース……ヤマハのビリー・シーン・モデル（ATTITUDE シリーズ）を 7 万円くらいで買いました。

── そこで和尚に目がいくあたり、今につながる観察眼がすでにあったとも言えそうです。

その頃はベース・ブームでもあったのかな。爆風スランプの江川ほーじんさんとか、ベースという一見目立たない楽器がカッコよかったっていう。今の芸風にもつながってますけど、人と違うっていうベースにちょっと惹きつけられましたね。

── そこで花形ベーシストのトップであるビリー・シーン・モデルを選んだのは、自然な流れでしょうね。

スティーヴ・ハリス・モデルとかもありましたけど、僕はもうビリー・シーン・モデル以外は考えなかった。リペアにも出していろいろカスタムもして、いまだに使ってますから。

── そのベース愛が実って、専門誌『ベース・マガジン』の表紙も飾っているんだから、これはベース少年としては素晴らしい着地点ですね（笑）。

着地点でしたねー。立命館大学に進んで軽音楽部に入るんですけど、そこでのとある縁から、まさかのベーマガ表紙を。あれは遺影でいいかも（笑）。

── ちなみに、年齢的にはメタルそのものはマイノリティという感じでもなかったのでは？

いや、高校までは愛媛県の片田舎だったので、メタルは学年で 4 ～ 5 人聴いているくらいでした。学園祭のバンドも BOØWY や THE BLUE HEARTS ばっかりで、僕らだけがメタリカをやって近所の工業高校のヤツらが観にくるという。

──地域によっても違いがありましたか。

そこから京都の大学に行ったら、メタルってけっこう人気あるんだなって。フェスティバルホールとかも近くて、今までの分ライヴも行きまくりましたね。それこそ地元で初めて観たコンサートは聖飢魔Ⅱで、野村ダムっていう近くのダムの上に浮いているステージでやってくれたんですけど、それくらいしか観られなかったから。

── またテレビで拝見するネタから、80 年代歌謡曲もお好きなのかなと。

80 年代の曲に乗せて“あるある”をよく歌ってるんですが、そこは小学生のときの『ザ・トップテン』、『ザ・ベストテン』とかの記憶からなんです。中学からは『ベストヒット USA』的な 80 年代後半洋楽、90 年代に入ってからはメタル。90 年代後半からはオルタナティブにいった感じで。

── RG さんはいい意味で幅広く音楽を楽しんでいるという印象があります。

まわりからの影響もありましたね。大学くらいだと、王道メタルはちょっと恥ずかしいっていう時期もあったり。でも家では朝起きたらエクストリームの『ポルノグラフィティ』を聴いていたりして、そこは信者としては失格なんですけど（笑）。

── 大学生くらいになると、“ちょっとインテリ的な音楽を聴かないと”的な空気もあるんでしょうね。

だからドリーム・シアターには助けられたというか、“ドリーム・シアターは好きって言っても大丈夫”みたいな。『イメージズ・アンド・ワーズ』のツアーは行ったし、ギター・ソロも歌えるくらい覚えていて今も聴いてます。

朝起きて聴くのはドラゴンフォース。あれが一番アガります。

── このようにメタルを始めとした音楽に精通した RG さんですが、コンビ名からもわかるように、プロレスへの愛情も並々ならぬものを感じます。

高校のときからメタルとプロレスは好きで、僕は大学で軽音楽部に入ったんですけど、“学生プロレス”の奴らのほうがより尖ってたんですよね。あいつらみたいになりたいと思って軽音楽部からフェイドアウトして、新日本プロレスの棚橋（弘至）と一緒にやってました。

── なるほど。ただ“プロレスとメタル”って親和性が高いですよね。なぜだと分析します？

激しさと、曲の長さみたいなところもあると思います。カッコつけてニルヴァーナとか聴こうと思ったんですけど、すぐ飽きたんですよね。その点メタルやプロレスは楽しませてくれる期間が長いというか。あとは非現実感が高い。ああいう格好や髪型は、したいけどできないっていう憧れがありますよね。ヒップホップとかパンクはちょっと踏み出せばできるけど、メタルとプロレスは軽くできない。覚悟のジャンルなのかもしれない。

── 芸人・芸能の仕事も、なかなかの覚悟がないと入れない世界な気がします。入場曲にはハード系の音楽がよく使われていて、そのあたりにも両カルチャーの近さがあるように思えます。好きな入場曲というと？

メタルまではいかないけど、まずはザ・ファンクスの「スピニング・トーホールド」（クリエイション）。天龍（源一郎）さんの「THUNDER STORM」（高中正義）。メタル好きからしたら、蝶野（正洋）さんの新しくなってからの「マーシャル・アーツ」（ロイヤル・ハント／入場曲名としては「クラッシュ～戦慄～」）。あれが最初流れたときは

“おぉ！”ってなりましたよね。

―― むしろ、当人たちのコンサートでも、一番“おぉ！”となる曲だったり（笑）。

あと新日本プロレスの開幕曲として使われている「ザ・スコアー」（エマーソン、レイク＆パウエルのカバー）。ほかにもキッス「勇士の叫び」を使っていたスティーブ・ウィリアムス。あれで洋楽を知るっていうのがありました。だからちょっと今の格闘技やプロレスの入場は、ギターの音がないなって思います。

―― 確かに。ちなみにご自身の入場曲として使うとしたら？

おー、ムズッ！　毎日変わると思うんですけど、最近朝起きて歯磨きしながら聴くのはドラゴンフォースの「スルー・ザ・ファイア・アンド・フレイムス」ですね。あれが一番アガります。

―― お、意外と言えば意外！

以前は雑誌を読みながら“こういうの聴いてみよう”って広げていたんですけど、今はサブスクじゃないですか。ディープ・パープルやレインボーとか聴こうとすると、オススメとしてドラゴンフォースも出てくるんですよ。だからそもそもは存在自体知らず、カッコいい曲として入ってきたんです。最初は「トゥモロウズ・キングズ」とか「ザ・ゲーム」とかいろいろと観て“ああ、こういう人なんだ。アジア系の人も入ってるんだ”って。そして最高傑作として「スルー・ザ・ファイア・アンド・フレイムス」にたどり着いた感じですね。

―― 起床のタイミングでドラゴンフォースを聴いたら、そりゃ目も覚めそう（笑）。

初めてアルバムを聴いたときは笑っちゃったんですけど。コミック・バンドっていうとアレだけど、キャラを突き詰めてますもんね。自分的にはそれがもう待ってましたで。本当にバカっぽくもあり、弾き方とかもめちゃくちゃおもしろくて。朝起きて戦闘体制へ持っていくには一番いい。

―― ある意味、彼らはプロレス的とも言えそうですから。ちなみにコンビ名のレイザーラモンは、スコット・ホールのWWF時代の名前からですよね。これはなにゆえ？

プロレス同好会の先輩にアメリカ在住の方がいて、その人が“向こうではプロレス改革が行なわれている”って、毎週ビデオを送ってくれたんです。あの当時ってWWFやWCWがいろいろなショウに振り切ってどんどん過激にもなっていって、そこで活躍していたのがショーン・マイケルズとレイザー・ラモン。そのふたりが初めてやったラダー・マッチはいまだに名勝負と言われるんですけど、その試合が大好きで、そこから“レイザーラモン”という名前をとりました。

―― レイザー・ラモン時代は特にアメリカン・プロレスというスタイルでしたから、それこそモトリー・クルーが好きなのと同じ感覚で、アメリカンなレスラーを選んだのかと思っていました。

そこは、レイザー・ラモンという名前とレスラーのカッコよさだけでつけた感じですね。僕はそういう音楽が大好きなんですけど、相方（レイザーラモンHG）は平松愛理さんとか優しいのが好きなので、コンビ活動に関しては音楽に重きを置いてはいないんですよね。

ネタはドラマに近くて曲はギャグに近い。

―― 率直な質問なんですが、あるとき“あるある”が言いたくなったんですか？

これはもう偶然で。僕の場合、あるとき相方がプロレスで大怪我をして、自分が完全にピンになってしまったんですね。月収が7千円とかで“これはヤバい”ってときに、『リンカーン』という番組で“あるあるのオーディション”があったんです。そこで市川海老蔵さんのモノマネをしながら歌舞伎のあるあるを言おうと思ったんですけど、“歌舞伎……役者さんは弟子を鏡ごしで怒りがち”くらいしか思いつかなくて。それで“市川海老蔵さんはお茶のCMがあるな……チャチャチャ……石井明美さんの「CHA-CHA-CHA」があるな……でも早く言いたいって言って最後に1個だけ言おうかな”って苦し紛れに出したところ、スタッフさんに“言わないって新しいね”って言われて。それであるあるを曲に乗せて歌うスタイルが生まれました。

―― そこから、そもそも好きだったメタルのあるあるにもたどり着いたわけですか。

そうですね。ケンドーコバヤシさんに「CHA-CHA-CHA」以外も聞きたいと言われ、ガンズに乗せて歌ったり、ドリーム・シアターの「プル・ミー・アンダー」に乗せて歌ったら喜んでくれて。

―― なるほど～。ちなみにドリーム・シアターあるあるとは？

確か＜間奏の間、ヴォーカル1回ハケがち＞だったと思います。あるあるに乗せて歌う曲って、中学・高校で浴びるほど聴いてきた曲で、それが恩返しをしてくれた、助けてくれたという。

―― 当時、繰り返し聴いて体に染み込んできたものが、しっかり財産になっていたということですね。

そうですね。小学校のときに聴いていたのは80年代の歌謡曲だったので、それに乗せて歌うとか。あのときに苦労してラジオを合わせてテープで録音していた曲たちに、今助けられている。

―― 不躾な質問なんですけど、ネタってどれくらいでできるものなんですか？

言われれば……例えば“手ぬぐいあるあるありますか？”って聞かれたら“あります”って言って、曲を歌い切る間になんとかひねり出すって感じですね。けっこう即興で返してます。

―― あれ、即興なんですか！

曲はずっと聴いて覚えているから、曲に乗せながら頭のなかで手ぬぐいの情報を検

Information

歴代“メタルRG”が顔を揃える［METALUALU IITAI］Tシャツが発売中！

ギターやベースを持ったロックなRGが全面にプリントされた、オリジナルTシャツが発売中だ。どんなライヴに着ていってもインパクト大につき、ぜひこのシャツを着用して、観たバンドのあるあるを考えてみよう♪ 9月末までの限定アイテムにつき、下記サイトへ急げ！

購入はこちら
オンデマンドTシャツ・サイト［TOD］
https://t-od.jp/index.html

索してる感じですかね。手ぬぐいあるある……<裾、糸クズ出がち>……とか。

―― ダハハ！　メタル、歌謡曲問わず、こだわった選曲やテーマではマニアにはウケつつも、逆に大衆には伝わりづらいというジレンマもあるのでは？

それはDJと一緒で客層を見ます。メタルが好きな人だったらメタルで返すし、K-POP好きな人たちだったらK-POPに乗せたり。だから幅広く音楽を聴いて覚えておこうっていうのはありますね。

―― またバンドにおける曲と、芸人におけるネタって、同じようで違うものなのかなと。曲って何度も披露しますけど、ネタとなるとそういうワケにもいかないような。

何回も見たいネタってありますけど、ネタバレしたらダメなネタもありますしね。どちらかというと、ネタはドラマや映画に近くて、曲はギャグとかに近いと思います。

―― コマネチなら、何回も見たい的な。

はい、この曲なら何回も聴きたい、という。ギャグとかスベらない話に近いかな。あるあるの場合は即興性も大事にしていて、自分のやっている曲に乗せたあるあるネタは、フリースタイル・ラップに近いかなって最近うっすら思っていて。

―― ライヴでもCDどおりにプレイしたい人もいれば、毎回アドリブをする人もいます。これがネタの場合、RGさんはどうですか？

僕はその場で変えたい人ですね。よく言えばジャズみたいな。これは本当にタイプによってで、緻密にネタを書いてそのとおりにやる人もいれば、ある程度流れだけを決めてやる人もいる。お客さんもあのときのネタが見たいという人もいるし、いつもと違う展開でおもしろかったと言ってくれる人もいるので。そのあたりの"読み"は、上に行く人たちはスゴいですね。これはレスラーもそうですけど、お客さんが喜ぶことを読むのに長けているのが上の人たち。

―― そうなると、配信や事前収録など、お客さんの反応が見えづらいステージでやるのは難しいものなのでは？

やっぱりお客さんの前でやってないと、腕は落ちると思います。ほかにも音響さんや照明さんといった当たり前だと思っていたことが、実はスゴかったということもわかってきたり。ただ逆に今の状況を利用して、無観客でしかできないことをやったりとかもしていて。

―― そのあたりは、アイディア次第ですね。さて今回話を聞いて、素直に楽しんでいたものが、のちに本業で生かされるって素晴らしいなと感じました。ただそうなると、趣味が純粋な楽しみではなくなってしまうのかも知れず、そのバランスのとり方は難しそうです。

それはもう趣味だと思わないことですね。仕事だと認識する。趣味を趣味でやっていたら、やっぱり仕事にはならないです。例えば『アメトーーク』にベース芸人として出るとなったらある程度練習しますし、スニーカーの番組が始まるぞとなったらスニーカーの勉強をしますし、買ったりと投資もしますよね。

―― やはり、プロのレベルで仕事をするのであれば。

よく"趣味を仕事に"って言われますが、自分としては"仕事を仕事に"って感じです。これは昔、木村拓哉さんが『MEN'S NON-NO』で言っていたんですけど、"真面目が一番カッコいいよ"って。結局は、趣味も仕事も真面目にやるやつがカッコいいって。それを信じてやっています。

―― では、今はメタルを聴くときも仕事の耳を持って？

そうですね。いつか世界でドラゴンフォースが流行ったら、それに乗せてあるあるを歌うぞと（笑）。なんとなく聴いていることも、すべては仕事になると思って……案外趣味じゃないですね、全部。

―― TVで"ドラゴンフォースあるある"聴きたいですね～！

今"あるあるメタルオールスターズ"というバンドもやっているので、今度はメタルを仕事にしていきたいと思います！　いつかは『METAL HAMMER JAPAN』の表紙も取れるように（笑）！

KEEPING OURSELVES

TOWARD THE METAL!

MARY'S BLOOD

Interview & Photo by Takahide"THUNDER"Okami

EYE × RIO

Mary's Bloodの6枚目となるスタジオ・フルレングス作は、その名も『Mary's Blood』。
セルフ・タイトル作というだけでも期待は募るばかりだが、
EYEとRIOの"Maryらしいメタルを"という言葉から、その期待は確信へと変わる。
つまり本作は、現在の彼女たちそのものと言えるほど純なメタル・アルバムになったということだ。
当コロナ禍においても立ち止まらず、行き着いた先にある進化のメタル・サウンド がここに!

『Mary's Blood』
9月29日発売　徳間ジャパンコミュニケーションズ

通常盤（CD）
TKCA-74966

限定盤（CD＋フォト・ブック）
TKCA-74965

自分が歌うための
音でもあるので、自分が
いいと思うほうがいい。――EYE

――今回はヴォーカリストとベーシストという対談ですが、この組み合わせは珍しいものですか？

EYE　頻繁にはないですね。

RIO　たまにあるくらいで、8回に1回くらいかな。仲はいいんですけど！

EYE　プライベートでは、一緒にバレーを観ることもあったりして。

――なんと、意外にもスポーツ観戦が共通の趣味でしたか。

EYE　私はルールもよくわからない感じなんですけど、RIOちゃんの熱量がめちゃくちゃスゴくて、引っ張られていくうちに楽しくなって一緒に観てますね。

RIO　学生時代バレー部だったので、今でも大好きなんです。あと、私たちは美容室が一緒で。

EYE　そうなんですよ。今回私は新作のタイミングで青髪にしたんですけど、ここまで濃い色を入れたのは初めてで。根元からガッツリ色を入れたかったので、RIOちゃんに"どこかいい美容室ない？"って聞いて。

RIO　美容院を紹介したら、私が行った日とたまたま同じで。隣でずっとブリーチをしてたよね。私のほうがあとから入ったのに、先に帰りましたから（笑）。

――バンド・メンバーという視点で見た場合の、パート以外での役割というと？

RIO　EYEちゃんはミキサーがいじれるので、音のバランスはけっこう細かくやってくれますね。うちのバンドは同期が多いので、音のバランスがけっこうシビアなんです。自分たちでのリハのときは、それを彼女がやってくれたり。

EYE　同期の操作自体はドラムのMARI

NICE
1986
BAKED
BEANS
in tomato sauce

曲を聴く前にワクワクする
タイトルっていったら、
これに敵うものなんて
ないじゃんって。
EYE

がやっているんですけど、ミキサー卓側でのレベルを私が見て“何デシ上げて、下げて”と伝えて調整して。みんなは楽器を弾いているから“聴くのは私しかいないじゃん”とやってるうちに覚えてきたんですよね。最近は“右側のギターのオブリだけちょっと上げて”とか、細かいところまでいけるようになってきて。

RIO　“ここのドン！の音だけヌケるよね”とか。音源だと馴染んじゃうんですけど、ライヴだとどうしても目立ってきてしまうので。

EYE　ちゃんと教わったわけじゃないので、正しくできているかどうかわからないんですけど（笑）。でも自分が歌うための音でもあるので、誰がいいというよりかは自分がいいと思うほうがいいんでしょうね。

――むしろ、それこそが正解である気がします。RIOさんはというと？

EYE　RIOは“かけ声系”のコーラスをやってくれるんですけど、もともとバレー部で腹筋がしっかりしてるんで、声がすごく通るんです。だから声もヴォリュームを下げるんじゃなくて、EQでいいところだけをちょっと下げるみたいな。

――部活で鍛えた発声という（笑）。

RIO　バレーだけは真面目にやっていたんで（笑）。

――ここ1年以上、どのバンドもライヴができなくなったという大きな変化はありましたが、そのほかの音楽的活動となると、さほど変わらなかったというミュージシャンも少なくないようです。Mary's Bloodの場合はどうでしたか？

RIO　確かにライヴという面では悔しい思いもたくさんしたんですけど、何かが大きく変わったかというと、実はそうでもないのかなとも思っています。

EYE　私生活的には変わってないよね。強いて言えば、お客さんが目の前にいない状態での配信ライヴは、慣れていないことへのチャレンジではありました。“オープニングとエンディングには映像がいるんだ”とか“ライヴの登場SEと配信される方のオープニング映像をシンクロさせるにはどうしたらいいのか”とか、映像関係の勉強をし始めたりスタッフさんと話し合ったり、今までにない経験はしましたよね。

――作曲作業や楽器を触る時間が増えたということは？

RIO　それも確かにありましたね。ベーシ

ストでもギターがわからないとちょっと不便だなと思って、ギターの練習もし始めたり。あと、三味線も今年始めたんですよ。

——おぉ、なにゆえ三味線！？

RIO 単純に私が青森県出身なんで。

——やはり、青森県人としては三味線が弾けないとダメであると。

RIO ベーシストとしてやらないといけないのはギターで、青森県民としてやらないといけないのは三味線……という私の使命感ですね（笑）。

——メンバー間でのコンタクトに不便はありませんでしたか？

RIO うちのバンドって10年ぐらいやってきたので、普段から頻繁にコンタクトを取るような感じではないんです。だから特に不便はなかった気もしますけど、セットリストとか直接会わないと決めずらいこともあって、そこは不便だったかなとは。

——作曲や編曲ということではどうでしょう？ “スタジオで合わせて”というバンドもいれば、“データのキャッチボールで”というバンドもいますよね。

EYE ここ最近はデータでやりとりをしていたので、そんなに変わらないかな。例えばベースもMIDIで先に打ち込んでくれているので、こっちでも“もうちょっとこうがいいな”と操作して戻すという方法で意思の疎通が取れていたので。

——ではおおむね支障はなく？

EYE 細かいところ……ドラムのフィルやギターの言葉では伝えづらいニュアンスとかは、スタジオであれやこれや試せたらもっと早く答えが出せたんだろうな、とは思ったりしましたけど。でもなんだかんだ長くやっていると“あのアーティストのこんな感じで”で大体組み取ってもらえるので、そこまでしんどくはないです。

“メタル・アルバムで”というテーマが出て、全員一致でその方向に、と。——EYE

——そんななか、9月末に新作『Mary's Blood』がリリースされます。近年のスタジオ・オリジナル作としては2018年に『Revenant』、19年に『CONFESSiONS』と連続してリリースがあり、2020年のカバー・アルバム『Re>Animator』を経て、今年はまたオリジナル作となりました。前作からの制作プランに、コロナの影響はあったのでしょうか？

EYE 途中でカバー・アルバムを挟んだときは、ちょうどMary's Bloodが結成10周年というタイミングだったんです。それで違うことをやろうかという話になったときに、レコード会社の方が私のアニメ好きだったりコスプレイヤーだったりという趣味を知ってくださって、“そんなに好きだったらメタルのアニメのカバーやったらどう？”と話を持ちかけてくれて。ただこれも一旦はコロナで延期になったんですけど。

——ではカバー作を挟んで、オリジナル・アルバムに戻ってくるという流れも当初のプランどおりということなんですね。

EYE そうですね。『Re>Animator』で学んだものを踏襲しつつ、オリジナルを作ろうという流れになっていますね。

RIO カバー・アルバムを出したあたりで、“これを出したら次はオリジナル”と決めてはいました。世の中的にはまだ混乱していて、未来が見えない状態ではありましたけど……。

EYE 待っていてもしょうがないよねって。“すぐ出さなきゃ！”と急かされている感はないんですけど、しっかり作り込もうと思ったら最低1年はかかっちゃうので、最短でこのタイミングという。

——実際に動き出した時期というと？

EYE 去年末に有観客のライヴがあって、来てくれた方に“私たちの想い、元気づけられるような1曲を届けたいね”という話になり、11月頃に作曲期間を設けたんです。そこでいろんな曲を作っていて、年が明けてやっとアルバムに向けて“じゃあメタルっていうコンセプトでいきましょう”と具体的に話していった感じですね。

——おぉ、アルバムのコンセプトはズバリ“メタル”だった！

EYE そうですね、Maryらしくメタルを。誤解を恐れずに言うと、前作もアニソン・カバーといいつつ、原作・原曲のポイントは押さえながらメタルの要素も入れて、メタル好きなMaryを好きでいてくださる方に“そっちにいったわけじゃないんだよ”というのを示したくて。それでミーティングで“メタル・アルバムで”というテーマが出て、全員一致でその方向にいきましょう、と。

——メタル・ファンにとっては心強い宣言ですね。

EYE 年末にやった新曲（「アフタービート」）はポップめだったんですけど、私自身メタルというテーマでいきたいと思い、その曲を省いて全部書き下ろしで作ってみたいな。

——またバンド名を冠したアルバム・タイトルになっていることも注目ポイントとして挙げられます。どのバンドも一度しか使えないネーミングということもあり、このあたりからは並々ならぬ決意も感じられるのですが。

RIO リーダーのMARIが“Mary's Bloodがいい！”って力強く言ってくれて。普段はタイトルにそんなに意見を出すほうじゃないので、リーダーがそう言うなら！という感じでもあり。

——ある意味、手に取る側にとっても“ここぞの一枚になったんだろうな”という期待度はアップしますよね。ご自身的にも、セルフ・タイトル作にふさわしい楽曲がそろったと！

EYE そうですね！ ほかの案を考えてはみたものの、これに勝てなかったんですよ。そのアルバム名を見て、CDを手に取って曲を聴く前にワクワクするタイトルって言ったらこれに敵うものなんてないじゃんって。

——そんな同作ですが、8月上旬の現在（※取材時）はまだ作業中となっているようです。レコーディング自体は7月中に行なったそうですが、このペースはいつもどおりという具合ですか？

EYE わりといつもどおりだよね。

RIO そうですね、私たちは短期集中型な気がします。

EYE コロナになる前も“この日からこの日までに、それぞれ何曲か作ってこよう”みたいな目標を立て、そこからアレンジの期間を設けて、レコーディングも日程を決めてその期間にしっかり仕事を終わらせるという風にやっていたんで。今回も各メンバー別々で、スタジオも密にならないように日をズラしながら同時進行でやっていたんですけど。基本的な進行はそんなに変わってはいないですね。

——楽曲としては「Without A Crown」や「Joker」といった、7弦ギター&5弦ベースによるハードかつヘヴィな部分が光る曲が並んだなと感じます。このあたりは、“メタルというコンセプト”どおりと言えそうです。

EYE 私が作詞作曲をした「Joker」は、土台になる部分を昔から作っていたものなんですけど、「Without A Crown」を聴いた

あとに何かほしいと思って、昔の素材を引っ張り出してきてアレンジしてみたんです。

――ヘヴィでありつつも、少しハネのあるアレンジがいいフックになっているなと感じました。

EYE　重たいミドルの曲で、おどろおどろしい雰囲気もありつつ、ちょっと飛び道具系な曲が欲しいなと思っていて。メタルといっても方法はいろいろあるじゃないですか。"自分たちにできること＋いいとこ取り"……全部乗せみたいな（笑）。結果、バランスもいいんじゃないかなと。

――ヘヴィなリフがあり、インスト・パートには「小フーガ」的なメロディも挟んで、そこからギャップを出したベース・リードが入ってくる……など、各所に聴きどころが用意されています。

EYE　最初の段階から"ベース・ソロだから、ゴリゴリのジャリジャリでお願いします"ってデモを渡していて（笑）。

RIO　マジか！って(笑)。それでEYEちゃんが打ち込んでくれたフレーズも使って弾いてみたんです。

――アクティブ回路らしい、硬い音がいいですよね！

RIO　そもそもはパッシブ前提のベースだったんですけどアクティブ化していて、足下とアンプを通過して、アンプ・シミュレーターもかけているんです。結果、カッコいい音になって良かったです。

性格がストレートだから全部ストレートに出ちゃう(笑)。――― RIO

――「Joker」や「Without A Crown」などB音が軸になるヘヴィ系の曲だと、ヴォーカルも低音感を主張することになりますが、これはもう慣れたものと言えますか？

EYE　そうですね。私はそんなにハイ・トーン系が得意ではなくて、どちらかというとパワー系のほうが自分の持ち味を出しやすいタイプなので。「Without A Crown」はAメロとサビで1オクターブ違うんですけど、どっちも自分の色を出しやすいので問題はなく。

――逆に「Let Me Out」は高い音がよく鳴っている曲ですが、こちらは？

EYE　key的には歌いやすいですね。声の鳴らし方、表現の手法を変えれば、どんなテンションの曲だろうがハマらないものはないので。むしろ、今回はメンバーが各々作詞をしているので、その言葉や世界観を歌うというのがチャレンジでもありました。

――これまでは自分の詞で歌っていたところ、今回はメンバーの世界観に入って歌うという。

EYE　今までは"こういう曲調なら、こういう歌詞だろう"という先入観があったところに、"あ！　もうちょっとあるんだ"と世界が広がったというか。歌録りをしているときも"こういう気持ちだったら、こっちのほうがいいのかな"って。

――RIOさんが作詞作曲を担当した「ignite」は、まさに発火するかというフレーズでスタートします。本曲の着想はどういったところから？

RIO　もともとのテーマは"ドラゴン"なんです。私はゲームが好きで『パズル＆ドラゴンズ』に激ハマった時期があって、それに出てくる赤ソニアという龍喚士をテーマに作ったんです。だから仮タイトルがソニアで（笑）。ただ、そのソニアはいいドラゴンなんですけど、私の書いた歌詞は悪いドラゴンで人を喰うみたいな。だからはじめは"血肉"とか"首を跳ねる"とか書いていたんですが……まぁ、最終的な歌詞はだいぶキレイにしたんですけど（笑）。

EYE　私も脳内ファンタジー系なので、最初はバリバリに殺す気満々で歌うつもりだったんですけど、最終版の歌詞のほうがリアルな文字よりも想像力を掻き立てられるようになったので、作品としてレベルアップしているなって。

RIO　性格がストレートだから、全部ストレートに出ちゃうもので（笑）。

――ギターから作っていくんですか？

RIO　この曲はドラムから作りました。そしてリフのパターンを決めてから上モノを乗せていく感じです。ちなみにこの曲はベースが最後。

――自分の曲だと、ついついベースを目立たせちゃったりなどあるものですか（笑）？

RIO　自分の曲のほうが簡単にしますね。メンバーの曲のほうが頑張ります。ベーシストにはそういう人が多いんじゃないかな。

――サビへの導入となるグリスからは、ベーシストの隠れた主張を感じました。派手に目立てばいいってわけではないという。

RIO　そうですね、そういうとこで"いますよー"って。だから隙間探しやおいしいところを探すのはうまいかもしれないです。

――EYEさん作曲の場合、ベーシストにリクエストをすることとは？

EYE　ベースがRIOちゃんになってから、任せている気がします。Maryよりも前にやっていたバンドやセッションのときは、結構口うるさいんですけど、RIOちゃんは自分のなかにないセンスを持っているので、これは何も言わずに渡したほうがいいなって。

RIO　マジ!?

EYE　私的にはベースが好きに動いている曲が好きなんで、"ジャリジャリのゴリゴリで"程度しか言ってないですね。音さえはずさなければ大丈夫（笑）。

――逆に、RIOさんの楽曲で、ヴォーカルにリクエストを出したりは？

RIO　歌はないんじゃないかな……ないですね。

EYE　歌のとき、RIOもレコーディングしたよね。

RIO　そうそう、「ignite」にうちの声が入っているんですよ。ちょっと探してみてください。

EYE　そこのテンションだけ、私がつかめなくて。今回は歌詞もRIOちゃんが書いているじゃないですか。言葉のハマり方とかテンション感がわかるように、本人が仮歌を録ってくれたんですね。私はそれを聴いてレコーディングに挑んだんですけど、いろいろな要素が詰まっていて……"ここ喋るんだ"とか"ここコーラスだったんだ"とか。そこまで考えていたからこそ私もそのとおりにやるつもりだったんですけど、1ヵ所だけどうしても違うところがあって、そこは本人に。

――ぜひ、音源を聴いて"ここか！"となってほしいですね。

RIO　そうですね。だからここではどこだかは言わないでおきましょう！

ネガティブも一周まわるとポジティブになる。――― RIO

――オリンピック／パラリンピックが終わったのちも、残念ながらすぐに状況が好転するとは思えません。そういったなかでのリリースとなる『Mary's Blood』ですが、本作でファンの方にはどういったことを感じてもらいたいですか？

RIO　単純に楽曲を楽しんでいただきたいというのはもちろんですけど、すごくネガ

ティブになっている世の中でも、そのネガティブも一周まわるとポジティブになると思っていて。やまない雨はない……というか、いつかまた前みたいにライヴができるようになるよ、という気持ちも感じてもらいたいですね。

――改めてメタルにベクトルを向けたサウンドが、聴いている人の気持ちを一周まわすための機動力になるといいですよね。

RIO　私、本当は"原点回帰"ってキライな言葉で。便利な言葉だなとは思うんですけど、私には退化の言葉にも感じられて。私はコロナ禍でも前に進まなきゃいけないし、進化しないといけないと思っていて。『Mary's Blood』は進化なんだと、これらの曲を聴いてもらえればそれがわかってもらえると思います。

EYE　自分の軸をブラさないという意味での初志貫徹……その気持が内容にもしっかりと反映されているはずです。今のメンバーそれぞれのリアルな気持ちが入っているので、全曲歌詞を読んでもらえたら、どこかで自分とシンクロする曲が出てくると思います。それで元気づけられるきっかけになればうれしいので、じっくり聴いてほしいですね。

RIO　ベースに関しては、正確に弾けているテイクよりもノリがいいものをセレクトしているので、ライヴ感ということに関しても、もしかしたらほかのアルバムよりもあるかもしれないです。

――本作でライヴのノリも楽しんでくれ、と！

EYE　ですね！　今回は"かけ声系"を入れていないんですけど、「Joker」では手拍子が入っていたりノリのいいビート感になっているとか、難しいものはあまり入ってないんですよ。今まだこんな状況でも絶対帰ってくるので、いざライヴに行くそのときのために、楽しみ方をいっぱい妄想しておいてください。その日に向けて今を乗り切ってほしいし、元気でいてほしいです。

RIO　"体に気をつけてね"というのはもちろんなんですけど、さっき言ったとおり"原点回帰という名の進化"をしたことで、できることもたくさん増えました。ただ時間だけが流れたわけではないので、その辺をちゃんと聴いていただけたらなと思います！

EYE　また会いましょう！

RIO　あと、そろそろ『Mステ』に出たいっ（笑）！

RIO

私はコロナ禍でも
前に進まなきゃいけない、
進化しなきゃいけない
と思っていて。

取材：岡見高秀
35 周年アーティスト写真
撮影：堀内亮（CABRAW）
デザイン：土屋英俊（SOIL DESIGN WORKS）
黒ミサ写真：今元秀明

デーモン閣下、悪魔式ヘヴィメタルを大いに語る!

聖飢魔Ⅱ

35thイヤー継続中の聖飢魔Ⅱから、いよいよその頭目、デーモン閣下が登場だ。本邦の"ヘヴィメタル観"を作り出したバンドのひとつである聖飢魔Ⅱだが、活躍の場は日本だけにとどまらず、web時代とも相まって、世界広域にてその存在感を示している(地球を征服しているのだから当然である)。90年代から海外でもその邪悪なるサウンドを鳴らしてきた聖飢魔Ⅱの音楽を、現在の閣下はどのように分析しているのだろうか。

そして、これまでの構成員インタビューからもその端々が伝えられてきた新譜についても、新たな話が聞けたとか、聞けてないとか……。今秋執行される《ヴィデオ＆変異生黒ミサツアー》を前に、デーモン閣下が悪魔式ヘヴィメタルを大いに語る!

口からは“非常事態宣言”って言い慣れているそっちを言っちゃたりな（笑）。

──閣下、我々『METAL HAMMER JAPAN』は英国に本拠地があるメタル雑誌で、本国編集部ともやり取りをするんですが、そこでの会話のなかからも、聖飢魔Ⅱはヨーロッパ圏での知名度や人気が高いように感じます。

最近だと米仏韓、その前はスペインと英国だな。聖飢魔Ⅱは音楽的にロックンロールじゃないし、海外といってもアメリカでバカウケするようなカラッとした音楽ではないからな。往年のプログレッシブ・ロック的なアプローチの曲とかもあって、複雑なことも好きだし（笑）。

──確かにそういった点からも、よりヨーロッパでの反応がいいのかもしれません。

インターネットの時代になってから、かつての映像などが急激に手軽に観られるようになったので、今まで我々のことを知らなかったものの、ここ15年くらいで知ったという人がいっぱいいるみたいだからね。

──ヨーロッパでの活動と言えば、魔暦前8（1991）年の黒ミサがまず挙げられます。大教典『LIVE! BLACKMASS IN LONDON』、活動絵巻教典『実録！　欧州非常事態宣言』として発布もされています。80年代ではラウドネスの映像作『EUROBOUNDS』が有名ですが、90年代初頭、日本のバンドで海外でのライヴ作を出すということは少なかったことと思います。

アレは実は“なりゆき上”の作品なのだな。スペインのほうはNHKのBSの番組が主催するジャパン・フェスティバルみたいなものがあって、そこで日本の現代文化を紹介する一貫で聖飢魔Ⅱが出演した。だから黒ミサの映像自体はNHKの放送を借りる形になったのかな。それで、せっかくスペインに行くんだからほかの映像も撮っちゃおうということで、屋外ロケみたいに街のなかを歩いたり寺院に行ってみたりってのを自分たちで撮った。

──ほうほう。『LIVE! 〜』はロンドン公演の音源であります。

ロンドンでは「正義のために」のMV撮影をしたんだけど……結局そのヴィデオをセビリアではなくロンドンで撮ろうとなったのには何かの理由があるんだけど、あまりハッキリとは覚えてないな（笑）！　で、ロンドンでMVを撮るからついでに黒ミサもやっちゃおうよ、となってだな。

──そういう順番になるんですか。

黒ミサとMV撮影の順番は逆かもしれない……忘れた（笑）。で、地元バンドのオープニング・アクトという形で出ることになったと。ただ、そのときは超アウェイだったな（笑）。メインはややパンキッシュな雰囲気のバンドで、もちろんその日の客は彼らを目的に観に来ているから、わけのわからん東洋からの“?”なヤツらがオープニング・アクトでまったく知らない曲をやったりしてさ。激しい曲をやっているときはノッてるヤツもまあまあいるんだけど。バラードなんかをやっちゃった日にはもうブーイングがくる状態。“そんな曲やってんじゃねー！”って（笑）。

──選曲自体は、各曲調まんべんなくという感じでしたから。ただ音響は現地のスタッフだと思いますが、音の感じは日本でのそれとは全然違いますよね。

そういう音作りをするエンジニアだったんだろうな。現地の機材を借りているから構成員も思った音が作れたのかはわからないけど、表の音（※客席側に出ている音）がものすごいカタかった……高音と低音が極端に大音量だったということは間違いない。しかしながらバラ（※ひとつひとつの音を別トラック）で録音をしているはずだから、作品に影響するのかな……まあしたということだな。

──海外での黒ミサということを意識して、日本側スタッフも教典化するにあたりその点を加味したのでしょうか？

それは違うと思うな。それぞれの楽器をバラで録っているにしても、空間の音も録っているじゃないか。それをあとで混ぜることを考えると、双方が著しく違うとおかしいからとかあったんじゃないか。

──確かにそれはありますね。ただ、結果的には非常に硬質であり、メタル・ファンにとってはかなり刺激的な一枚になったと思います。

それは我々もそうだし、日本の信者たちにとっても新鮮な音だったと思うな。

──ちなみに完全に蛇足的な話ですが、昨年政府から“緊急事態宣言”が発令されたとき、聞き慣れない言葉とともに“欧州非常事態宣言”とかぶったものです。

うん、全然関係ないな。ただ吾輩も、今回のコロナ禍で緊急事態宣言っていう単語を聞いていても、口からは“非常事態宣言”って言い慣れているそっちをつい言っちゃったりね（笑）。

向こうのグループでは習得が難しい視覚的なことを盛り込んでみようと。

──これはヨーロッパだけの話ではありませんが、閣下の英語を操る能力に長けているということは、海外での活動で非常に重要になのではと思うのですが。

うーむ、どっぷり向こうに住んで、向こうで教典を発布してっていうのを長年続けていたらとても重要なファクターになるだろうな。もちろん、そのときどきで英語圏に行けばそれなりに便利だけど、今は回数が多いわけではないからな。でも不思議なことに魔暦前8年もさることながら、再集結25周年でパリとアメリカのダラス、韓国でやったときは……パリとダラスに関してはジャパン・フェスティバルみたいなもののなかで出たんだけど（《JAPAN EXPO》と《A-KON》）、日本の文化にすごく興味がある若者たちが集まってくるじゃない。ともすると英語じゃなくて、原作どおりの、日本語で歌っているもともとのほうが好まれるのかもと途中で思ったね。ただこっちは英語や仏語で全部組み立てて来ちゃってるから、もう遅いけど（笑）。

──日本語がいいなら、先に言ってよという（笑）。現在は海外に進出するバンドも少なくありませんが、彼らはそこでグローバルな顔でやるほうがいいのか、日本出身バンドらしさをもっと出したほうがいいのか、悩むところでもあると思うんです。

それは両面あるだろう。そのグループによって客が求めてるものも違うから。BABYMETALは全部日本語でやっているのか？

──歌自体は日本語は日本語のままですが、そもそも短い煽りは英語でやっています。

ああいうアプローチをするヘヴィメタルであれば、日本語のままがいいという顧客のほうが多いんじゃないかなと想像するな。現地語が特に堪能でなくとも通用するやり方を開発したことは感心だ。まぁ、一般論で言うと、普段からゴリゴリのヘヴィメタルやハードロックを聴いている現地の顧客にもウケたいならば、やはり英語はなるべく堪能なほうが便利だろうな。

──日本のヘヴィ系バンドは、そもそも海外の音に憧れてやっている部分があるので、そこで現地のバンド以上に個性を出すのはまた難しいのかなとも思います。

『LIVE! BLACKMASS IN LONDON』は
我々もそうだし、日本の信者たちにとっても新鮮な音だったと思うな。

デーモン閣下

だろうな。ただ我々が向こうに行ったときに音楽的な部分で何か変わったことをやったかというと、そんなことはないんだが。でも例えばステージの上で書道のようなパフォーマンスをやったりとか、日本舞踊とか向こうのグループでは習得が難しい視覚的なことを盛り込んでみようとは思ったけどな。もし今後ヨーロッパやアメリカで音源を出したり配信するときには、ちょっと和風の音を入れるんじゃないかな。歌詞を英語にした『悪魔 RELATIVITY』は世界20何ヵ国で発布されているけど、そこでも能や雅楽の音を入れたような気がするな。我々だったらヨーロッパ人やアメリカ人にできない、そういうアプローチをやろうとするだろうね。

――はやり、世界的に活動するならばそういう要素は必須ですか。

必須なのか……まあ、入れたほうが個性は出るだろうね。でもただ入れればいいかっていうとそういう問題でもなくて、それがイケてないとダメだから（笑）。

――確かに。まぁ、聖飢魔Ⅱはどこにいても常に個性的ですから、ヘンにその辺を意識する必要もなさそうですが（笑）。

ハハハ、まぁそうなるかもな。ただ、さっきのスペイン、ロンドンとは別のときにニューヨークで教典ジャケットの撮影をしたんだが、通りかかる人には“Japanese KISS！”と言われたからね。やっぱり外見的には、特にアメリカでは“キッスのマネをしてるヤツらだろ”という雰囲気は持たれがちだったから。音楽性やメッセージ性、生物的分類は全然違うんだけど。

当時のメタル・バンドには自分たちなりの様式美があった。

――さて、現在は35周年の延期期間中ということになり、まさに悪魔にも想定外のゼウスの大妨害です。35周年にあたっては、30周年のときとはまた違うテーマをお持ちだったのでしょうか？

まさにこれから“過去の再集結時と違うどんなアプローチをしようか”を深く考えようというときに、新型コロナの時代が始まってしまったのだ。そもそも秋にツアーなんて無理だろう……ってのが、もう夏前には我々の間では話題になっていたから。

――考える間もなくという。

25周年も30周年も、我々にとってはかなり新しいことをやってきていたから、35周年も期待されるんだろうなとは思いつつ、一方では普通でもいいんじゃないのとも思ってて。

――毎回趣向を凝らして……ではなく、“普通の聖飢魔Ⅱ”が観たいという気持ちもすごくわかります。

そうなんだ。好きなアーティストのコンサートに行って、ニュー・アルバムを出したからってその曲ばっかりやられても、ちっともおもしろくないもんね（笑）。

――“新譜あるある”ですね（笑）。現在の活動タイミングはピンポイントではありつつ、20世紀中の“本活動”時代よりも期間は長くなってるのは感慨深いです。例えばギター・コンビでも、トリプル・ギター期を含めると＜ルーク篁＆ジェイル大橋＞は＜エース清水＆ルーク篁＞よりも長くなっているという。閣下から見て、この期間で＜ルーク＆ジェイル＞コンビに変化はありましたでしょうか？

まあ、それなりに。この場合は、基本的にはエースが弾いていたものをジェイルが踏襲して弾くっていうパターンから始まったのだね。そのことが新鮮と言えば新鮮だし、違和感があると言えばあるし……みたいなところからスタートしてるんだが。ただこれが25周年、30周年とやっていくうちに違和感はもう感じなくなって、むしろかなりオリジナルなリードやバッキングを弾くようになってきたことをおもしろいなと感じるようになってきた、吾輩は。

――それは信者の方も同じかもしれません。

そうだろうし、いまだに違和感を訴え続けている人もいるだろうし。“やっぱりこの曲はエース長官に弾いてもらいたいな”というコメントは定期的に読むからな（笑）。

――とは言え、当然バンドが動いていれば構成員にも変化は起こるものであり、それは今の聖飢魔Ⅱにも言えるのでは？

やはり、5名のうちの1名変わるということは20%が違うわけで。20%違うって

いうのは、バンドとしては大きなことで。聖飢魔Ⅱという同じ集団ではあるけれども、ある意味新体制での新しいユニットという捉え方もできる。同じことは絶対にできないんだから、新しいアプローチの仕方で音作りをする……という考え方になってきているわな。

——逆に、解散前からの信者やファンが違和感を感じないように、ということも意識はするものですか？

場面場面による。例えば黒ミサのオープニングで多く使われる「創世紀」のときは吾輩が棺から出てきて、1曲目が「地獄の皇太子」や「THE END OF THE CENTURY」で始まる……その場面はまったく変えるつもりはないというか、イメージどおりのことをやろうと心がけているな。一方で「蠟人形の館」が始まる前の語りの部分は、どんどんネタになってきている。だからもう古典じゃないんだよね。ある意味飽きたというか（笑）。それこそフランスとか韓国に行ったことがすごく大きくて、その部分を全部フランス語や韓国語でやって、ヴァリュエーションが増えたんだね。で、日本でやるときにもわざわざ仏韓語で喋ったり。

——それをゼノン和尚が通訳するとか。

インチキな訳のな（笑）。

——「蠟人形の館」はこれまで何度も観ているという信者も多いでしょうから、そういうアレンジも楽しめるのではないかと察します。

そう、あんまり批判を受けないんだ。そのセリフについて“もっと真面目にやってください”、とか聞かないからな。

——その投書があったら、古参中の古参でしょうね（笑）。変えるつもりがないという“「創世紀」からの「地獄の皇太子」”は80年代シアトリカル・メタル的な部分が強く出た流れでもあり、メタル・ファンにはうれしいところだと思います。

当時のメタル・バンドはそれぞれ王道の登場の仕方とか、自分たちなりの様式美があったからな。ジューダス・プリーストならバイクに乗ってくるとか。ただ、オープニングがすごく変わっているグループはそんなにたくさんいるわけじゃないのか。

——その点、聖飢魔Ⅱの“モヤにまみれた棺から出てきて、スピード・チューンの「地獄の皇太子」でショウが始まる”という演出は、“ヘヴィメタルの世界観”に一気に引き込まれますよね。“今日は日常じゃない”というスイッチが入るというか。

大体において速い曲から始まるもんな。ただそれを、あえて裏切ったりもして。特に30周年のときは《全席死刑》と《続・全席死刑》という2種類のツアーをやったけど、《続～》のときは「エガオノママデ」（12/8のスロー・テンポの曲）だったから。

——いい意味での裏切りですね。

そうだな。どこのグループもそうだろうけど、“普通こういう選曲をするよな”という15～20曲を並べがちなわけだ。そうすると再集結する度にいつも同じ曲になっちゃう。30周年のときはほかにも聴かせてやりたい曲がいっぱいあるってところから、ツアーを前半と後半に分けて、こっちでは本活動時代の前半の曲しかやらない、こっちでは後半の曲しかやらないというリクエストを取ることにした。するとおもしろい投票の結果が出たんだな。特に後半のツアーはかなり新鮮な曲の並びになって。

——自分たちにとっても新鮮であるという。

そのときはうまくいったなと思ったんだが、じゃあ35周年も同じことやる？ってなると……ね。それで35周年はホールを周る本ツアーと、年をまたいでアリーナ・ツアーをやって、それがまた今までやっていない新しいことになる計画だったんだが。

——それがコロナで……。

結局当初の計画通りにはやらないことになった。その代わり、今までやったことのない《ヴィデオ黒ミサ》をやって。結果として新しいことが生まれたんだが、“大黒ミサではない”ということはみんなの満足するものじゃないよなってことで、延長して今年の秋に同じような規模のツアーをブッキングしたんだけど、また？っていう状態に今ある、と。

——信者にとっても、悔しい2年であり。

まあそうだろうが、無理なものはしょうがない。批判を覚悟で述べるが、実は今、吾輩は皆が言うほど“悔しい”とは思っていないのだ。経験したことのないたくさんのことを学んだし経験したことのない思惑

少なくとも吾輩の心身のコンディションに関しては、去年よりはいい方向にはたらいたな、と。

のなかにあるし。好奇心としてはおもしろい。ただ、やっぱり去年と同じことはやりたくないので、去年は収録したハードロックの黒ミサと生で構成員が登場してトークをしたところを、今年は生演奏をやろうということで、今の段階では準備をしている。

——ヴィデオを観つつ、途中で本演奏があるという？

途中かどうかはわからない。去年はなぜ途中でトークを入れたかと言うと、ヴィデオを全部観終わったあとに生で出てきて40分喋って"じゃあ！"って帰っていくと、コンサートを観に来た印象が残らないではないか？　やっぱり音楽で終わったほうがいいってことで、間に挟んだのだ。今回難しいのが、自分たちも生で演奏するから……選曲にもよるんだが……生演奏を最後に観て帰るほうがいいのか、電気楽器で演奏している迫力のあるサウンドを最後に観て帰るのほういいのかは、まだわからないな。

構成員が生演奏をするとちゃんと聖飢魔IIになるんだなと。

——さて、ほかの構成員の方の言葉からもその端々が聞こえているように、現在は新作にも着手されているようですね。もしもオリジナル・スタジオ・フル大教典ということになれば、『LIVING LEGEND』（魔暦元年／1999年）以来だと言えるのでは。

まあ、そうだな。厳密に言うと『悪魔RELATIVITY』はフルで録音してるので、セルフ・カヴァーを含めればそれ以来ということになるな。どの曲もオリジナルの大教典となると……いや、そもそも大教典を出すとは言ってないだろう（笑）！

——あ、それは失礼いたしました！

正直、まだハッキリはしていないんだな。曲を作っていることはちょろっと言ってるんだが、何曲ぐらい作る？　誰が作る？とかはまだどこでも言っていない。今の段階から言っていると、"なんで新曲やってくれないんですか？"という者も出てくるからな。

——確かに。そもそも、20周年での再集結にあたり新たな教典を作ろうという気持ちはあったものですか？

そんなに強い願望はなかったかもしれない。20周年のときも"せっかくだからみんなで曲を持ち寄りましょうよ"という話が侍従たちから出て、"それぞれが好きなように書いて持ち寄ろう"だったから、本活動中のような大教典の作り方にはならなくて。25周年では『悪魔RELATIVITY』があったし、30周年もなぜだかそういう気運は高まらなかったかな。構成員は皆それぞれ"聖飢魔IIではない活動"での光が見えたり見えなかったりの時期だったからね。

——では、35周年のタイミングでは？

今回も、積極的にフル・アルバムに当たる大教典を作ろうと言った構成員や近衛侍従はいなかった。解散後に発布してきた曲が12～13曲溜まっているから、それに新曲を1～2曲つけて"今まで大教典に入っていなかった曲を集めたものにしよう"という話で始まったんだけれど、いつの間にか悪魔教会側から"もう少し多く新しいものを作りましょうよ"になっちゃって。あれ？　いつからそうなったんだっけ？って記憶にないんだけど（笑）。

——なるほど！　……で、どうなりそうなのですか！？

どうだろうかね？　去年から今年にかけてのステイ・ホームが長く続く状態は、アーティストに限らずいろいろな人にも大きな影響をもたらしているではないか。時間があるから今までやれていなかったことができると思いがちなんだが、世の中には逆にやる気が起こらないっていう者もたくさんいて、うちの構成員も過半数はそうだったみたいなんだな（笑）。

——ハハハ、実際にはなかなか活発には動けませんよね。

さっきの"新曲を1～2曲"の話でも、"どうなってる？"って質問しても、"7割くらいのところまでできてるけど……"と言ってから3ヵ月くらい何も音沙汰ないぞ、みたいなことが起きていた。どのくらいのカーブで完成に近づくのかは構成員によって違うんだけども、聖飢魔IIの楽曲を作るという工程は、少なくとも吾輩の心身のコンディションに関しては去年よりはいい方向にはたらいたな、と。

——これは本活動時代もそうですが、出自のヘヴィメタル・タイプの音楽が好きなファンもいれば、バラード系が好きな人、ポップなものが好きな人と、ファン層も幅広いです。そうなると"みんなが求めるも

の”を見定めるのも難しいのでは？

それもそうだし、今はそれぞれの構成員がほとんどの期間で聖飢魔Ⅱではないアーティスト活動をやっているので、さまざま違う方向に進化していたりするわけだ。なので“聖飢魔Ⅱの曲ってどうやって作るんだ？”っていう構成員が多かった。例えば吾輩も、この期間に自分で作ったハードロックはそう多くはないのだ。例えばアンダース・リドホルムが作ったり編曲したりのゴリゴリの曲はいっぱい歌ったけど、吾輩が作曲したのは数曲だから。「Forest Of Rocks」も「時空の迷い人」も、石垣愛やアンダースがアレンジしたからああなっているけど、聖飢魔Ⅱ的ではないし歌メロ自体はかなりポップ。

――常に進めている活動のほうが、主軸にはなってきますよね。

それは言葉もそうで。なんの縛りもない聖飢魔Ⅱの歌詞を書くというのは実は非常に難しくて、今期一番最初に書いたものは、聖飢魔Ⅱからかなり遠い歌詞になったからな。いきなり殺気立っているような歌詞って、そう簡単には思い浮かばないだろ（笑）。

――確かに日常生活では、そうそうそういう状態にはなりませんから（笑）。

しかもそういうことって、表に出かけることによって起きるじゃない？ “なんだコノヤロー！ なんだその運転の割り込み！”って。特にロックって、怒りがないと作りづらい。みんなそうやって始まっているわけだろう？

――そもそものパンクやメタルは、怒りが原動力なはずですから。

なんらかの不満があるから、若い者がギターを持って叫んでスタートするわけじゃない。でもこのダラダラした身近で中くらいの怒りのない生活のなかで、5年・10年ぶりに聖飢魔Ⅱの歌詞を書けよって言われてもそりゃ……ねぇ（笑）。

――つまり我々は、閣下のまわりでムカつくことが起こるよう祈らなければならないという……（笑）。

そう、いい曲を聴くために（笑）！ そうは言っても、やっぱり徐々に激しい曲も書けるようになっていったがな。先日選曲会議があって、吾輩が書いた激しいんだけど自分のなかではランキング最下位の曲が“この曲がいい、入れたい”となって。なんで入れたいんだろう？と非常に疑問だったんだけれども、レコーディングで構成員が生演奏すると、ちゃんと聖飢魔Ⅱになるんだなってことがわかった。今はコンピューター・プログラミングでも充分ヘヴィメタルな音になるけど、バンド・サウンドは打ち込んでもダメなんだなと改めて思ったな。ああ、これ聖飢魔Ⅱだわって。

――それこそ、各構成員の個性や熱が乗ってくるわけですよね。

例えばリズム体には当然手癖があるじゃない。そのフィル・インが“聖飢魔Ⅱだわ、これ”っていうものになるんだな。ベースもピッキングの設定で打ち込んでるんだけども、ゼノン和尚は基本指でやるからあまりゴリゴリいってない。だからこそ聖飢魔Ⅱの音になる。

――いつ世に出るのかはわかりませんが、聖飢魔Ⅱらしいヘヴィな曲、楽しみにしております！

今話しても、音は聴けないからな！ こういう話が出たら、“じゃあツアーで聴けるのかな”とか“すわ配信は”と思う者も出てくるだろうな。実際に1曲くらいは配信してもいいかもとも思っているんだが。

――今後の発表を待て、ということですね。

そういうことだな！

――さて、10月からはいよいよ《ヴィデオ&変異生黒ミサツアー『悪チン集団接種』》が始まります。接種者(参拝者)にはどう楽しみ、何を持って帰ってもらいたいですか？

満足して帰ってもらうのが一番だろうな。昨年、収録した黒ミサを上映するという計画が出たとき、それは楽しめるのか？とは思ったんだ。これまでも活動絵巻教典を映画館などで上映したことは何回かあるんだが、吾輩はそんなにいいと思わなかった。でも去年、その理由がわかって。活動絵巻教典は音も絵も自宅で心地よく聴こえたり観られたりする用に編集されているから、大きいスクリーンで聴いてもライヴとはちょっと違うんだ。その点、35周年の黒ミサ用は全部の音をバラで録音していて、PAエンジニアも全会場の音響に合わせてバランスを取る。だから全会場で音がライヴのように違うわけだな。

――通常の黒ミサと変わらない音響作業が入るわけですね。

しかも技術者は曲に慣れていくから日に日にいい音になっていって、“これ本物の黒ミサよりも音がいいんじゃない？”というレヴェル。編集した絵も細かくカット割りしていないし照明も生で入るから、それらも功を奏して臨場感・ライヴ感は“ヴィデオを観てます”って感じではなかった。リハを見たんだが、初めて本物の聖飢魔Ⅱを観た感じがしたからな。そういう点では、今年の《ヴィデオ黒ミサ》も昨年と同じレヴェル……向上心があると仮定するならば、さらにいい音と絵で観てもらえると思う。生で演奏する曲はまだ決まっていないが、去年よりも楽しかったと言ってもらえるものを作ろうとは思っている。

――どういった形になるにせよ、悪魔のメタルを楽しみに待っております！

コロナ禍が著しく終焉に向かうとは思えない今、行く会場、行くことのできる黒ミサの数が少なくて残念だと思う人もいるだろう。ただ今回の《ヴィデオ黒ミサ》は生演奏があるから、回数は少なくなくとも、より深まった一期一会感を楽しんでもらいたいものである！

Previous Issues

＜ルーク篁参謀×ジェイル大橋代官＞によるギタリスト対談は『METAL HAMMER JAPAN Vol.5』に、＜ライデン湯澤殿下×ゼノン石川和尚＞によるリズム体対談は『同 Vol.6』にそれぞれ掲載！ 各セクションならではのトーク・バトルをチェックされたし。

□公演情報《ヴィデオ&変異生黒ミサツアー『悪チン集団接種』》

●10月23日（土）／羽生市産業文化ホール
●10月29日（金）／仙台サンプラザホール
●11月 3日（水・祝）／ホクト文化ホール
●11月 6日（土）／東京ガーデンシアター
●11月14日（日）／ロームシアター京都
●11月23日（火・祝）／静岡市民文化会館
●11月27日（土）／レクザムホール・大ホール
●12月 4日（土）／福岡サンパレスホテル&ホール
●12月 8日（水）／名古屋国際会議場センチュリーホール
●12月11日（土）／札幌文化芸術劇場hitaru
●12月19日（日）／本多の森ホール
●12月26日（日）／広島上野学園ホール
● 1月 6日（木）／グランキューブ大阪

※大阪黒ミサは1日1公演、それ以外の黒ミサは1日2公演を予定
※詳しくは右記HPをチェック！ https://www.seikima-ii.com/feature/blackmass

The latest article from UK

Text by Rich Hobson
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』350

『ブラックウォーター・パーク20thアニヴァーサリー・エディション』
ソニー／SICP-31442

The Prog's Bollocks

オーペス――プログレの戯言

今でこそ、プログレッシブ・メタルの最高峰に位置する彼らであるが、『ブラックウォーター・パーク』を発売する前のバンドは、結成10年を経てなお世界的一歩を踏み出せずもがいていた。多様な要素を飲み込んだエクストリーム・メタル・バンドとしてスタートしつつも、そのカテゴリーにとどまることのなかったオーペスは、2001年リリースの『ブラックウォーター・パーク』をもって、世界中のメタル・ファンから注目を集める存在となる。20年前の本5thアルバムは、ミカエル・オーカーフェルトにとってどのような作品だったのだろうか。

『ブラックウォーター・パーク』期のラインナップ：
マーティン・メンデス、マーティン・ロペス、ピーター・リンドグレン、ミカエル・オーカーフェルト　L to R

1990年にミカエル・オーカーフェルトがオーペスに加わったとき、彼の頭のなかは夢で一杯だった。彼はデス・メタルや“絶望的に知られていない”プログレのレコードが大好物だったが、その人格形成期にはヘヴィメタルがスタジアムをいっぱいにし、世界を征服していたから、非現実的な夢を見ていたのだ。

だが10年経っても、オーペスはスタジアムでプレイすることはなかった。それどころか、パブすら一杯にしていなかった。“俺たちの初めてのヘッドライナー・ショウは、ハイ・ウィカムのホワイト・ホースというところだった。おじいさんが犬を連れてきていて、まるでバッド・ニュース（※イギリスのテレビ番組）みたいだったよ！”とミカエルは言う。

2001年、オーペスは5枚目のアルバムの制作を進めていた。それまでのアルバムも“ジャンルを越えたエクストリーム・メタル”として評論家からは高い評価を受け、カルト的な評判となっていたが、“お金でいっぱいのプール”や“数台のロールスロイス”といった彼の子供の頃の夢に見合うものではなかった。

“だけど多分、最初の契約書にサインをするときに疑うべきだったんだ。なんてったって、ボイラー室でサインをしたんだからさ！”と彼はクスクス笑う。“俺たちは無名でハングリーだったから”。

名声や栄光に邪魔されることなく、オーペスは最初の10年間、曲を書き、パーティに行き、ときどきライヴをやりながらホームタウンであるストックホルムで過ごす。だが、反対側の沿岸部であるヨーテボリでは、メロディック・デス・メタルが嵐を巻き起こそうとしていた。

“ほとんど競争みたいになっていた”とミカエルは振り返る。“みんな新しい影響を見つけようとしていたんだ。イン・フレイムスがアコースティック・パートを取り入れたのを聴いたときのことを覚えていて、「あのクソ野郎ども！」なんて思ったね。彼らは俺たちのサウンドをパクろうとしてるって。実際のところ、おそらく彼らは俺たちのことなんて聴いたことすらなかっただろうけれどさ！　どこかのバンドが斬新なことをするたびに、もっと先をいかなくちゃ

“BLACKWATER PARK WAS OUR LAST HURRAH”

『ブラックウォーター・パーク』は最後の作品になるはずだった。

――ミカエル・オーカーフェルト

スティーヴン・ウィルソン：成功をもたらす男

とストレスを感じていたから。「ほかのバンドが３分の曲をやるなら、俺たちは30分の曲をやらなくちゃ」って"。

革新の波に取り憑かれ、初期オーペスのブラック／デス・メタルの要素は、フォーク、そしてプログレからドゥームといったあらゆるものと一緒に鍋のなかへ放り込まれ、多層で複数の意味を持つ究極のスープへと融合するまで煮込まれた。だが、実際に自分たちの音楽を大衆に届けられなければ、何の意味もない。"アグレッシブ"な交渉ののち、オーペスは新しいレーベル［ミュージック・フォー・ネイションズ］と契約した。

"ヤツらにはダマされたよ！"とミカエルは大声をあげる。

"［ピースヴィル］とは５～６枚の契約で、まだ１枚目を出したところだった。だけど、ある日ハミー（ポール・ハルムショー／ピースヴィルの創立者、オーナー）が電話をかけてきて、彼は「ミュージック・フォー・ネイションズが、自分たちがオーペスと契約できないのなら、ピースヴィルへの支援を打ち切ると脅してきた」と言うんだ。俺はとても忠実な男だから……そのときはハミーを助けたかったんだね。それと同時に、俺のなかには「これでマノウォーやマーシフル・フェイト、メタリカと同じレーベルの所属だ」なんて考える浅はかな部分もあって。嬉しかったけど、俺たちの意見を聞かれずにことが進んだことへの怒りもあったな"。

ミュージック・フォー・ネイションズが、以前のレーベルよりもオーペスをプッシュしようとしていることが明らかとなり、駆け出しバンドとしての日々が終わりに近づいていることがわかると、そんな怒りも急速に消えていった。

"いろいろな意味において、『ブラックウォーター・パーク』は、夢を見ていた俺たちにとって最後の作品になるはずだった。このアルバムのあと、あきらめて仕事を見つけ、自立しなくちゃいけないと感じて

I ♥ Blackwater Park

オーペスの傑作は、いかにしてメタル界きっての新進気鋭バンドたちに影響を与えたのか

ユージーン・アブドゥカノフ（ジンジャー）

初めて聴いたオーペスのアルバムが『ブラックウォーター・パーク』で、完全にハマってしまったよ。まだ学生で、自分の部屋のベッドに座ってイヤフォンをして、このアルバムを聴いていた。外はヒドい雪でね。このレコードを聴くと、いつもその記憶が呼び覚まされるんだ。このアルバムはタイムマシーンでもあるんだよ！

ブレイディ・ディープローズ（コンジャラー）

曲作りという観点からすると、『ブラックウォーター・パーク』でのステップアップは、オーペスがやっていたサウンドを一気に推し進めたと言える。俺はここで始まった旅は、『ウォーターシェッド』で完成を見たと思う。違った種類の要素を集めて、それらの合計以上の何かを作るというやり方さ。

シモーネ・シモンズ（エピカ）

普通ではないスタイルを混ぜ合わせるというオーペスのユニークなやり方が大好き。イカしたリフには大興奮するけど、内面的なバラードやメランコリックなメロディには涙が出る。特に私は「ザ・ドレイプリィ・フォールズ」が大好き。オーペスの曲にはたくさんの変化があるから、全然別の曲だと思っても、実はまだ同じ曲だったりするのよ！

いたから”とミカエルは言う。“何とかしなくちゃいけないことはわかっていた。音楽的にはいまだ触発されていて、こだわってもいたけど、バンドは少々気が抜けた感じでもあって。どうにもならなかったからさ”。

ストックホルムで活気を失っていたバンドだが、ある晩ミカエルとドラマーのマーティン・ロペスが、リンケビューにあるリハーサル・スタジオに向かう途中の地下鉄で強盗に遭遇、事態はさらに悪化した。“そいつはナイフを俺の脚に当て金を要求してきた。だけど、俺たちはお金なんて持っていなかったから！”とミカエルは振り返る。“さらに多くの人が乗ってきたから、ヤツは誰かが警察を呼ぶ前に退散していったね”。

幸いなことに、バンドはすでにしばしの現実逃避の準備ができていた。新たに増築されたヨーテボリの［スタジオ・フレッドマン］を予約してあったのだ。

蓋を開けてみれば、そのスタジオで“新たなレーベルのために大躍進作をレコーディングしようとしていたスウェーデンのバンド”は、彼らだけではなかった。ソイルワークもニュークリア・ブラストのために、第二スタジオで『ア・プレデターズ・ポートレイト』の準備をしているところだったのだ。

彼らの仲は急速に良くなり、ミカエルはソイルワークのアルバムのタイトル・トラックで歌うまでに至った。セッションの間、ソイルワークのフロントマン、ビョーン“スピード”ストリッドも、『ブラックウォーター・パーク』ができあがっていく様子を聴いていた。“外にスピーカーが置いてあって、スイッチを入れると第一スタジオの様子を聴くことができた”と彼は言う。“そこに座って、リフごとに『ブラックウォーター・パーク』ができあがっていくのを聴いていたよ。ミカエルがアコースティックのパートを弾いたりね。相当のマジックだったな”。

“STEVEN WILSON WAS LIKE SOME KIND OF ELF”

スティーヴン・ウィルソンは小さな妖精のようで。

——ミカエル・オーカーフェルト

オーペスは、過去にやったことから大きな変革を行なったわけではない。だが、彼らには秘密兵器がいた。プログレのマスターマインド（そして当時ポーキュパイン・ツリーのフロントマン）であるスティーヴン・ウィルソンだ。1999 年に『スティル・ライフ』を聴いた彼は、ミカエルに連絡をしていた。喜んだミカエルは、いつかディナーに行こうという誘いを快諾。“ほぼその日のうちに、ロンドン行きの飛行機を予約したよ”と彼は笑う。

“スティーヴは俺たちとはまったく違う人物だった。とても礼儀正しくて、汚い言葉も使わなかった……それにあんなに小柄なのに、あれほど巨大な音楽を作っていたんだから！　俺たちは「一体何者なんだ？」と思ったよ。彼はまるで小さな妖精か何かのようだった！　そして彼には多くのことを教えられたよ。デス・メタルのような特定のサウンドのなかで、いかに自分が型にはまっていたのかを学んだね。スティーヴとの仕事は「あのドアを開けてみてはどうだい？」みたいな感じで、自分たちのやり方でやるべきだということがわかったんだ”。

スティーヴンの才能こそが、欠けていた要素だった。彼が加わったことで、オーペスはジャンルやスタイルを知的に結合させるのと同時に、恐ろしいほどブルータルなパッケージへと固めるという、彼らの音楽的野望を達成した。

“デス・メタル・シーンにとっては頭でっかち過ぎたほどさ！”とビョーンは笑う。“本当に新しい表現だと感じられるような美しい感覚があった。彼らは『ブラックウォーター・パーク』で本当にステップアップしたよ。まるでサイモン＆ガーファンクルとモービッド・エンジェルを混ぜ合わせたような作品さ”。

ヨーテボリから戻ると、オーペスは新しいサウンドを早く聴かせたいと、ストックホルムのメランコリック・メタラーで親友バンドでもあるカタトニアのメンバーに会った。“俺たちはよく会っていて、ビールを呑んで、レコーディングしたばかりのアルバムを聴いたも

のさ”とカタトニアのフロントマン、ヨナス・レンクスは振り返る。“あれを聴いて、「これは傑作だ」と思ったことを覚えているな”。

ミュージシャン仲間からのお墨つきをもらい、そこからすぐにプレスからの称賛が続いた。まもなく初めての海外ツアーが決まった。アモルフィスをサポートするツアーで、その後アメリカではネヴァーモアのサポートもした。

“ステージに上がって、何を期待すればいいのかわからなかった”とミカエルは認める。“それ以前にアメリカで一度だけショウをやったことがあって。ミルウォーキーでのフェスティバル（《ミルウォーキー・メタル・フェスト》）で、あれは素晴らしかった。俺たちのことなんて誰も知らないと思っていたけど、みんな大暴れだった。最終的には自分たちが主役になったように感じたよ。毎晩３～４曲しか演奏しなかったけどさ”。

その秋、バンドは初のヘッドライナー・ツアーのために戻ってきた。カタトニアを引き連れ、ヨーロッパ、そしてイギリスでプレイ。エキサイティングではあったが、やはり彼らはまだメジャー・リーグで成功したわけではなかった。

“俺たちは３～４回のギグのため、一緒にポーランドに行ったんだ”とヨナスは言う。“スウェーデンからフェリーでグダニスクに行って、そこにバスが迎えに来ているだろうと期待していた。ところが到着してみると、実際は電車移動だとわかって！　カタトニアもオーペスもブレイク寸前だったけど、まだそのレベルにはいっていなかったんだね。乗った電車が混んでいて、ずっとトイレまわりで立っていなくちゃいけなかったことを覚えているよ”。

ドイツの無名プログレ・バンドにあやかって、“ブラックウォーター・パーク”と名づけられたこのアルバムは、新たなオーディエンスを開拓。オーペスはエクストリーム・メタル界における最も輝く星のひとつ、プログレ・メタルのニュー・スクールの王様という地位を固めた。“いつも「『ブラックウォーター・パーク』があなたたちの最高のレコードですか？」って聞かれるんだ。だけど、そういうわけじゃなくて……これは俺たちにとって、どこででも手に入る初めてのアルバムだったから、みんなそう思うんじゃないかな”と、ミカエルは愛情を込めて言う。

“THIS GUY TOOK OUT A KNIFE AND DEMANDED MONEY”

そいつはナイフを取り出して金を要求してきた。

――ミカエル・オーカーフェルト

“ほろ苦さもあるよ。このレコードを作ったラインナップのこともよく考えるんだ。ピーター（リンドグレン）やマーティン（ロペス）はもうバンドにいない。マーティンがバンドを辞めて以来、彼とは一度も会っていないんだ。もう12年も経つし、同じ街に住んでいることを考えたらこれはクレイジーなことだよね。俺たちは友人としてもメンバーとしても親密だったから、このレコードのことを振り返るとほろ苦さがある。ドイツのバンドのことを考えたほうがマシなくらいさ”。

しかし、誤解しないでほしい。ミカエルは、オーペスの選んだ道を後悔してはいない。若く気楽だった日々は去って久しいが、20年後の今も、彼がメタル界で最も尊敬されるクリエイティブなバンドのフロントマンを務めているという事実が偉業なのだ。

彼は“おもしろいね”と黙想する。“（オーペスのマネージャー）アンディ・ファロウに会ったとき、彼は「10年後、君たちはロイヤル・アルバート・ホールでプレイしているよ」なんて言っていた。馬鹿なヤツだと思ったけど、とんでもない。俺たちは実際にそこで演奏したんだからね！　ウェンブリーでもやったし、それからブラック・サバスやラッシュのようなバンドとも一緒にやった。美しい瞬間は本当にたくさんあったよ。ああいった伝説の場所……そこに行くとたくさんの人がいる。まったく最高だよ”。

METAL HAMMER JAPAN

THE REVIEWS

NEW NOISE P.112
これが次代を彩る注目の激音だ！

DISC REVIEWS P.116
８月１日～ 10月31日リリースの新作をピックアップ！

METAL NEW GEAR P.122
メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

SAKI×SLIPKNOT&SCORPIONS WHISKEY P.126
スリップノット＆スコーピオンズのオフィシャル・ウイスキーを SAKI がテイスティング！

Special Presents!

メタルハマー・ジャパン・オリジナルのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［12月10日（金）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①デーモン閣下サイン入り
聖飢魔Ⅱハンガー・セット
＜1名様＞
※各構成員デザインですが、サイン入りは閣下のみとなります

②人間椅子オリジナルＴシャツ
＜3名様＞
※ S ／ M ／ L でサイズをご指定ください
※デザインはサイズによって異ります

③EYE＆RIO（Mary's Blood）
サイン色紙
＜2名様＞

④レイザーラモンRGサイン入り
METAL HAMMER JAPAN手ぬぐい
＜2名様＞
※デザインはランダムとなります

⑤SAKI（Mary's Blood ／ NEMOPHILA）
サイン色紙
＜2名様＞

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

海外シーンではすでに頭角を現わし
本邦でのブレイクも虎視眈々と狙うバンドたち。
そんな次代を彩る注目の激音をピックアップ！

THE L.I.F.E. PROJECT

ザ・ライフ・プロジェクト

ストーン・サワーのギタリストが率いる新デュオが始動 インパクトのある女性ヴォイスとともに独自の道を切り開く

『The L.I.F.E. Project - EP』

コリィ・テイラーがスリップノット以前から動かしてきたストーン・サワーは、スリップノットが巨大化したのちは、その一連のツアーを終えた休止期間にて活動してきたバンドだ。しかし2019年に彼がソロ活動を始動させたことで、活動休止は長期化を余儀なくされた。

そこでストーン・サワーが結成された1992年からのギタリストであるジョシュ・ランドは、それまでの間に書き溜めてきた曲をもとに、女性シンガーとの新たなるバンド、ザ・ライフ・プロジェクトを始動させた。

セルフ・タイトルEPはストーン・サワーのストレートなハードロックとは一線を画し、彼のさらなるクリエイティブさが爆発している。その原動力であるカサンドラ・カーソンとは知人を介して知り合い、彼女のパワフルな歌唱は、グルーヴィにドライブするエッジの利いたサウンドをさらに彩っている。

ジョシュはこれまでのプロジェクトとは異なるものを目指していた。*“女性シンガーを求めていた。男性シンガーだと、どんなに優れていてもコリィと比べられてしまうわけで、それは敵いっこないしフェアじゃないからさ。しかしカサンドラはサイコーで、さらにフレッシュな観点からアプローチできるんだ”*。

*“私がやってきたPARALANDRAはクラシックなハードロックだったから、こんなにメタルなものを歌ったことがなくって。歌詞の多くは私や家族が経験してきた苦しみや困難を歌っているのよ”*とカサンドラが語るとおり、『The L.I.F.E. Project-EP』に収録されている「Purgatory」、「The Nothingness」、「A World On Fire」ではダークで不吉な世界観が繰り広げられている。

昨今のロックダウン下にて、ジョシュは制作を精力的に進めていたという。*“すでに12曲ほどのレコーディングを終えていて、ほかにもコラボレーションものとしてカバー曲にも取りかかっているんだ。これらは近々リリースすることになるだろうけど、EPになるのか、もしくはもっと録音してフル・サイズのアルバムになるのかは今のところ未定なんだよね”*と、今後の展開を教えてくれた。

FOR FANS OF：ストーン・サワー、ビヨンド・ザ・ブラック、イン・ディス・モーメント、ヘイルストーム

FROM MHJ ジョシュが立ち上げたバンドということで純粋な新人ではなく、メロディアス・ハードとも言えそうな楽曲の完成度は非常に高い。カサンドラの声は力強くハードなギターに負けないアタックがあり、ある意味コリィの面影が感じられると言えるかも？

BALA
バラ

ふたりのウーマン・パワーがダーティに魅せるスパニッシュ・グランジ・ヘヴィ

スペインのガリシア州で活動していたヴィオレッタ・モスケラ(d)とアンクセラ・バルター(g)が出会い、ふたりのブラック・サバス、L7、ジーザス・リザードへの愛をもとにバラは結成された。*"2ピースの形態でやることに迷いはなかったけど、最も困るのは意見が割れたときね。それでもこの身軽さは大きな強み"*とヴィオレッタは語る。

新アルバム『Maleza』では卓越したソングライティング・スキルにより、ストーナー、グランジ、バイオレンスな要素のすべてが音楽に落とし込まれている。ぶつかり合うリフ、頭を揺さぶるフック、そしてアドレナリンを注入するような即効性のあるロック・アルバムだ。

*"前作『Lume』は怒りを込めたアルバムだったけど、今作はポジティブでたくさんの希望が溢れるアルバムになったと思うの"*とはヴィオレッタの言葉だ。実験を重ね続けた今作では歌唱する言語を英語からスペイン語に変え、しかも一部ではガリシア語でも歌っている。*"ガリシア語って過去の言語で、歴史的に虐げられフランコ政権で禁じられたものなの。私たちはこの言語によって自分たちの歴史の価値を認めたいと思っている"*。

さらに彼女たちは女性の権利をテーマのひとつとして掲げている。*"私たちは男の世界に挑んでいる。状況も変化し続けているから悲観視するばかりじゃいられないけど、まだまだやるべきことはたくさんあると思っているわ。挑み続け、女の子たちから「あなたたちに影響されてギターやバンドをプレイするようになったのよ!」なんて言われると、とても励みになるから"*。

FOR FANS OF: マンター、ニルヴァーナ、ビッグ・ビジネス、少年ナイフ(のハード・チューン)

FROM MHJ ふたり組ではあるが、当然ながらバンド編成のサウンドを聴かせるバラ。ロー・チューニングでのリフと気だるくもハードな歌が、よりヘヴィな雰囲気を与えてくれる。スペイン語、ガリシア語での歌唱は想像以上にインパクトがあり個性的。

GHOSTS OF MEN
ゴースツ・オブ・メン

最小限のフォーマットから放たれるモダン&オルタナ・ロックンロール!

彼らの2ndアルバム『Exhale』は、クラッチのブルース・ロックやロイヤル・ブラッドのモダンでオルタナなサウンドに通じながらも、彼ら独自の新鮮さで彩られている。*"何を聴くかではなく、日々の生活で何を感じるかだ"*と語るのはギタリストのクレッグだ。

デュオという最小限のフォーマットから放たれるストレートなサウンドは、彼ら最大の強みでもある。*"もし、どちらかがシックリこなければ、それは何かを変えればいいということさ"*とドラマーのアダムは言う。さらにクレッグは*"フェスのステージに俺らふたりだけで、会場を沸き立たせるのは最高だ。マイノリティでいることも気分がいいものだね"*と笑顔を見せる。

FOR FANS OF: クラッチ、イーグルス・オブ・デス・メタル、セラピー?

FROM MHJ ストナーっぽさもある煙たいリフをくり返し、グルーヴしていくサウンドが心地いい。各パートの録音も生々しく、オールド・スタイルのヘヴィさが漂う。これは強いアルコールを嗜みながら、ダラっと脱力して楽しみたい音楽だ。

AD INFINITUM

アド・インフィニタム

*“私が憧れる時代は、王、女王、騎士たちが主役だった中世やルネッサンスの頃なの。1stアルバムではワルツっぽいヴァイブのブレイクダウンをやったけど、あれは舞踏会を意識したのよね”*と、ヴォーカリストのメリッサ・ボニーは話す。

2018年の結成以来、スイスからやって来たこのシンフォニック・メタル・バンドは、リスナーをタイム・トラベルに連れ出してきた。メリッサのヴォーカルが冴え渡り、また吠えかかるようなガテラルも披露したデビュー・アルバム『Chapter I: Monarchy』は、ダークでエレガント、そして映画のようなアレンジで溢れ、歌詞の世界観はペストや優雅なヨーロッパ王朝といった歴史上の危機や雄大な物語を題材にしている。

*“私はルイ14世の生涯にインスパイアされているけど、表現するうえではあえて抽象的に描写しているの。そうすることで例えば裏切りを表現しても、共感しやすくなるわ”*とメリッサは語る。

新型コロナ・ウィルスにより、『〜Monarchy』を引っさげたツアーは希望どおりの形では実施されなかったが、早くも彼女たちはスタジオにて次作のレコーディングを行なっている。メリッサ曰く*“歴史上の英雄かつ暴君を題材にしているけど、今はまだ秘密。もう少ししたら、ちょっとずつ情報を出していくわ”*。

退廃的な中世をインスピレーションに華麗なるシンフォニック・メタル・バンドが登場！

FOR FANS OF：ナイトウィッシュ、ビヨンド・ザ・ブラック、初期ウィズイン・テンプテーション

FROM MHJ 正統派シンフォニック女性シンガー・バンドであり、メリッサの言葉どおり、中世ヨーロッパを強く感じさせてくれるサウンド＆ルックスは、むしろ日本市場向きなのでは？と思えるほど。ゴーストのようなシアトリカルさが増せば、今後必ず人気が出るはず。

CRYPTOSIS

クリプトーシス

今年発売となった彼らのデビュー・アルバムは、最もエキサイティングな作品のひとつだ。かつてDISTILLATORの名で知られたトリオのスラッシャーは、新譜『Bionic Swarm』で未来型ブルータル・バンドに生まれ変わった。*“このアルバムにはテクニカルなギター・プレイ、レベル・アップしたソング・ライティング、近未来をテーマとした歌詞が詰まっている。俺らは常に細部にこだわっていて、オランダでは「仕事がしにくいバンド」なんて言われているんだぜ！”*と、ベーシストのフランク・テ・リエは笑う。

方向性の転換はあれど、本作はSFをコンセプトとしており、バンドに幾多もの驚異的なアイディアをもたらした。シングル「Decypher」やダークな「Prospect Of Immortality」ではストレートかつユニークなサウンドが繰り広げられる。渦を巻くようなメロトロンのサウンド、エイリアンの鳴き声のような不協和音、緻密で強烈なアンサンブルといった、彼ららしいスラッシュ・サウンドで満ち溢れているのだ。

コンセプトについてフランクは*“俺らは悪魔主義ではないし精神的に病んでもいないから、それらを題材にはできない。政治について、俺らはあまりにも意見が合わないからそれも難しいんだ。そのなかでSFだけは、俺らが存分に表現できる題材だったんだな”*。

伝統的スラッシュ・メタルから心機一転 近未来サウンドが織りなす衝撃とは！？

FOR FANS OF：レヴォケイション、Black Fast、Stortregn

FROM MHJ テクニカルなリフを混ぜつつ、激走チューンを繰り出す彼ら。息苦しそうに言葉を吐き出すヴォーカルにも、王道スラッシュらしさを感じる。ややモダンさがアップした新曲群ではあるが、それもスラッシュの範疇で……というのが嬉しい。

SANGUISUGABOGG

サングイスガボッグ

驚異的なスピードで急成長を遂げるデス・メタル界期待の新鋭バンド！

オハイオの4人組デス・メタル・バンドによる『Tortured Whole』は、彼らが規格外のバンドであることを証明した。「Menstrual Envy」や「Dick Filet」を聴けば、その理由がわかるだろう。

*“たくさんのフィーリングとグルーヴ、そしてヘンなメロディやタイム感を求めたんだ”*と話すのは、普段はマドンナとティアーズ・フォー・フィアーズを愛聴するギターのキャメロン・ボッグだ。

マリファナを題材にしたアニメ調の「Dead As Shit」を含む一連のビデオにより、ネット界隈で知られる存在となったが、それに加え奇天烈なバンド名でも注目を集めた。“sanguisuga”（ラテン語で「吸血」）とキャメロンの苗字“Bogg”を合わせた造語であり、これは本来“ひとりブラック・メタル・バンド”を目指したことに由来している。

FOR FANS OF：オビチュアリー、カンニバル・コープス、シックス・フィート・アンダー、Undergang、Phrenelith

FROM MHJ カンニバル・コープス的とも言える、ガテラルと重低音リフで攻める彼ら。テクニカルになりすぎないところも、80〜90年代前半のデス・メタル的と言えそうだ。MVにはコメディチックな要素を入れたがる傾向があるようで、そのギャップもいい味を出している。

BORSTAL

ボースタル

名バンドを渡り歩いたドラマーが帰来！新たなハードコア・プロジェクトをスタート

ディム・ボガー、クレイドル・オブ・フィルス、テスタメントのドラマーとして知られるイギリスのメタル・レジェンド、ニコラス・バーカーは、新たにボースタルのメンバーとしてハードコア界のレジェンドにもなろうとしている。

そのデビューEP『At Her Majesty's Service』にはニューヨーク・ハードコアによる影響が見られるが、「Vicious Circles」や「Karma」といった曲からは、イギリスの湿った風土にも通ずる空気感が感じられる。

*“これまでは誰かのバンドに参加することが多かったけど、メンバーとイチから作ってきたボースタルは、パーソナルで自分の子供のように感じているさ”*と、10年ほどシーンから遠ざかっていたニコラスはカムバックについて興奮気味に語ってくれた。

FOR FANS OF：アグノスティック・フロント、ヘイトブリード、スイサイダル・テンデンシーズ、Ironed Out

FROM MHJ 多くの人が想像する“ニコラスのバンド・サウンド”とは方向性がガラリと違う……とは言え、それを意識しなければ非常にカッコいいクロスオーバー系バンド。ときにスイサイダルっぽさもあり、そのあたりの軽快さと重さのバランスもイイ。

VEXED

ヴェクスド

凶猛なる女声デス・ヴォイスが現代社会の多様な問題へ牙をむく！

彼女たちの音楽にはメシュガーのようなリフ、ペリフェリーのようなテクニック、そして初期のスリップノットを彷彿させるカオス感が詰まっている。

獰猛なデビュー・アルバム『Culling Culture.』は、現代のデジタル社会のキャンセル・カルチャーに一石を投じる作品だ。*“見知らぬ他者の非難ではなく、近くの有害な人たちの排除から始めるべき。どの曲もさまざまな人のことを歌っていて、暴力的な元パートナーや権力をふりかざす人などを扱っている”*とヴォーカリストのメーガン・ターゲットは話す。

昨今のロックダウンにて*“家にいる間、何をすればいいのかわからなかったわ！　でもその反動でライヴはスゴいものになると思う！”*とメーガンは語気を強める。

FOR FANS OF：メシュガー、ジンジャー、ザイ・アート・イズ・マーダー

FROM MHJ グロウルとガテラルを切り替えるメーガンのデス・ヴォイスが何よりも武器だが、ときとしてキレイなハイ・トーンも自ら操る。曲の完成度も高いが、彼女の存在が目立つ分、リフにもうひと声のフックがあるとなお良しという気も。

『戦術』
アイアン・メイデン

ワーナー／ WPZR-30916
発売中

CD1①戦術／②戦略家（ストラテゴ）／③不吉な予感／④失われた世界でさまよう／⑤過ぎ去った未来の日々／⑥タイムマシーン
CD2①漆黒の時／②ケルト人の死／③羊皮紙／④この世の地獄

FOR FANS OF：ヘヴン・アンド・ヘル／クイーンズライチ／ラッシュ

パンデミック前に完成を見たニュー・アルバムは “近年のメイデン”らしさを満載した重厚作となった！

本号特集でのタイトルにもあるように、“約82分・10曲”という、スケールの大きい作品となった『戦術』。日本のファンにとっては、このタイトルとジャケットのエディで、すでにノック・ダウンだろう。

結論から言うと、全篇を通して“近年のアイアン・メイデンらしい”楽曲が並んだ一枚と言える。1曲目「戦術」もジックリと展開し物語を聴かせるナンバー。タイトルの影響もあるのだろう、そこには“合戦に向けて鬨の声をあげる武者”の姿が見えてきた。フロア・タムの音も、まるで和太鼓で進軍をあと押ししているかのようだ。とはいえスケーリングで“日本風・アジア風”を演出しているわけではなく、そのあたりにスティーヴ＆エイドリアンの作曲センスがうかがえる。

ギャロップ・リズムを轟かす②、曲展開で多彩なシーンを見せる④、重厚なストーリーを紡ぐ⑧や⑨（CD2の②③）……実はパンデミック前に完成を見ていた作品ではあるが、どのトラックも今の世を映し出しているようでもあり、その世界をエディはどう見ているのか。聴き込み、想像をふくらませるのに十二分なアルバムだ。　（岡見高秀）

『苦楽』
人間椅子

徳間ジャパン／ TKCA-74961
発売中

FOR FANS OF：ブラック・サバス／バッジー

ガツン！と迫る濃厚リフと シンガロングしたくなる 中毒フレーズが満載！

バンド初のライヴ映画作品『人間椅子　バンド生活三十年』に続き、2年2ヵ月ぶりとなる22thアルバムがここに到着。すでにヘヴィ・ローションで聴いている方も多いと思うが、今作はリフ重視で押しまくり、フィジカルに訴える機能美を追求した作風が多く並ぶ。また、一度聴けば鼓膜から離れないかけ声や、執拗に繰り返す歌詞を意図的に用い、現場（ライヴハウス）で映える即効性に長けたアプローチを取っているのが特徴。MV「無情のスキャット」が海外でバズり、2020年2月に行なった初のヨーロッパ・ツアーで得た経験値も生かされているに違いない。どの曲もフック抜群でパンチが効いている。

ツェッペリン風のイントロで幕を開ける冒頭曲「杜子春」は一緒に口ずさまずにはいられないし、現代のコロナ禍に一条の光を灯す最終曲「夜明け前」も白眉。さらに和嶋のバイク愛が炸裂した疾走曲「疾れGT」、ハネたリズムがユニークな「世紀末ジンタ」など、全曲早くライヴで聴きたい。傑作だ。　（荒金良介）

『オーヴァーロード』
スペクトラ

マーキー／ MICP-11638
発売中
FOR FANS OF：ボン・ジョヴィ／クレイジー・リックス

ブラジル発のメロハー・バンド！ デビュー作とは思えない上質な楽曲

本作はブラジル発のメロディアス・ハードロック・バンド“スペクトラ”のデビュー・アルバムだ。

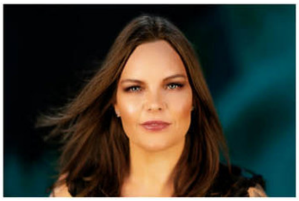
なんといってもまず注目したいのはブラジル人シンガーのBJで、ジョン・ボン・ジョヴィのような甘さを持ちつつも、パワフルで伸びやかな歌声が非常に魅力的。もちろん注目点は歌だけには留まらず、“これぞ！”というメロディアス・ハードロック・ファンのツボをしっかりと押さえてくれるような上質な楽曲が表題曲の①からノンストップで目白押しだ。

また、全楽曲に散りばめられたギター・ソロも秀逸で、速弾きあり、ライトハンドありと、テクニカルな要素が多数盛り込まれ、楽曲にさらなる盛り上がりと深みを加えている。

日本盤ではボーナス・トラックとして④のアコースティック・バージョンである⑫も収録。歪んだギターが気持ちいい本篇とはまたひと味違う、アコギと美しいコーラス・ワークが非常にエモーショナルなアレンジになっている。　(原見理香)

『ストロング』
アネット・オルゾン

マーキー／ MICP-11643
発売中
FOR FANS OF：ナイトウィッシュ／アレン／オルゾン／ハート・ヒーラー



ヘヴィメタル・ディーヴァの華麗にして勇壮なパワー・メタル作が登場！

元ナイトウィッシュの歌姫アネット・オルゾンのソロ2作目。近年はザ・ダーク・エレメントやラッセル・アレンとのアレン／オルゾンでコンスタントにアルバムを発表していたが、ソロ名義によるアルバムは『シャイン』(2014年)以来約7年ぶりとなる。

アネット・オルゾンとともに全曲を手がけるのは、フリー・フォール(ほか)のマグナス・カールソン。彼はギターとベースで参加するほか、アネットとともにプロデュースも担当する。ほかにドラムがアンダース・コラフォース、ミックスなどにヤコブ・ハンセンが参加と、マグナス・カールソンのハート・ヒーラーやアレン／オルゾンのバックアップ陣がまわりを固めている。

『シャイン』にはソフトな面もあったが、本作はマグナス得意のパワー・メタル一色で、アネットも艶やかかつパワフルな歌でそれに応え、その声に宿る魅力を主張。ブルータルなイメージのジャケットに驚くが、音楽的には華麗そのもので、この顔ぶれへの期待を裏切らないパワー・メタル作に仕上がっている。　(舩曳将仁)

『コンフォート・トゥ・ミー』
アミル・アンド・ザ・スニッファーズ

ラフ・トレード／ RT-0250CDJP
発売中
FOR FANS OF：モーターヘッド／プラズマティックス

やさぐれたエナジーで突っ走りながら甘美なキャッチーさをふり撒く秀逸作！

オーストラリア発のガレージ・パンク4人組による2ndアルバムがいい。まず紅一点のエイミー・テイラー(Vo)は、プラズマティックスのウェンディ嬢を彷彿させる肝っ玉姉さんキャラ。MVとなった④では墓地のなかで踊り狂っていて、これまた最高！

音楽的にはAC/DCやモーターヘッドなどから強い影響を受けているようで、③⑧⑪(⑪は「ドント・ニード・ア・カント[ライク・ユー・トゥ・ラヴ・ミー]」という曲名も強烈)あたりの暴走ロックンロールぶりはメタル・ファンの心も射抜くカッコよさ。また、セレモニーやパワー・トリップのようなハードコア／スラッシュ勢も通過しており、気骨溢れる姿勢が楽曲からもビシビシ伝わってくる。

ほかにポスト・パンク調の⑤、オルタナ風味の⑩とバラエティ豊かな楽曲をそろえつつ、ツボを押さえたキャッチーなセンスも抜きん出ている。そこはキャラだけではなく、魅惑のハイトーンで惹きつけるエイミー姉さんの歌声の力も大きい。パンク／メタル好きならばぜひとも聴いてほしい一枚だ。　(荒金良介)

『ゴッド・イズ・パーティイング〜神童乱舞〜』
アンドリューW.K.

キングレコード／KICP-4041
発売中
FOR FANS OF：CKY／ザ・ダークネス／ザ・ワイルドハーツ

“ロック兄貴”とのパーティは続行！ あらゆる感情をさらけ出す渾身作

激しいロック・サウンドでパーティ・チューンを歌い続ける“ロック兄貴”アンドリューW.K.が、約3年ぶりの5thスタジオ・アルバムをリリース。

彼の曲はヘヴィでありつつも、ポップでアップテンポというイメージが強いが、本作には重低音を効かせたミドル〜スロー・テンポでのスケールの大きい曲が多く入っており、これまでとは違う一面が見られる一作となった。

その異なる顔は、リード・トラック①から感じられる。冒頭のサイレン音とイントロがロック・キングの帰還を予告しているようにも聴こえ、その後に続く重低音がリスナーの耳を一気につかむ。同じく重低音フレーズが鳴り響く楽曲でも②であれば疾走感があるギター・フレーズが、⑥ならば壮大で深みがある編曲がウマ味になっているなど、その個性も多彩だ。

もちろん、彼らしい陽気なパーティ・ソングも④⑩⑪にて収録。新旧ファンともに、本作にてカリスマ・ロッカーの多様な姿に魅了されるはずだ。　（王彦蓉）

『トーン・アーティライズ』
カーカス

トゥルーパー／QATE-10130
9月17日発売
FOR FANS OF：アーチエネミー／アット・ザ・ゲイツ

メロディック・デス・メタルの オリジネイターによる、8年ぶりの新作

もともとはグチャグチャでドロドロのグラインドをやっていたカーカス。一方でビル・スティアーは生粋のNWOBHMマニアであり、アルバムを重ねるごとにその趣味が表に出るように。マイケル・アモットの加入後はそれがさらに加速。結果1993年にリリースされた4枚目のアルバム『ハートワーク』では、メロディック・デス・メタルというまったく新しいスタイルを提示。リリース時賛否両論を呼ぶほどの革新的なアルバムとなった。

前作以来8年ぶりとなる本作だが、ギタリストが変わり、元サヴェージ・メサイア、現パウンダーのトム・ドレイパーが加入。彼もまた生粋のヘヴィメタル・ギタリストであるからサウンドの変化はほぼなく、今回もオリジネイターであるカーカスにしか作れない絶妙にメロディックなデス・メタルといった仕上がり。ビルのNWOBHM趣味全開ぶりが実にカッコいい。それにしてもリフ、ギター・ソロ、歌い回し、曲構成に至るまでのすべてがバンド印なのがすごい。ファンが望むアルバムそのものと言えるだろう。　（川嶋未来／SIGH）

『コアレス』
アイ・ビルト・ザ・スカイ＆ジェイク・ホーサム・ロウ

Pヴァインレコード／PCD-22442
9月17日発売
FOR FANS OF：ジャック・ガーディナー／オワーン／インターバルズ

モダン・ギタリストによる最先端コラボ 日本盤には初のヴォーカル曲も！

メルボルンを拠点に活動するインストゥルメンタル・ギター・プロジェクト＝アイ・ビルト・ザ・スカイと、プリニのサポートで馴染み深いギタリスト＝ジェイク・ホーサム・ロウがコロナ禍の制作期間をともにし、渾身のギター・アルバムを連名でリリースした。

まず本作のサポート・メンバーが豪華で、プログレ・メタルの今を作っている実力者たちが勢ぞろいしている。加えて日本盤にはモニュメントのヴォーカル、アンディー・シゼックをゲストに迎えたトラック⑦が収録されているから、現代のヘヴィ・サウンドをリファレンスするという視点で、読者たちには“ファンか否か？”に囚われず、必聴であることを伝えたい。

6弦ドロップCのバイト感のあるキャッチーなリフから始まる表題曲①は、不安定な音階やギターのクリーン・トーンを駆使しながら緩急をつける現代メタルの代表例とも言え、本作のコンセプトどおりの一曲だろう。オーケストレーションに振り切った④もモダンなアーティストらしい作りだ。　（原田右恭）

『ヘヴィ・メタル・ネヴァー・ダイズ〜ライヴ・イン・トーキョー2021』
LOVEBITES

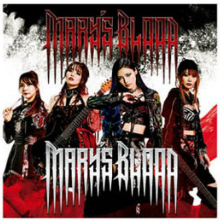
ビクター／ VIXL-351（ブルーレイ）
9 月 29 日発売
FOR FANS OF：ALDIOUS ／ Msry's Blood ／ドラゴンフォース

ヘヴィメタルを死なせてたまるか！ そんな熱い想いに溢れたライヴ・アイテム

コロナ禍の2021年に行なわれたツアーから、3月26日の東京ドーム・シティ・ホール公演を完全収録した最新ライヴ・アイテムが発売される。本来のキャパシティの半分以下で行なわれたため、観覧できなかったファンも数多くいたはずで、待望のリリースと言えるだろう。

歓声はなし、拍手のみという厳しい条件下において、いや、だからこそなのか、パフォーマンスがいつも以上にアクティブに感じられ、本作のタイトルにも込められたヘヴィメタルに対する熱い想いがヒシヒシと伝わってくる。３作目『エレクトリック・ペンタグラム』収録のメロディアスな名曲「ア・フローズン・セレナーデ」を始め、ライヴで初披露となる7曲をセットリストに組み込んだところにも、ファンに対するサービス精神が溢れている。ラスト曲前の“みんな心のなかで歌ってね！”というasami（vo）のMCに、自らと観客を奮い立たせる想いを感じて胸が熱くなった。しかし、8月17日にmiho（b）がバンド脱退を電撃発表。本アイテムは、彼女の最後の雄姿を記録した記念碑的作品ともなった。（舩曳将仁）

『Mary's Blood』
Mary's Blood



徳間ジャパン／ TKCA-74966（通常盤）
9 月 29 日発売
FOR FANS OF：アニメタル／陰陽座

コンセプトは“HEAVY METAL”！ ファン待望、原点回帰の一枚に

前作のアニソン・カバー・アルバムから約1年、待望のオリジナル・アルバムが9月29日にリリースされる。通算6枚目となる本作は、バンド名をタイトルに設定。“HEAVY METAL”をテーマに掲げた原点回帰の意欲作となった。

少し怪しげで壮大なメロディのイントロ①を経て、②では早速ヘヴィなディストーション・サウンドのギターとスピーディなドラムからスタート。今作では同様に③や⑩といった疾走感のある楽曲が非常にパワフルで、アルバム全体を盛り上げている。

そのほかにもアコギやリヴァーブを効かせたギターが心地よいバラードの⑥や、ノイジーなシンセと同じくノイジーな処理がなされたコーラス、そしてワウの効いたギター・ソロのすべてがリンクするこだわりの⑧など、じっくりと楽しみたい楽曲が満載だ。SAKIのテクニカルかつ作り込まれたギター・ソロも、もちろん全楽曲に収録されている。ぜひ繰り返し聴き込んで、彼女たちの作りあげた世界に浸ってほしい。（原見理香）

『イン・ザ・コート・オブ・ザ・ドラゴン』
トリヴィアム

ワーナー／ WPCR-18455
10 月 20 日発売
FOR FANS OF：キルスウィッチ・エンゲージ／マシーン・ヘッド

2年連続でアルバムをリリース 初期のアグレッションで強烈な一撃を

マシュー“キイチ”ヒーフィー率いるフロリダのヘヴィメタル・バンド、トリヴィアムによる10枚目のアルバム。昨年4月に前作『ホワット・ザ・デッド・メン・セイ』をリリースし、その半年後にすでに本作のレコーディングを開始していたというのだから、パンデミックのせいとはいえすごいペースである。

ここ数作では初期のアグレッションを取り戻し、スラッシュ・メタルやメタルコアっぽいカッコよさがファンの間でも評判となっていたが、今回も基本的に同じ路線。ヘヴィでグルーヴィでキャッチーなリフ満載。キイチのグロウルとクリーンの切り替えも、いつにも増して見事。ルネサンス期の絵画を思わせるようなジャケット同様、スケールの大きさを感じさせるドラマチックな曲展開に思わず興奮してしまうこと請け合いだ。

ジョシュ・ウィルバーによるミックスもパワフルかつクリアで素晴らしい。『サイレンス・イン・ザ・スノー』（2015年）以降4作連続の共同作業ということで、もはや以心伝心なのだろう。（川嶋未来／ SIGH）

Box Set

“ブラック・アルバム”30周年記念盤 53組のアーティストによるカバー・アルバムも!

メタリカが世界を変えた名盤、『メタリカ』＝“ブラック・アルバム”が発売30周年を迎え、計３バージョンのリマスター作が発売された。

なかでも特に驚きなのが、[リマスター・デラックス・ボックス・セット]（画像）の豪華さ。6LP＋14CD＋6DVDという構成で、ライヴ音源、インタビュー、未発表音源などその内容は盛りたくさん。

また上記リマスター作とは別に、53組のアーティストによる『メタリカ』収録曲のカバー・アルバム『メタリカ・ブラックリスト』も要チェック。ゴースト、コリィ・テイラー、ヴォルビート、ザ・フーなど、幅広いジャンル＆世代のアーティストが参加した、“ブラック・アルバムの影響力”を証明する一枚でもある。

なお、今作での収益はすべてチャリティ団体に寄付されるとのことで、メタリカは音楽面以外でも”デカさ”を見せてくれた。

『メタリカ（リマスター・デラックス・ボックス・セット）』
ユニバーサル／ UICY-79737
発売中

Box Set

50年の歴史が詰め込まれた マンモス級ボックス・セットが登場!

結成50周年を迎えたメタル・ゴッド、ジューダス・プリースト。その軌跡を集約したボックス・セット『50 HEAVY METAL YEARS OF MUSIC』の発売があとひと月と迫ってきた！

その中身とは……全スタジオ＆ライヴ・アルバム29枚に未発表音源13枚を加えた全42枚・443曲が収められており、さらに各メンバーの直筆サイン入り写真、ポスターなども含んだ、まさにマンモス級のパッケージとなっている。ただし全世界3000セット限定となっているので、絶対欲しい！というハードコアなジューダス・ファンは今すぐ確認することをお薦めする。

なお人気の高い9曲と未発表ライヴ音源7曲を収録したハイライト盤『リフレクションズ〜ヘヴィ・メタル50年の軌跡』も同時リリース。彼らのヘヴィメタル・ヒストリーのすべてがここに！

▲『リフレクションズ〜ヘヴィ・メタル 50 年の軌跡』
ソニー／ SICP-31477

◀『50 HEAVY METAL YEARS OF MUSIC』
ソニー／ 1943977064-2
両作 10 月 15 日発売

Remix

Ｊスラッシュ名盤『The Final Day』の最新系 フル・オーケストラによる新たなサウンドは!?

1991年に発表されたアウトレイジの代表作『The Final Day』、その30周年プロジェクトの一環として、企画盤『RE:prise〜The Final Day 30th Anniversary』（2CD＋DVD）が発売。

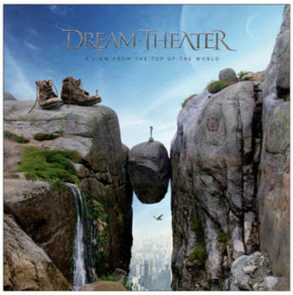
CD1は当時のプロデューサー兼エンジニアのステファン・カウフマン（元アクセプト）が本作用に新たにリミックスした音源。CD2には地元名古屋の交響楽団“Outrageous Philharmonic Orchestra”による演奏を収録。オーケストラならではの壮麗なるインスト・アレンジは爽やかでもあり、どれも新しい曲になったようで非常に新鮮だ。

DVDには『The Final Day』再現ライヴの音源を再ミックスし、初の映像化として収録。なお、デビュー35周年を控え、彼らの歴史を振り返る映画《鋼音色の空の彼方へ》は2022年夏頃公開予定。

『RE:prise〜The Final Day 30th Anniversary』
ユニバーサル／ UICN-1102
10 月 27 日発売

Coming Soon

ドリーム・シアターの最新15thアルバムが10月22日発売!



『ア・ヴュー・フロム・ザ・トップ・オブ・ザ・ワールド』
ソニー／10月22日発売予定

本誌Vol.2号にて表紙を飾ってくれたドリーム・シアターの15枚目となるニュー・アルバムが、10月22日に発売決定！　世界的パンデミックによって日本公演が2度も延期となってしまったこともあり、彼らのことを恋しく思っていた人も多いことだろう。

今回の作品は、先行公開された「ジ・エイリアン」を含めた全7曲。ニューヨーク郊外に新設された彼らの拠点“DTHQ（ドリーム・シアター・ヘッドクオーター）”にて作業がなされ、ジョン・ペトルーシがプロデュースを、エンジニアにはアンディ・スニープが就いている。本作について“自分たち自身、ファンをガッカリさせないという確かな気持ちがある”（ペトルーシ）、“どのアルバムでも1stのようなアプローチを取る”（ジェイムズ）という言葉からも、今作でも間違いないDTクオリティが期待できそうだ。

なお、ワクチン接種が進むアメリカだけあり、彼らも10月からは全米ツアーを行なう。我々も早くコロナを抑え込み、彼らの来日公演に備えなければ！

Official Bootleg

新作発売までは“公式ブートレグ”シリーズを聴きこめ!

❶『イメージズ・アンド・ワーズ～ライヴ・イン・ジャパン 2017』
ソニー／SICP-31439

❷『ア・ドラマティック・ツアー・オブ・イヴェンツ～セレクト・ボード・ミックス』
ソニー／SICP-31443～44

❸『トレイン・オブ・ソート～インストゥルメンタル・デモ（2003）』
ソニー／SICP-31474

❹『マスター・オブ・パペッツ～ライヴ・イン・バルセロナ 2002』
ソニー／SICP 31476

≫ライヴまで待てない人にはコレ！

ライヴがないのが一番寂しい……そんなファンには❶『イメージズ・アンド・ワーズ～』と❷『ア・ドラマティック・ツアー～』がお薦め。❶はタイトルどおり、彼らの代表作をまるっと全篇披露したワールド・ツアーから、日本武道館でのショウをパッケージ。収録は「プルミー・アンダー」から「ラーニング・トゥ・リヴ」まで順番どおりの全8曲だ。❷はマイク・マンジーニ初ジョイントでのツアーより。

≫貴重な音源を聴きたい人にはコレ！

本シリーズのテーマどおり“貴重な音源”が聴きたい！という人は、❸『トレイン・オブ・ソート～』と❹『マスター・オブ・パペッツ～』に手を伸ばしてみては。❸は7th作『トレイン・オブ・ソート』のインスト・デモ音源。バッキングとしてはほぼ完成形とも言える、同作の制作工程が垣間見られる一枚だ。❹はメタリカの『メタル・マスター』を完全再現したショウを収めたもの。以前自身のレーベルにてリリースされていたが、最新マスタリングが施され、より迫力の増した“スラッシュDT”を堪能することができるはず。

これらの“公式ブートレグ”シリーズを聴き込みつつ、新作＆近い将来の来日に備えるべし！

METAL NEW GEAR

試奏・文：梶原稔広
東京都出身、ALHAMBRAのギタリスト。数々のレコーディング、ライヴ・サポートを行ない、MI TOKYOにて後進の指導にも携わる。楽器メーカーの商品開発やデモ演奏のほか、ギタリスト向け教則本も執筆。
写真：鈴木千佳

CHARVEL
MJ SAN DIMAS STYLE HSH FR M QM

価格：253,000円（税込）

◀ MJシリーズはジョイント・プレートを排除した新デザイン。ヒールの角はなめらかにカットされている。

Specifications

ボディ：メイプル（トップ）、アルダー（バック）
ネック：メイプル
指板：メイプル
フレット数：24
ピックアップ：セイモア・ダンカン製SH-2n（フロント）、同Flat Strat SSL-6（センター）、同TB-4（リア）
コントロール：ヴォリューム、トーン、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：ゴトー製GE1996Tシリーズ
カラー：カリビアン・バースト
付属品：セミ・ハード・ケース

優れた機能と美しさを兼ね備えたジャパン・メイド・モデル

シャーベルから、メイド・イン・ジャパンとなる"MJシリーズ"が発表された。同ブランドを代表するサン・ディマス・スタイルをもとに、木工、パーツの組み込み、塗装に至るまでの全工程を国内工房で行なうことによって、手にした瞬間にわかる上質な仕上がりとなっているのがとても印象的。

また美しい塗装もさることながら、ギターを構えた瞬間にボディのコンターやネック・グリップが高精度で加工されていることが実感できる。初めて弾くギターとは思えないほど手に馴染むネックにはコンパウンド・ラジアスが採用され、どのポジションでもストレスのない演奏を可能にしてくれる。

HSH構成のピックアップにはセイモア・ダンカン製をチョイス。深く歪ませたアンプ・セッティングでの速弾きでも、タイトで倍音豊かなサウンドを出力してくれる。ブリッジにはゴトー製のトレモロ・タイプがマウントされており、チューニングの安定性はもちろん、手を置いたときの弾き心地を考慮したデザインになっている点も嬉しい！

●問い合わせ：フェンダーミュージック
☎0120-1945-60

IBANEZ
ICTB721-BKF

価格：195,800円（税込）

Specifications

ボディ：オクメ
ネック：メイプル&ウォルナット（5ピース／スルーネック）
指板：エボニー
フレット数：24
ピックアップ：ディマジオ製 D-Activator-7×2
コントロール：ヴォリューム、トーン、3ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：オリジナル・モノレール
カラー：ブラック
付属品：専用ギグ・バッグ

漆黒のボディに包まれた精悍&豪快なメタル・ウェポン

シリーズを一新した“IRON LABEL”からのアイスマン。ひと目でコンセプトが伝わる“メタル専用器”だが、ただの黒いギターでは終わらず、各所にてさまざまなこだわりが垣間見られる。

同社には珍しいスルーネック構造で、指板には硬質なエボニーを採用することで、立ち上がりが速くサステインの効いたサウンドを生み出してくれる。ブリッジにはモノレール・タイプが使用されており、このおかげで低音弦でのリフ・ワークが引っこまないのはメタル・ギタリストにとってありがたいところ。

D-Activator-7 ピックアップもいいチョイスだと思われ、低音成分がモタつかず、クリアな高音も出力してくれるので積極的なゲイン設定にも挑戦できる。攻撃的なルックスはもちろんだが、このような設計&パーツのセレクトにより、7 弦ギター特有の冷たく濁りがちな倍音を感じさせない整ったサウンドがなによりも特徴なのだ。

なお、冒頭でメタル専用器と言ったものの、とてもキレイなクリーン・トーンを出力してくれたことも追記しておこう。

▲ゴトー製ロック式ペグを採用。ラウドに弾いても安定した音像が得られるのは、このペグの効能でもあるのだろう。

●問い合わせ：星野楽器販売
☎0561-89-6900
©https://www.ibanez.com/jp/

JACKSON
PRO SERIES SOLOIST SL3R

価格：226,380円（税込）

Specifications

ボディ：バスウッド
ネック：メイプル
指板：エボニー
フレット数：24
ピックアップ：セイモア・ダンカン製Flat Strat SSL-6（フロント）、同SSL-6 RWRP（センター）、同TB-6（リア）
コントロール：ヴォリューム、トーン、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：フロイド・ローズ1000シリーズ
カラー：ミラー
付属品：ソフト・ケース

まばゆいミラーのなかに秘めた安定のジャクソン・サウンド

ジャクソンから、何ともド派手なルックスのソロイストが発表された。そのまばゆさに圧倒されるミラー・トップのボディだがそこはジャクソン、見た目だけではなく、確かな作りとサウンドを約束してくれる。

薄めのネックにはコンパウンド・ラジアスが採用され、シュレッダーに多い低めの弦高セッティングでのハイ・ポジションにおけるベンディング時の音詰まりを解消。SSH構成のセイモア・ダンカン製ピックアップもキャラクターがハッキリしているため、とても使いやすい印象だ。またセンター・ピックアップを使用したミックス・ポジションでは“キレイなガラス質”を思い起こさせるサウンドを出力してくれるため、分厚い音のリフものからミックス・ポジションでのメロディアスなリードへ……のような、世界観をガラッと変えることのできる武器になりそうだ。

ルックス&構造を含めガッツリ歪ませたサウンドでド派手なアクションをキメても様になるこのギター、照明の変化で無限の演出も期待できるので、これはぜひステージで使いたい一本である！

▲ブランド・ロゴもルーターによる凹凸加工で、これがまたメタルっぽく実にカッコイイ！

●問い合わせ：フェンダーミュージック
☎0120-1945-60
◎https://www.jacksonguitars.jp

STERLING BY MUSIC MAN

RICHARDSON7

価格：187,000円（税込）

Specifications

ボディ：ポプラ（トップ）、アルダー（バック）
ネック：メイプル
指板：ローズウッド
フレット数：24
ピックアップ：オリジナルJR×2
コントロール：ヴォリューム（兼ブースター）、トーン（兼コイルタップ）、3ウェイ・ピックアップ・セレクター
ブリッジ：モダン・トレモロ
カラー：ナチュラル・ポプラ・バール・バースト
付属品：ギグ・バッグ

超テク・ギタリストのシグネイチャーを クオリティを落とさずより手にしやすく

21世紀のハイテク・ギタリストとして名を馳せるジェイソン・リチャードソンの7弦モデルを紹介しよう。本器のフラッグシップ・モデルはハイ・スペックな分、どうしても高額になってしまっていたが、こちらはその基本的仕様を踏襲しつつもリーズナブルで使い勝手のいい一本となっている。

トップ材に使用されているのはポプラのバール部で、高級感を見事に再現。バックのアルダー材やロースト加工が施されたメイプル・ネックは上級機種と同じというのも嬉しい。なかでもネックはサウンドを左右する重要なポイントで、これによりハイ・ゲイン時でもクリアで立ち上がりの速いサウンドが期待できるため、ジェイソンのようなキレのいい高速リフ・ワークやインターバルの広いシュレッド・プレイなどを目指すギタリストにはピッタリ。また2点支持のトレモロ・ユニットもなめらかで、表情のあるアーミング・アプローチがしやすいはず。

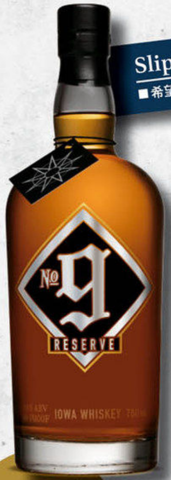
ミュージシャン・モデルで終わらず、全ギタリストにとって弾きやすさと音色を両立した7弦ギターと言えるだろう。

▲ヴォリューム&トーンにはプッシュ／プッシュ・タイプのスイッチ・ポットが採用され、ブースト&コイルタップが可能に。

●問い合わせ：コルグ／KIDお客様相談窓口
☎0570-666-569
◎https://www.sterling-bymusicman.jp/

SAKI × SLIPKNOT & SCORPIONS WHISKEY

オリンピックの熱狂も落ち着いてきた今日この頃、秋の風が心地よいそんな宵の口には、
ぜひシックにウイスキーを傾けてはいかがでしょう？　そこで今回はMary's Blood／NEMOPHILAのギタリストSAKIが、
日本初のウイスキー＆スピリッツ品評会である《TWSC》で入賞を果たしたスリップノット・オフィシャル・ウイスキーと、
スコーピオンズ・オフィシャル・ウイスキーをテイスティング！



TWSC2021
銅賞受賞

Slipknot No.9 Reserve Iowa Whiskey

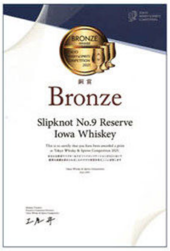
■希望小売価格：9,000円　■容量：750ml

この度《TWSC2021》の洋酒部門にて銅賞を獲得した［Slipknot No.9 Reserve Iowa Whiskey］は、アメリカはアイオワ州のシダーリッジ蒸留所で作られる“アイオワ・ウイスキー”だ。地元産のコーンを原料としたストレート・バーボン・ウイスキーと、ストレート・ライ・ウイスキーを、それぞれ４～５年熟成したのち6:4でブレンド。

アルコール度数は49.5度と一般的なウイスキーよりも高く、バンドのイメージそのままの強烈な口当たりを持つが、徐々にキャラメルのような甘みや、アプリコットのようなフレッシュさも際立ってくるため、ひと口でも重層的な旨味を楽しむことができるだろう。

なお本製品はTWSCのほか、《2020年ベスト・セレブリティ・ウイスキー》、《ジョン・バーリーコーン・アワーズ2020》にも選ばれるなど、音楽的なトピックのみならず純粋なウイスキーとしても高い評価を得ている。

TWSCとは？



“東京ウイスキー＆スピリッツ・コンペティション”が正式名称で、日本唯一のオーセンティックなウイスキー＆スピリッツの品評会。世界中から出品されたウイスキーとスピリッツ約500本を約200人の審査員が厳密なブラインド・テイスティングで審査。2021で3回目の開催となる。

Scorpions Rock'n'Roll Star Single Malt Whisky Cherry Cask

■希望小売価格：10,000円　■容量：700ml

ドイツを代表するハードロック・レジェンド、スコーピオンズの名を冠するバンド・オフィシャル・ウイスキーが、この［Scorpions Rock'n'Roll Star Single Malt Whisky Cherry Cask］。こちらはモーターヘッドのオフィシャル・リカーを多数製造するスウェーデンのマックミラ蒸留所にて作られる一品だ。

貴重な“スウェディッシュ・シングル・モルト”である本製品は、バーボン樽で６年熟成されたのち、オロロソ・チェリー樽にて追熟。さらにドイツ産のチェリー・ワイン樽で再追熟させるという手の込んだ工程を経て作られる。

そのため味わいは実にふくよかで、チェリーの甘みとバーボン樽由来のバニラ香などが複雑かつ調和的に絡み合い、心地よい香りを生み出してくれる。ストレートやロックはもちろん、フルーティで香り抜けがいいためハイボールにするのもお薦め。

正直“こんなに呑みやすいウイスキーあるんだ”って！

まずはストレートから！

［Slipknot No.9 Reserve Iowa Whiskey］はグラスを近づけただけで、甘い香りが立ってきますね。呑んでみても同じ甘さがあって、それが口のなかにずっと残るんです。度数は49.5度と高いんですけど、そういう呑みづらさは全然なくて、ストレートでもゴクゴクいける感じ（笑）。［Scorpions Rock'n'Roll Star Single Malt Whisky Cherry Cask］はウイスキーらしい鋭い感じがすごく強いんですけど、嫌な残り方ではなくて。辛いところに甘い美味みもしっかりとあって、まさにスコーピオンズのギター・トーンどおりという（笑）。

氷を入れて充分にステア！

ロックの場合は、［Slipknot～］のほうが変化した印象です。鼻からスッと抜ける感じが、ストレートのときよりも早くなって、でもちゃんと香りは残っている。だから強い匂いが苦手な人は、ロックがお薦めかな。［Scorpions～］も爽やかさが増すというか、当然ながら舌触りもめっちゃ柔らかくなった印象がありますね。

定番☆ハイボールでゴクッ♪

ハイボールは大好きでいつも頼むんですけど、どっちもすごい美味しくて、やっぱりいいウイスキーは違うなと（笑）。［Slipknot～］なんか“お水かな？”くらいの勢いでグイグイ呑めるんですけど、喉をすぎると特有の甘い香りがスッと感じられるんです。［Scorpions～］をハイボールにすると、チェリーの香りが一気に来てめっちゃめっちゃ

普段、バンドの先輩と一緒のときはハイボールばっかりずっと呑んでます(笑)。先輩とか女性男性問わず、やっぱりお酒を呑んでいる場合だと普段聞きづらいことでも聞けるじゃないですか。ちなみにめっちゃ酔っ払うと、いろんな人にくっつくらしい(笑)。

今はバーなどには行けませんけど、"テレ呑み"はよくしていて。毎回夜の7時くらいから始めるんですけど、気がついたらめっちゃ朝で、終わりどころがわからないんですよね！

美味しい。香りの良さがこんなに出るのってなかなかないので、私は[Scorpions～]はハイボールに超オススメです♪

☆☆☆☆

私はハイボールが好きだっていうのもあるんですけど、今回呑んだ[Slipknot～]も[Scorpions～]もめちゃくちゃ美味しくて、正直"こんなに呑みやすいウイスキーあるんだ"って。お店によってはエグみが残るハイボールもあったりして、それが苦手って女子もいると思うんですけど、それがどっちも全然なかったで、女の子でもなんら気兼ねなく呑めるんじゃないかと思いました。

もちろんストレートでもそれぞれの色がすごくあるし、水を入れたり氷を入れたりすることで味も変わって、"呑み方でこんなに変わるんだ"ってめちゃくちゃ驚きました。本当にどっちも家に置いときたいな思うくらい美味しかった！

都商会ロック酒通販サイト
【MIYAKO WEB CHANNEL】

※お酒は二十歳になってから。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

本日のBar ● 82渋谷宮益坂店

HUBが展開するもうひとつのブリティッシュ・パブ。常時50種類以上のウイスキーをそろえ、迷ったときにはお好きな3種類を呑み比べできるテイスティング・セット（850円）が好評。リアルエール（900円）もオススメ。現在の営業時間は下記HPにて確認。

住所 ● 東京・渋谷区渋谷1-12-2クロスオフィス渋谷1F
Web ● https://www.pub-hub.com/index.php/shop/detail/66

METAL HAMMER JAPAN
メタルハマー・ジャパン Vol.7

Rittor Music Mook

電子版　2021年10月1日　第1版発行
（底本　2021年10月1日発行　第1版1刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　野口広之

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、Eメールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.7（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話やFAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

編集スタッフ
王 彦蓉

海外渉外担当
平井 潤

表紙デザイン
村藤 治（RAD）

表紙写真
Peter Pakvis/Redferns

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井 知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

電子版制作　大日本印刷株式会社

©2021 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

▲はじめまして、編集部新メンバーの王です☆　メタル好きの一方、ネコちゃんとディズニーも好き♪　ちなみにうちの“キング”は先日2歳に！

METAL HAMMER　FUTURE

本書の記事は、Future plcグループ企業であるFuture Publishing Limited, UK 1983が著作権を保有またはライセンスを受けているMetal Hammerから翻訳または複製されています。 Metal HammerはFuture Publishing Limitedの商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
　Future plcグループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。